
Summer visit

スカフィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Summer visit

【Nコード】

N6913A

【作者名】

スカファイ

【あらすじ】

高校生のナツキは毎朝通う駅でチカンと遭遇する。そのチカンを追いかおうとした『手』が前にいた女性に当たり、彼女をホームに突き落としてしまう。当然、彼女は即死。怖くなったナツキは現実から逃げ出してしまう。ここから『恐怖』は始まった。

プロローグ

「別れよう…」

彼は冷たくそう言った。

私は突然そういわれた事に納得出来ず、問い詰めた。

「…なんで？…私の事嫌いになったの…？」

「ごめん…君とは合わないみたいだ…」。

悪いけど俺と別れてくれ…急な話ですまないが…」

「いつ…いやよっ！絶対別れたくないっ！」

私は何度も彼に「別れたくない！」と言い続けたが、最後の最後まで彼には伝わらなかった。

私と彼の関係はその日終止符を打った。

…あれから何日経つだろう…。

私は真夏日の続く街へと飛び出した。

ここ数日私は家の中にいた。

それは彼と別れたショックからか…

それだけじゃなく本当に体調も良くなって…。

ふう…来ない…もう、そろそろなのに…。

…まだ来ない…もう二週間……今までこんな事なかったわ…

…まさか…うつん、そんな事あるワケがない…

そんな事…あつたら…どうなってしまうの…？

「おめでとうございます。三カ月ですねー。

…うつん、順調ですね…はい、これが母子手帳。

…これからは一人の身体じゃないんで

くれぐれも体調には気をつけて下さいね…。

あ、そうそう。今度はお父様と来て下さいねー…」

…ミーン…ミーン…

ホントにこんな事になるなんて…。

…ミーン…ミーン…

…まさか妊娠…！？

…私…どうすれば…なんで別れた後気づくのよ…！

…なんで…でも…これで…彼をつなぎ止める事できるかな…？

…とりあえず…電話だけしとくかな？

…ミーン ミーン…

プルルルルル…

出てくれるかな？やっぱり出ないかな？

プルルルルル…ガチャッ

「あつ　もしもし？」

『ただいま留守にしています。

…30秒以内にお名前と用件をお願いします…プイイイ…』

……………。

「私…奈津子…ごめんね…急に電話したりして…

あ・あの…急にこんな事言って驚くかも知れないけど…

…赤ちゃんが出来たの…あなたと…私の…赤ちゃんが今、私のお腹に…」

プイイイ…ッ…プッ…

…ツ…ツ…ツ…ツ…。

…やっぱり電話に出ないね…

…仕方ないか…ふう…

それにしても暑い…今年の夏は異常なくらい…

…ミーン…ミーン…

いくらなんでも私一人じゃ子供なんて育てられない…
でも…堕ろすなんて…殺人だもの…あの人との子供だし…
…見てみたいな…。私とあの人との子供か…ふふふ…
どんな顔してんだろ…男の子かな？それとも女の子かな？…

…ミーン…ミーン…

…いつの間にか駅に…

…え〜と… x から までは250円か…何番のホームだっけ？

…もし、彼が認知しなかったとしても私にはこの子を殺すなんて
無理よ…

…産むしかない…！

…そうよ！これからの私を全てこの子に懸けるのよ…だってあの人の
子供だもの…

『間もなく電車が到着します。危ないですから白い線から後ろに下
がって下さい…』

…ガタンガタン…

…これからよ…私の人生は…

…プアアアアアアーン

…ガタンガタン…

…この子と一緒に…！！

トンッ。

きゃっ…！

…やだ…私…誰かに押されたみたい…

…ガタンガタン…

…このままじゃ下の線路に落ちちゃう…！

…やだ…今落ちたら死ぬ…

…し…ぬ？…

…なんでよ！やっと決心したのに死ぬのよ！嫌よ！

お腹の赤ちゃんはどうなるの？

わ…誰よ…誰なの？

私を押したのは…

ホームを…

位置からしてあの女だわ…

やだ…みんな見てる

…やだ…見ないで嫌よ！

死ぬのだけは…

この子だつて…

許せない！

…あの女…

いやああーっ！！

ガタンガタンガタンガタン
ガタンガタンガタンガタン
ガタンガタンガタンガタン
ガタンガタンガタンガタン

こうして私の視界は暗闇に墜ちた…。

001 突いたその『手』

ジリリリリリリ...

「...ん...ん...」

ジリリリリリリ...

バンッ！

「...もつづるさい...この目覚まし...」

わたしは目覚ましを止めるとそのまま
頭を布団に潜り込ませた。

ガチャッ

「ほらあ、ナツキ！朝だよ！起きて！」

母がわたしを起こしに部屋にやって来た。

「ん...もう少し寝かしてよおお...」

「ダメダメ！学校に遅れるだろっ！ほらあ起きて！」

「…ん…」

「起きなさいって!」

母は怒鳴りながらわたしから布団を奪った。

「行つてきまあゝす!」

タッタッタツ…

…やばいなあ…このままじゃ電車に間に合わないかも…。

タッタッタツ…

あつ!あの人!…いつもこの時間にこの辺りを歩いてる人…

…多分、大学に通つてるのかなあ…

いつ見てもカッコイイー!あーゆうタイプの男がうちの学校にはいないからなー……。。

タツタツタツ…

…ふう。何とか電車には間に合いそうだな…え…と…サイフは…つと…。

「おじょうちゃん…」

突然、わたしの背後にいたおじさんが声をかけて来た。

「あ・はい？何か？」

「おじさんとイイ事しない…？」

「ヤ。」

わたしはすぐに無視して歩き出した。

「あ・ちよっ…こう見えてもおじさんさあ…ウマイんだよ…」

「…でもイクのは早そうですね…」

「あつははは…じゃあ試して見る…？」

「だからさっき、イヤって言ったでしょ？急いでいるんで失礼しま

す…」

「じゃあ、今度ね」

そう言つとおじさんはニコリと笑つた。

何が“今度ね”よ！誰がお前みたいなキモイ親父とヤルかよ！

…ふうゝマジ暑いなー何で今年の夏は暑いのかな？

『間もなく電車が到着します。危ないですからお乗りの方は白い線より後ろに下がって下さい』

…ガタンガタン…

ん……？

やだ…誰かが、私のお尻触ってる…。

…ガタンガタン…

…ガタンガタン…

……これってチカン？…ウソ？

…私、チカンされた事ないからちよつと嬉しいかも。

…なんて言ってる場合じゃないか…

…プアアアアアアアアアン…

…もっ…とりあえず一発殴ってやろうかな？…。

わたしはムカつきながら、相手の顔を見た。

…げっ！よく見たらさっきの親父じゃん！…

わたしはムカつきのあまり反射的に手が動いた。

「ちょっと！人のオシリ…あっ！」

トンッ。

ん？

誰かに当たった？

殴ろうとした拍子に………

わたしの目はゆっくりと前を見た。

… あっ！ … 前の人倒れかけてる…

… あのまま倒れたらホームの下に…

… だっ… だめ… 倒れないで！

… もう電車がっ！

女の方はびっくりとした顔で
こっちを見た。

… ガタン…

「ひっ…」

落ちていく女の方の顔が

一瞬にして

『鬼』の様な顔になって

… ガタン…

わたしを睨んだ。

プアアアアアアアアアアアーン

いやあああああ！！

ガタンガタン…ガタンガタン
ガタンガタン…ガタンガタン
ガタンガタン…ガタンガタン
ガタンガタン…ガタンガタン

………！！

「人が飛びこんだぞー！！自殺だ！自殺！」

「きゃあああああ…！」

「早く！駅員呼べええ！」

…ドクン…
…ドクン…

「……………」

…ドクン…
…ドクン…

「お嬢ちゃん…」

…ドクン…
…ドクン…

わたしは固まったまま動かなかつたが、
おじさんの一声で我に返った。

…ドクン…
…ドクン…

「え？あ・なに？」

…ドクン…
…ドクン…

「あんた…落ちた人に触れただろ？」

…ドクン！…ドクン！…
…ドクン！…ドクン！…

「……っっ！！」

おじさんの一言で私の耳は
自分の心臓の音しか聞こえない。

「ワシを振り払おうとしたから…」

…ドクン！…ドクン！…
…ドクン！…ドクン！…

「な・何言ってんですか…？
違いますよ…あの人…自分から落ちたんですよ！
変な事言わないで下さい！」

わたしは逃げるように走り出す。

タッタッタッ…

「あ・ちよつと…！」

…違う…！

…ドクン！…ドクン！…
…ドクン！…ドクン！…

あの人が勝手に落ちたんだ！

…ドクン！…ドクン！…
…ドクン！…ドクン！…

…私は何も関係ない…！

…そうよ…偶然なのよ！

……そうよ……。

私はただ走った。

…ドクン！…ドクン！…
…ドクン！…ドクン！…

だが、まるで暗闇の中を走ってるみたいだ。

出口のない暗闇を。

001 突いたその『手』（後書き）

これからしばらくお付き合い願います。
よろしければ感想をお願いします。

002 あかりと琴美とわた『し』。

「あゝ！夏休みなのに何で毎日学校に来て絵を描かないといけ
ないわけえ！？」

あかりは叫ぶように愚痴を言う。それを見た琴美は冷静に――

「しょーがないでしょ。コンクールが近いんだから少なくとも夏休
みの間には仕上げないと……」

「ああー！もう遊びたいよぉー。ストレスが溜まるだけじゃん！」

「……もう！あかりっていつもそう！集中力が足りないんだから……」

「そーいうアンタは集中しすぎるのよ……。……ねえ、今日ナツキ遅く
ない？」

「そーいえばそうね。でも、ナツキって時間にルーズだからいつも
の事と言えはいつもの事だよ。」

あかりと琴美はわたしの親友である。

あかりは何でもはつきりと自分の気持ちを表すタイプで、

琴美は冷静にゆっくりと自分を出すタイプ。

わたし達三人は特に共通点はなかったが、何故か仲良かった。

ガララ…。

「あ・ナツキ。今アンタの話してたんだよ。遅いなあーって…」

わたしはゆっくりと腰掛けると二人を見た。

「……え？あ・ごめんね…」

「どうしたの？何か…元気ないけど…顔色わるいよ…」

「……あ、ほら…最近の暑さでマイツてるかも。今日もすごく暑いし…。」

「ホントに暑いよね…異常気象だよ。雨だつて降らないし…そういえば近いうち給水制限するらしいよ。」

「そうなの？フロもゆっくり入れないね」

「……………」

反応のないわたしに二人は首をかしげた。

「…ナツキ…大丈夫？」

「え！？あはは…スゴイよね〜！パパイヤ鈴木の動きって…」

「誰もそんな話してないよ…」

「…え？」

「ちょっとアンタ、まじで暑さのせいで頭ヤラレちゃったんじゃないのー？」

「あかり！言いすぎよ…。」

「ううん。そうかも…ごめん…少し独りになりたい。隣の教室に行ってくる…。」

「…ナツキ？」

ガララ…ピシャッ。

「大丈夫よ、琴美。しばらく休んだら元気になるって。さ、早く絵を仕上げなきゃ」

「……うん。」

わたしは誰もいない隣の教室のドアを閉めるとすぐに深呼吸をした。

だが、さっきの出来事が脳裏によぎる。

ドクン…ドクン…

あの人…どうなっちゃったんだろう？

…死んだかな？…

ドクン…ドクン…

死んだよね…生きてるはずがない…

…やだ…なんでこんな事に…あのオヤジが悪いのよ…！チカンなんてするから…

でも、あの女の人だって…白線ギリギリに立ってる私の前で電車待ってたし…。

しかも、あのオヤジにしっかりと見られてたのもヤバイし…

警察とかに話してないかな？私の事……もし…そうなら私は捕まっちゃうのかしら？

ドクン…ドクン…

わたしは窓から外を眺めた。

夏休みだったのに運動場は部活のため賑やかだった。

………運動場にいる人達楽しそうに部活している…。
はあ……こんなんじゃ絵も描けないよ…。

わたしはゴチャゴチャしている思考を追い払うように

乱暴に首を横に振った。

…ガララ…。

「あ、琴美達かな？」

わたしはドアの方を見た。

だが、誰もいなければドアが開いた形跡さえない。

……？

周りをよく見渡したが本当に誰も居なかった。

あれ！？誰もいない…ドアも開いてない…???

…空耳だったのかな？…ま・いつか…。

そろそろ美術室に戻らないと二人に心配かけるし…。

「あ、もう六時じゃん。あたし帰るー！」

あかりが元気にそう言うのと琴美も続いて、

「私も帰る。ナツキは？」

「今日はあまり乗らないから帰ろっかなー？私も…」

「じゃあ急いで戸締まり戸締まり…！」

「また明日ねー!」

「ただいま。」

わたしは家に帰って来た。

いつもなら奥から母が返事をくれるが、今日は反応がなかった。

「……………」

「誰もいないのかな? ……めずらしい」

暗いや、電気電気…

…ふう…喉渴いた…水かジュース…。

ん?何か聞こえる…。あ・テレビがつけばなし…もう!ちゃんと消して…

わたしはテレビを消そうとテレビの前に立つと画面にはニュースが流れていた。

『今日 × 駅で飛び込み自殺があり電車に影響がありました。
自殺したと思われる女性は妊娠しており、それを苦に自殺をしたと
見られています。』

警察の調べによりますと交際相手が妊娠を認知しておらず…』

…ほらっ…やっぱり自殺だったんだ…私が殺したんじゃない…

わたしは自分に言い聞かせるように独り言を言った。

「ただいまー」

買物から帰ってくる母にわたしは

「おかえり…ねえ、出掛けるならテレビ消してってよー!」

わたしがそう言つと、母は少し不思議そうに

「ついてた?あれ?今日は一度もつけなかったけど…」

「…え?」

「……………」。

わたしと母は特に気にせず、ご飯を済ませ、あっという間に夜にな

つ
た。

003 わたしを掴む『手』。

ザアアアアアッ…

いつの間にか雨降ってたんだ？

…あゝあ、何か疲れちゃった…。色んな事あったしな…。早目に寝ようかな？

ばふっ…。

わたしはベッドに倒れ込む。

ざあああああーっ

…早く…忘れなきゃ……………。

ざああああああーっ

…ん…？

何？

…なんか聞こえる…

…え？

…何だろ？

どこ？

どこからだろ？

わたしは部屋全体に神経を集中させる。

ざあああああーっ

…下…？

下からだ…

わたしは床に耳をあてた。

………うううゝ

「え！？…こえ？…」。

ううううっ…

…母さんの声かな？

ううう…い…たい

母さん？ちよつと下に行ってみよう…

ドタドタドタ。

「母さん大丈夫？」

わたしは母のいつ居間へ駆け出して聞いた。
だが、母はお茶を飲みながらわたしを見ていた。

「…ん？何がよ？」

「あれ？さっき痛いって言わなかった？」

「…言っていないわよ…変な子ね…」

「あつれー？さっき声が聞こえたのよ…下から…」

「母さんには何にも聞こえないわよ…。何かのまちがいじゃないのー？」

「…そうなのかな？…何ともないならいいけど…じゃあ、寝るね…」

「おやすみ…」

ざああああああー

…ばたん…

何だったんだろ…？

もうー！今日の私は変だよ…早くねよ。

……。

ザアアアアアーツ

はっ……！

何か気配を感じる……

……。
周りを目で確認しても誰もいない……わたしは寝たままの体勢だった……。

え？……水が……はっ……！窓が開いてる……！

な、なんで……？

ザアアアアアーツ

ズ……ズズ……

な、何よ……何の音よ！

……！

「ううう…よくも…よくも…うう」

「だっ…誰なの？あなたは誰なのよ！」

「あた…しは…ナ…ツコ…よ…」

「…だ…れ？…」

わたしはベッドの下にいる人を見ようと首を横にしたが、頭の一部しか見えず、長い髪的女性だって事はわかった…

「…さっきあなたに突き落とされた…」

…え………！？

驚きと同時に私の真横に女性の顔があった。

「ひいつ…！」

女はいきなりわたしの腕をつかんで強くひっぱった…

…ズズズ…ッ！

いやああああっ！

叫びたくても声が出ない…

わたしはそのまま引っ張られ床に落ちた…。

ドサッ…。

「きやあああああ
」

「どうしたの？ナツキー！？」

「……え？」

気がつくと朝になっていた…。

そしてわたしはベッドの下で寝ていた…。

「夢…？」

「全くいつまでたっても寝相悪いんだから…ほらあ…今日も学校な
んだろ？」

…いつもの朝だった…

003 わたしを掴む『手』。(後書き)

ぜひ、感想下さいま『死』

004 震えた『手』

「行つてきまあす。」

わたしは駆け足で家を出る。

…ああ…やだやだ…また今日も暑いよ…

ミーン…ミーン…

……やだな…あの駅に行くなんて……

うつん、あれは私のせいじゃない…

あの人が勝手にそうしただけ…あの人が勝手に…。

色々考えてるとあつという間に駅についた。

私はビクビクしながらもいつものホームでいつもの電車を待っていた…。

「お嬢ちゃん…」

聞き覚えの声に振り向くとあのスゲベ親父がそこに立っていた…。

「何の用ですか？わたしは昨日イヤと言いましたよね？」

「あ、違っんだ…ちょっと聞きたい事があるんだ…」

何かを言いかけて言えないでいる親父にわたしは気持ちわるくなり、
すぐにでも逃げ出したくなっていた。

ガタン…

ガタン…

「電車が来たんで失礼します。」

ガッ…！

オヤジはわたしの腕を掴んだ…。

ブアアアアアアアアアーン

「ちょっと何するんですか！？離してください！離してよ！」

「…聞きたい事があるんだっ…！」

「もっやあーっ！」

震えた腕で力強く掴む親父の腕を振り払い電車に乗り込んだ。

ドアが閉まる。

だが、オヤジは今にも泣きそうな顔でドア越しに私の顔を見ていた…。

目の奥から必死に何かを訴えるように…。

な、なんなのオ？キモイよ…。

そして電車は動きだした…。

ガタン…ガタン…

学校に着くと、既にあかりと琴美が教室にいて絵を描いていた。

「あ・おはよー」

「おはよ、ナツキ」

「ねえ、ねえ、ナツキ今日ねえ、見た事ない男の子が校内ウロウロしてるのよ。見た？」

あかりはわたしを見ると妙なハイテンションで聞いて来た。

「うっん、何で？」

「あかりのタイプなんだって！」

「はあ！？そうなの？」

「見た事ないから学年が違うのかな？」

「…夏休みだから違う学校の子が来たとか？」

「何しに？」

「うっん！ミステリアスなトコが魅力的！」

「もう…あかりってば…！」

「琴美はつまらない平凡な男が好きだったけ？」

「つまらないって言わないで！別に普通でいいじゃない！普通で…
ねえ、ナツキ！」

「……………」

「ナツキ…？」

「え？ああパンチヨはズラじゃなくて植毛かもね」

「何言ってるの？ナツキ…」

「もうー！あんた昨日からおかしいよ！どうかしたの？」

「あ・ごめん。えっと何の話だっけ？」

「もう、いいよ。」

「ねえ…あたしお腹すいた…」

「もうー？でも私もすいたかも？」

「…わたしは食欲ないから二人で弁当買ってきてもいいよ。」

あかりと琴美は二人して顔を合わせた。いつものわたしならついでに行くからだ。

「…じゃあ、そうしよっか。琴美行こう！」

「うん、大丈夫？ナツキ…」

「大丈夫よ。買ってきて。」

2人はさつさと教室から出る。

ガララ…。

ボタン…。

…ふう。しかし、さつきのオヤジ何が言いたかったんだろう…。
何かに怯えてるみたいだったけど…。

カタッ。

……！？

…物音が…

…ううう…

…え？…

…ガララ…。

ドアがゆっくりと開く。

…ううう…ううう…

「だっ、だれ？……ひっ……！」

ドアには髪の長い女の人がつらめしそうにこっちを見て立っていた。

005 わたしを見つめる『目』

…ううう…ひつく…

女は肩を震わせながらゆっくりと歩いて来た。

顔は髪に隠れよく見えない…。

わたしは後ろに逃げようとしたが、身体は動けない。

…ズツ…
ズツ…

「…ひつ…」

…うううう…あうう…

「…来ないで…」

うううああああ…！

女は突然奇声をあげたー！

「…ひえ…！」

そして、私の肩にぶら下がるようにしがみついた。

「……あ……あ」

私は必死に助けを求めたが声もままならない。

女はただ泣いていた…。

その声だけが部屋中響いてる…

…ううう…つ…

「あ、あなたは何がしたいの…？」

わたしは彼女に問いかけた。

…ううう…きま……でしょ…。

「な…なに…？」

…ううう…いたい…いたいよおお…

ぐぐぐ…

女はどんどん重くなっていた…。

「お願い…離して…」

ぐぐぐ…

「…おねがい…」

…ゆるさない…

…ぐぐぐ…

…うばってやるう……たいせつなものを…

「…お…もい…」

そして彼女の青白い顔が見えた瞬間、
わたしはいつの間にか気を失ってしまった…。

「…キ！」

「…ツキ！」

…ん…

「ナツキ！」

……んんん…

「大丈夫！？ねえ！」

「…うーん…あれ？」

目を開けると、あかりと琴美が心配そうに覗き込んでいた。

「良かったあ！戻ってきたら倒れてるからびっくりしたよ…」

「私…倒れてたんだ…ふう…」

ゆっくりと体を起こす。

周りを見渡すと確かにさっきまで立っていた位置だ。

いつの間に気絶したんだろう？

わたしがボツッとしてると琴美が心配そうに口を開いた。

「ナツキ、今日はもう帰った方がいいよ。ね？そうしょ？」

気絶したものの体調は特にきつくなかったのだが、

二人があまりにも血相を変えてわたしを見るもんだから
帰ったほうが良いと考え、

「…うん…そうしょかな？」

「何か悩んでるの？あたしに出来る事なら…何でも言いなよ！」

あかりが微笑みながら言う。

「…ありがとう。あかり、琴美…。でも大丈夫。とりあえず今日は
帰るね…」

私は教室を出た…。

少し歩くと後ろを見た。

廊下がずっと続いている。

奥になればなるほど暗闇に染まる。

その暗闇が嫌な感じがして吐き気に襲われる感覚した。

私が見たモノはホントにあの女の人の幽霊なのだろうか…。
それとも私の罪悪感が作り出した幻覚なのだろうか。
…よくわからない。

学校を出ようとした時、わたしは視線を感じ後ろを振り向いた。
少し離れたトコに男子生徒が立っていて、私をジッと見つめ突っ立
っていた。

…？

…何でこっちを見てるのかしら？

わたしは目を凝らしよく見ようとしたが
真昼の日光のせいで顔がはっきり見えない。

…まっ、いつか。

わたしは特に気にする事無く学校を出た。

電車で帰るとあの駅に行かないといけないのでバスで帰る事にした。

あ、そういえば…

あかりが言っていた男の子ってさっきの人の事言ってたのかなー？

少し歩くとバス停が見えてきた。

真っ昼間なせいか誰もバスを待っていない…私は暑さでウンザリしながら近づく。

すると運良く、すぐにバスがやって来た。

ん？バスが来た！急げっ！

ガシッ！

走ろうとした瞬間、誰かに腕を捕まれた。

「乗ってはいけない。」

「え…？」

そこにはさっきの男の子が私の腕を捕まえていた。

そして先ほどと違い、顔をはっきりと確認する事ができた。

それなりに整っていて芯が強そうな雰囲気を持っている…。

そんな顔で目を離す事無くわたしをずっと見つめているので、わたしはだんだんと恥ずかしくなった。

「あ・あの…」

「バスを見てごらん」

「え？」

わたしは言われるままバスを見た。

…すると……窓側にいる長い髪の女性が目に入りわたしと目が合った。

「……………」

そう…彼女がバスに乗っていたのだ。
わたしは恐怖で声が出なかった。

005 わたしを見つめる『目』（後書き）

これからどんどん恐怖が増殖して行きます（笑）

006 ふ『し』ぎなチカラ

「うそ…」

バスはそのまま次のバス停を目指して消えていった。
わたしはただ呆然としていた。

「彼女は君を怨んでるね。 気をつけた方がいい…」

「あなたにも見えるんですか…？ あれはやっぱり本物の幽霊なの？」

「…さあ…」

「さあ… っ て見たんでしょ？ 幻覚ではないのは確かだよね？」

「うん。 そうだね。」

「ねえ… わたしはどうしたらいいの？ どうすればあの幽霊から逃げられるの…？」

「さあ…？ 俺は見えるだけで何もできないからさ。」

そう言うのと彼は歩き出した。

少し冷たい感じがしたが、同じ様に彼女が見えるという人がいるだけで

わたしは安心感でいっぱいになり、つい彼に甘えてしまった。

いつものわたしならそんな事はめったにない。

ましてや男の人に対しては…

「ねえ！お願い！家まで送ってもらえないかなー？」

彼はわたしを見るとニヤけながら、

「……それってナンパしてる？」

「ち・違うわよ！何言ってるの！あなたも見たでしょう？ホントに狙われてるのよ！」

「あははは…冗談だよ。うん、わかった。いいよ」

「ありがとう…あ、私はナツキといいます。あなたこの学校の生徒？」

「ううん、違うよ。何か引き寄せられて来たんだ…。
俺の名前はナオキ。大友直樹っていいいます。ナツキちゃんと名前似てるね。」

「あ・そうだね〜ナツキとナオキじゃ一文字違いだね！」

ナオキくんがニコリと笑うのでわたしもつられて笑った。

「ねえ、さっき何かに引き寄せられて学校に来たって言ってたけど、よくあるの？そういう事…」

「うん。たまにあるよ。例えば助けを求めている霊だとか…怨みを持っているとか。」

君みたいに助けを求めている人間にも引き寄せられる事もあるよ。」

「へええ〜。なんか…大変だね。もしかしてあなたを呼んだのは私

なのかな？」

「はは…有り得る話だよね。」

私はナオキくんのお陰でいつもの電車で帰る事にした。
もちろん家の近くまでナオキくんを送ってもらう事に…
そして、あの現場となった駅についた…。

「ここであの女の人とあったの？」

「うん！なんか強い怨念みたいの感じる？」

「……うん。」

「たしか…この辺だと思うけど…」

「あまり感じないなあ…。地縛霊ではないね。場所も移動できるから…。」

「……そう…」

「でも君と同じように助けを求めている気配は感じるんだけど。それも近くに…」

「え？うそ！？どこに？それは同じ幽霊を見たって事？」

「さあ…とりあえず探してみようか。」

わたしは周りを見渡した。でもそのような人は見当たらない。
…ってか、ナオキくんみたいな力があるわけじゃないから見つけら

れるはずがない。

「…こつちだ…」

そう言った瞬間、ナオキくんはわたしの手を掴んで引つ張った。

「…え!？」

わたしはびっくりしつつもナオキくんのなすがまま引つ張られた。

「…あつ…あの…どこまで…」

「…あの人…」

ナオキくんは一人の男の人を指差した。

「え!?! あれって…」

ナオキくんが指した相手はあの日いたチカンおじさんだった。

「知ってるの?」

「知ってるもなにも…あのオヤジのせいでこんな目に…」

「こんな目?」

「あ・いや…でも私…あのオヤジと話すのはちょっと…」

「…んじゃ、やめときますか。」

「え？やめるのー？何か話くらいは聞いた方がいいよー」

「どっちなの？君は…」

「ああ！だって気になるもの…」

「あつ！あの人見てるよ〜ん。」

「え？うつそ！げっ！」

おじさんはわたしに気付くと勢いよく走ってきた。

タッタツ…

ガッ！

そして力強く肩を掴む。

「なあ！お嬢ちゃん！君を待ってたんだ！」

「きゃっ…！」

「ちょっと、おっちゃん怖いって…」

ナオキくんはすかさずわたしとおじさんを引き離した。

「あ・すまん…そんな事より君に聞きたい事が…
最近…君の周りで変な事起きてないか？」

その質問にわたしは嫌な予感がある。

「変な事って具体的にどんな…?」

「…信じてもらえないかも知れないが…出るんだ…」

「出るって?」

「…あの女の霊が…」

「……………」

「……………」

わたしとナオキくんは言葉を失った。

007 違『和』感

おじさんはわたしの表情を察して震えながら頷いていた。

「…見たんだな？君も…はあ…そうか…と、とにかくワシは逃げる…！」

お嬢ちゃんも何とかした方がいい…！」

「あ！ちよつと！」

… たつ たつ たつ …

おじさんは振り返る事無くそのまま消えていった。

「行っちゃった…！」

「よつぽど怖いんだな。ちなみに一体なにが起きたの…？」

「え？あ…あの女の人が自殺した現場にいただけよ…！」

「それだけで君を怨まないでしょう？」

「だからあ、あの女の人がカン違いしてるのよ…！」

「はあ？」

わたしは自分でも何を言ってるのかわからなかった。
とにかくナオキちゃんと離れたかった。

「ここまでいい！ありがと。助かったわ…」

「え？あ、ちよつと！」

…やだ！あんまり深入りして欲しくない事聞くなー。
この場は逃げなきゃ…！

こうしてわたしはナオキくんから逃げ、無事に家に着いた。

「ただいま。」

「あ、おかえり。早かったね…」

「うん。…なんか乗らなくて早く帰ってきたよ。」

「…そう。母さん出掛けるけど…昼ご飯は自分で食べてね。」

「うん。行つてらっしゃい…」

ボタン

「…ふう。」

なんだかアタマがごちゃごちゃしてきた…。
わたしは部屋に入りベッドに倒れると
すぐに深い眠りに入つた…。

はっ………！

目が覚めるといつの間に朝になっていた。

「やだ。昨日の昼からずっと寝てたの！？」

確かにここんどこ、変な事起きてるからあまり寝てなかったけど…。

「いくら何でも寝過ぎよね？」

わたしは独り言を言いながら下へ降りた。

「母さん…おはよう」

「……………」

わたしは寝ぼけたながら台所にいる母に挨拶をした。

しかし、母はわたしの声に反応しない。

わたしはすぐに、また声を掛けた。

「母さん…おはよー！」

「…あつ！ナツキ…」

母はびっくりしたようにわたしを見た。

「どうしたの？ボツーとして…なんか…わたし眠り過ぎたみたいね。自分でもびっくりしたよ。とにかく腹減った！おいしいの作ってえ

ー！」

「…ナツキ、あなた…まさか…」

「…ん？なに…？」

わたしが母を見ると心配そうにわたしを見た。

「……………」

「なに？…どうしたの？」

「…なんでもない。今から何か作るうね！テレビでもみてて。」

「……………うん。」

明らかに母さんの様子はおかしかった…。

「「ごちそうさま！」」

「今日も学校？」

「うん。最近、絵もあまりススんでないから描かなきゃ。」

「そう…。」

「ねえ、母さんの口の横が赤いよ…腫れてない？」

「…あ、実は寝てる時にぶつけたのよ。かなり痛かったわ。」

「ははは…母さんもわたしと一緒にでおっちょこちよいから…」

「ナツキほどじゃないよ。ほら早く、支度なさい！」

「うん。」

こうしてわたしは家を出て、いつもの駅に行った。

そして何故か、あのおじさんもあの女の人も姿を現さずいつもの駅から無事に学校に着く事が出来た。

「おっはー！」

「あれ？今日は元気じゃん。ナツキ…」

「たくさん寝てスッキリしたの。今日から元気なナツキをよろしくう〜」

わたしは変なポーズをしたので少しの間を置き、あかりは返事をした。

「良かった。ナツキは絵が少し遅れてるからがんばらないと…」

「突っ込まないんだ？」

変なポーズをしたのが恥ずかしくなった。

「あたしひよっとしたら、ナツキは男にでもフラれたんじゃないかと思ってたよ。」

「…その前にわたし、好きな人も付き合ってる人もいないよ！」

「はぁー！これだからカワイソ！いい！？

あたし達は今、青春の真っ只中にいるワケよ！そういう時こそ、イイ男を見つけてさぁ…」

「フフ…あかりってさ昨日からこの調子なのよ。ホラ、昨日校内をウロついてた男の子に一目ボレして…」

琴美が変なテンションのあかりに笑いを堪えながら言った。

「琴美！余計な事言うんじゃないよ！それに一目ボレなんて大げさな…」

「そう言いながら、あかり赤くなってなあい？意外とウブねー」

「あは、ホントだぁー」

「なってるわいよ！」

わたしはふと、あかりの言ってた子は『ナオキくん』の事かな？と思ったが口にしなかった。

お昼。飲物を買に行ったあかりが走りながら教室に戻って来た。

「ねえ！ねえ！いたの！いたのよ！」

「誰が…？」

「昨日の男の子よ！一階の廊下歩いてた！」

「うそっ！？見てこよう！ナツキ…！」

「…うん。うん。」

わたしはあまり気は進まなかったが、とりあえず付いて行く事にした。

「ね、ね、ね、あたしは髪形おかしくない？」

あかりはかなりハイになっていた。

「ホラア！早く！」

タッタッタッ

「どこかな？」

「あっちじゃない？」

「違う！ここよ！」

「あっ…！」

「いた！あ〜ん！やっぱあたしのタイプ」

「私にはハデすぎるかも…ナツキ、どう思っ？」

「うん…うん。」

わたしの予想通り、その男の子は直樹くんでした。

007 違『和』感（後書き）

ナオキってヒマ人だよね？（笑）

008 隙間からの『め』

「あ・あの〜」

あかりが一生懸命にナオキくんに声を掛けていた。
わたしと琴美は少し離れた所から、それを見ていた。

「ちゃんと話せてるかなー？あかり。あー見えても純なトコあるからねえ」

「…そうだね」

何だかこつちまで緊張していた。
だってあかりのあんな緊張した顔見るのも久しぶりだったから。

「あつ！二人がこつちに来る…」

「え！？嘘！やだ…」

慌てる私達をよそに二人はゆっくりと歩いて来た…。

そして、

「ヤッホー 二人とも〜。しょーかいするね、こちらはナオキくん。
となり町の高校に通ってるんだって…」

「あ、初めまして琴美です…」

「初めましてナオキです」

ナオキくんは琴美に挨拶すると次にわたしを見た。

「……初めまして…ナツキです。」

わたしは思わず嘘をついてしまった…。

「……初めまして…よろしくね…」

ナオキくんはわたしに気遣ってか合わせてくれた。

「ねーねー、ナオキくんは何でここにいるのー？」

あかりは、はりきってナオキくんに質問していた。

「…うん、実は昔この辺に住んでた事があって…」

「あ・そうなんだ。」

「ナオキさんの趣味は？」

次は琴美が聞く。

「え？俺、パラパラ好き。」

「あはー！あたしもだよ！気が合っじゃん」

あかりが手を合わせながら声を張上げた。

「パラパラねえ…」

「ねー、琴美あんたもこの際だからパラパラしなさいよ」

「え？いいよ。私、アレはちょっと…」

「やってみたらわかるって！ハマるはず…」

……。

… なんだか、この三人の会話に入れなかった…。
わたしはふと窓から見える青空を眺めていた…。

……え？

… 一瞬だが、指が見えた。
わたしが窓を見た瞬間、隠れるように指は消えたのだ…。

「……………」

やっぱり…まだいるんだ…。

彼女は私を苦しませる為にいつも近くにいるんだ…。

そう思うと何だか落ち着かなくなり、この場にいる事が出来なくな
った…。

「…ナツキちゃん」

ふと、ナオキくんの声がした…。

「……はい？」

「…大丈夫だよ。落ち着いて…」

「……………」

…そうか、直樹くんにも見えてるんだっけ。わたしだけじゃないんだ…。

そう思うと何だか安心した。

「ありがとう。」

「え？何？」

あかりが質問してきた。琴美も不思議がってた…。

「あー。ナツキちゃん…俺を怖がってるから…」

ナオキくんはまた気遣ってくれた…。

「ナツキって人見しりだっけ？」

「そうなの？」

「…いや、違うけど」

二人は不思議がってたけどあまり気にしてなかった。

…そして、あつという間に夕方になり、みんなで帰る事になった…。
だけど…

「ごめん。わたしは…寄るトコあるから…」

「ナツキ？」

「ごめんね。後はみんなで楽しんで…」

そう言つて三人から急いで遠ざかった。

正直、みんなでワイワイできる気分じゃないし…

うつとしいとも思つたわたしはバス停に向かった。

もしかするとあの女がいるとも思つたが、きつとあの駅よりは安全
だろう。

…ブーン…

バスが来た。

少し不安もあつたがバスに乗る。

中は結構込んでたので私は後ろの席に座った。

……ブーン…

バスはゆっくりと学校から離れて行き家の方面へ向かっていた。
しばらく経つと、ほどよい揺れが眠気を誘い始めた。
このまま眠るとさぞかし気持ちいいだろう。

だが、それは無理だという事に気付いたのだ。

……あの女の人の鋭い視線が私を突き刺してるのだ…。

私は周りを見渡したが、ただ人々が座ってるだけ。

……はっ…！

前には座席がある。

「……………！」

さっきまで女性の頭がみえた。

でも、今は見えない。

前にいた女性は眠ってしまい、首が斜めになった為に頭が隠れたの
だろうか？

いや、違う…。前にいた女性こそがあの女の人なのだ。

だって…前の座席と座席の隙間から目が見えるから。

ずっとわたしを睨んでる…。

「……………!!」

ブウウウウウウウー

「……………」

バスは発車停車を繰り返してるが、誰も前の座席に座る事も無く、あの隙間からの『目』は瞬きすらしない。

そしてわたしの目的地である場所で停車するとすぐに席を立ち、去ろうとした。

「……………」

カタタッ

すると、前にいる女性は向きを変え、俯いたまま座っている体勢に変えていた。勿論、顔は髪で全く見えない。

わたしはすぐにバスを降りた。

「……………」

降りるとすぐに窓を見たが、座っていたはずの場所にはいない。

「……………!?!」

もう一度よく見ようとしたが、バスはそのまま動き出し去って行った。

「…………まさか！」

わたしはすぐに周りを見渡した。
だが、何処にもいない。

気持ち悪くなったわたしはすぐに家に入った。

ボタン。

009 違『和』感2

「ただいま」

「…おかえり。今、ご飯にする？」

母が奥から歩きながら言う。

「…うん。」

「どうした？元氣ないね…」

「うつん。そんな事ないよ。着替えてくるね…」

ギシギシ…

ボタン。

私は階段を上がり、自分の部屋に入る。

シーンと静まり返った自分の部屋。
はつきりいつて気持ち悪い。

……………不気味だった。

いつ、現れるかわからない…。

さっきも見てるだけだった…。

彼女は決して何かをしようとはしない。

ただそこにいるだけ…

逆にそれが余計気味悪い…。

わたしは着替えようとしてクローゼットを開けようとした…

ガッ…！

「きゃっ！」

腕をつかまれた。

その白い手はクローゼットの中からニョキつと出ている。

中は暗くて見えないが、彼女の長い髪が少しだけ見え、顔は決して見えない。

…ひいっく…

うう…ううう…

彼女のすすり泣く声だけが部屋に響いた…。

「お願い…もう…許して…わたしが悪かった…。何でもする…何でもするから…」

わたしは夢中でその見えない相手に言った…。

すると、その白い手が急に力強く引つ張った…。

「きゃっ…！」

「…いいのよ。あなたはただ生きてりゃ…」

「…えっ？」

そう言つて女の人は腕を離しクローゼットの中へ消えて行つた…。

「……………」

わたしはペタンと尻餅をついた。

突然、母がドアを開けた…。

「ねえ、ナツキ」

わたしはすぐに立ち上がる。

「…え？なに？」

「あかりちゃんから電話よ…」

「…あかりから？」

わたしは母に怪しまれないよう平常を装いながら下におり電話に出

た。

「もしもし、あかり？どうしたの？」

「あ、ごめん。急に…あたし…ヤバイかも…」

わたしはその時あかりが何を言いたいのかすぐにわかった…。

「直樹くんのこと？」

「…うん」

「…あかり好みだもんね…」

「はあ…正直マイツてる…見た目だけならともかく、趣味まで合うし…」

「いいんじゃないの？」

「そう思ってくれる？」

「うん。」

「ありがと。ただそれだけが言いたかったんだよね」

「あはは。そうなんだ…うん、わかった。じゃっ明日ね…」

電話を終えると母が言った。

「終わった？ご飯出来たよ。」

「うん。」

わたしはモクモクと、ご飯を食べていた…。

すると母が、

「あんた最近、情緒不安定なんじゃない？」

母の突然の言葉、わたしは乱暴に食べ物飲み込む。

「なに…？突然…」

「おかしいよね？最近…お母さん心配よ…」

「……？…大丈夫よ…」

私はひたすら食べる。

「なんか…失恋とか…」

「ちっ…違うわよ…」

「ホントに？」

「やだなー！違う違うー！」

「最近、お母さんねえあちこち痛いの…」

「年だからねえ」

「……それが違うのよ……」

ポタッ　ポタッ

突然、母の鼻から血が垂れてきた。

「母さん！血が出てる！」

「…気にしないで。いつもの事よ…」

「いつもって……」

わたしは母にティッシュを渡した…。

ポタッ　ポタッ

鼻血は更に増え、普通じゃなかった…。

「母さん…？」

「私は………」

「………？」

ポタポタと鼻血はご飯の上に落ち、真っ赤に染まっていた…。

「…母さん？」

「…わっ…わたしは…」

「……母さん？」

「わたしはナツコ！」

「…え？」

「ナツコよっ！」

突然、母は立ち上がりそのままテーブルの上に倒れ込んだ…！

ガシャアーン！

「きやあああーっ」

…はっ！…

私はそこで目が覚めた…。

夢だったのだ…。

…はあ…はあ…

「…夢？…はあっ…はっ…」

喉渴いてたわたしは台所に向かう…。
そこには母がいた…。

「おはよ。」

「あ、おはよう」

「最近、早起きだね？眠れないのかい？」

「…う…うん…ちょっと…」

「成長期なんだからちゃんと睡眠はとらないとねえ」

「わかってるわよ…」

わたしは母の顔をみながら返事した。
よく見ると、母の顔は何故かアザが増えていた…。

010 違『和』感3

「ナツキ、おはよー」

「おはよ。あかり…」

「どうした？元氣ないじゃん。」

あかりはわたしが元氣のない事にすぐ気づいた。

「…うん、ちょっと気になる事があって…」

うちの母がね、最近顔にアザがあるんだけど そのアザがなかなか消えないの…。

まるで、毎日誰かに殴られてるみたいなの…」

「うそ？そんなに凄いアザなの？…で、お母さんは何て？」

「たいした事じゃない…って、必要以上話してくれない…」

「ふう〜ん…よくわかんないね！そういえば今週で夏休みも終わだね…。」

そういうと、あかりはひとつ溜息をこぼした。わたしはニヤリと笑い、

「…その間に少しでもナオキくんと想い出でも作っちゃえば？」

「え…！？ちよっ…ちよっといきなり何言つのよー」

「ああ！また顔が赤くなった！あかりにはそういうキャラクター似合わないよー！」

「…それどういう意味よー！」

「あはははは…」

ガラガラ…

「よっ。」

振り向くとそこにはナオキくんが立っていた。

「ナオキくん、どうしたのー？」

わたしは会釈をした後、そう言った。

「あたしが呼んだのよ…。ごめんねー。いつも来てもらって」

「…あ・いや…俺、ヒマだしさ。」

ナオキくんは頭をポリポリしながら言った。

「全く…積極的なよね…あかりって結局は…」

琴美が小声で私にそう言っていた…。

「うん。そーだね」

わたしも笑いながら小声で答えた。

そして、昼。

「あたし、ハラ減ったあ！弁当買ってくるー。ナオキくんは？」

「俺はそこまでハラ減ってないよ。買って来たら？」

「そうしょっかなー？ねえ、琴美やナツキは？」

「私も行く。朝ご飯抜かしてきちゃったから…もう、死にそ」

「ナツキは？」

「わたしは…今、イトコだからここが終わってから食べる。」

「そう。じゃあ、ちょっと行ってくる…」

そう言つて二人は教室から出ていった…。

わたしとナオキくんは二人きりになった…。

カリカリカリ…

「……………」

わたしは意識しない様、絵を描き続けた。
すると、

「…ナツキちゃん…」

直樹くんの方から声をかけてきた。
わたしはドキドキしながら返事をする。

「え？はい？」

「あれから…彼女は出てこない？」

「…うん…はつきりとしたカタチでは…。でも、まだ怖い…」

「……うん。俺にはまだ見えるんだ…君に黒い影が…。
ちゃんとした人にみてもらった方がいいんじゃないかな？
俺は見える事しか出来ないから…」

ナオキくんは心配そうに言ってくれた。
けど、わたしは触れて欲しくないのが本音だ。

「…うん、ありがと。ちょっと探してみようかな…。
でも、それよりも最近…うちの母がおかしいの…」

「それは、彼女のせいで…？」

「…わからない。でもあの後だから…」

「…俺にはよくわからない…。
いったい…なんであの人はナツキちゃんに近づいてくるの…？」

カリカリカリ…

「…それは…」

わたしが返事に詰まってる。あかり達が帰って来た。

ガラガラ

「たっだいまー」

わたしは助かったと思いながら、あかり達を見た。

「思ったより早かったね。」

わたしより先にナオキくんが口を開いた。

「あ！それってもっとナツキと話したかったって事でしょ？」

あかりの突っ込みにナオキくんは動揺する。

「いや…そういう意味では…」

「そうよ、あかり…なんでそんな発想するわけー！？」

「ま、いつか。いったきまーす！」

「なんじゃそりゃ。」

わたし達はその日楽しく過ごした…。

「ただいま」

「…おかえり…」

母はいつものようにご飯を作っていた…。

「着替えたらご飯にするわよー」

「…うん。」

ガチャ…

「ふう…」

わたしはベッドに倒れ込む。

「……………」

部屋はひっそりと静かで少し肌寒い気がした…。

「……………」

「…うとうとうっ！」

「うああああああああ…」

「はあ…はあ…」

わたしは恐い夢で目が覚めた…。

だけどその夢の内容は全然覚えてない。

「はあ…はあ…何で覚えてないんだろ…」

わたしは汗びっしょりだったので服を着替えようとしたらカーテンから日差しが見えるのに気付いた。

「え？もう朝？わたしまた寝ちゃったんだ…」

わたしは急いで着替え下へおりた。

「うううっ」

ん？泣き声が聞こえる…。

まさか！あの女の人！？

わたしは周りを見ながらゆっくりと歩いた…。

「うううええ…」

だが、声の主は母だった…。

「どうしたの？母さん…」

「えっ！」

母はすごいびっくりした顔でわたしを見た…。

「…あ！ナツキ…起きてたんだ…。今から朝食作るから待ってな…」

母は顔を隠すように言った。だが、はつきりと見えた。母の頬にまたアザが増えていたのだ。

「ねえ…そのアザは誰にやられたの？」

「これは母さんが自分でやったんだよ。気にしないでって言ったでしょう？」

「…嘘よ！どうして教えてくれないの…？」

わたしは母の腕を掴もうとした…

「触らないでっ！！！」

「…！」

瞬間的に叫ぶ母。わたしは凍りついた。

「…あ、ホラ齒を磨いて来なさい！」

「……うん……」

母は思ったより警戒心が強い…。

一体誰に…？

やはりあの女の人の霊にヤラれてるのだろうか…？

もし、あの霊の仕業ならちゃんとした人にお祓いをしてもらわなければ…。

010 違『和』感3（後書き）

よろしければ感想お願いします。

011 あかりの『報告』

学校

「二人に話しておきたい事があるの……」

あかりが突然、真顔で言う。

「急にどうしたの？あかり……」

「そうよ……」

あかりは、一呼吸して片手を上げ、

「実は……あたし……ナオキくんに告白しまあーす！」

わたしと琴美は顔を合わせ

「……って事はまだ？」

「まだに決まってるんじゃない！あたし、そこまで積極的じゃないよ……！」

「けっこう積極的だと思うよ……」

「うんうん。」

「…嘘…、ホント？」

「ほんと（ホント）」

「もうー！二人で声揃えて言わないでよ！」

あかりは顔を真っ赤にして照れていた。

「ーでいつ？」

「…今日、部活が終わったら会う約束したの…だからそんな時に…みたいなの？あははは」

わたしはあかりの肩を掴み

「そうか…がんばれよ！あかり！」

「応援してね！ナツキ…！」

「なあんか、こっちまでドキドキ…」

「琴美も協力してね！」

あかりの異常なテンションにつられ、わたし達三人はその話で盛り上がる。

恋かあ…。

考えたらわたしはまだホントに人を好きになつた事ない気がする…。わたしにもいい人が現れるのだろうか…？

正直、人を好きになれるあかりが少し羨ましかった…。

その夜、わたしは部屋で色々考え事した。

女の人の霊や最近の母の様子、ナオキくんとの出会いなど…。
なんだか疲れる事ばかり…。

まあ、ナオキくんという男の人と友達になれた事はいいい事として…。

「はあ…」

窓からの風でカーテンが少しゆれていた。

うふふふ…。

後ろから笑い声がする。

わたしは振り向いた…。

そこにはあの人立っていた。

うふふふ。

顔は髪でよく見えないが、確かに口は笑っていた。
笑いで肩が上下に揺れている。

「…ねえ…どうしたらわたしを許してくれるの？」

わたしは冷静にその人に問い掛けた…。

いひひひ…。

「もうやめてよ!」

すると女の方は笑いながらベットの下へ潜り込んでそのまま消えた…。

「もう…何なのよ!」

突然、携帯が鳴った。

「…あかりからだ」
ピッ。

「もしもしー!あかりどうだった?告白したの…?」

『……うん…』

「ーで?」

『OKだって!あたし達付き合うことになったよ!』

「…ほんと!?良かったじゃん!」

『うん!詳しい事は明日ね!』

「わかった。わざわざありがと。」

ピッ

電話を切り、ふと後ろを向くと母が立っていた…。

「ねえ、ナツキ…。アンタ誰と話してたの?」

「え…!?誰って…今…電話してたただだよ…」

「違う…その前の事よ…あんた、この頃独り言多くない?

母さんあんたが誰かと話してる声、時々聞くよ……」

「……あ！最近、激しいの……独り言……」

「ねえ……あんた……何か見えるのかい？」

「何かって……？」

「だから普通の人には見えない何かを……」

「……幽霊とか？」

「幽霊？」

「あ！だから例えばの話よ！」

わたしはドキツとしつつも冷静を装っていた。

「あんた……見えるのかい？」

「あ……いや……」

「……正直に言っでござん？」

「それより母さんも正直に言っでよ！その顔のアザはどうしてできたのよ！」

「……だから言っただじゃない。ぶつけたのよ……」

「嘘よっ！何で隠すわけえ！？」

「…もう、いいわ。これ以上何も聞かない。早く寝るのよ…」

…ボタン…。

そういつて母は下の階に下りて行った…。

「もう！何を隠してるの…。」

翌朝、目覚めて部屋から出れば母の顔は更に赤く腫れていた…。

「母さん？ホントに大丈夫なの…？」

「……いいから、母さんに触らないで……さっさと学校に行きなさい
！」

「……うん」

012 おじさん』と『せんせい

「おはよ！ナツキ！」

あかりはとてつもなく元気だった…。

「おはよ。良かったわねー！このオ！」

わたしは、あかりの肩を軽く叩く。

「うふふ…。正直、直樹くんはナツキの事を気に入ってると思ってたから…」

OKするなんて思わなかった…」

「ええー！？なんでえ？」

「いや…何となく…」

「もう…！心配症なんだから…」

今さら、あかりと知り合う前から知ってたなんて言えなくなっ
てしまった…。

ま、言う必要もないか…。

「いいナア…。私も恋愛したいよ。」

琴美が羨ましそうに言っていた…。

「夏休みも、もう終わるし…。

絵ばかり描いてたしね。味気ないっていうか…」

「なに言ってるのよ！あんた達まだ若いんだから！」

あかりが笑いながら言っていた。

そして、その日の午後。

わたしはいつもの駅に向かって帰ろうとしたら、直樹さんとバッタリ会った。

「今、帰り？」

「うん…。そっちは今からデートなんですよ？あかりから聞いたわよ。」

「はは…。ちょっとテレくさいや。」

直樹くんは少し照れたように頭をポリポリかいた。

「口は悪いけど、あかりはいい子だから大切にしておいてね。」

「ああ…。わかってるよ…。それより君も、気をつけるよ。」

「…。うん。でも最近、あの人が何を訴えてるのかわからない。わたしを怨んでるのなら、もっとはっきりすればいいのに…。」

「…。」
「こらこら、何を言ってるの。仮にも狙われてるのは君なんだから…。」

「そうだけど…。あ！電車が来る時間だ！じゃあね！」

「…ああ。」

わたしは急いで駅に向かった…。

「おじょうちゃん…」

聞き覚えのある声にわたしはドキツとした。

「無事で何よりだ。」

その声の主は以前、駅でわたしにチカンした人だった…。

「あれ以来、あの女は現れるのか？」

「…あ…」

「…わかってる。言いたくないのは…ワシだってこの町を離れてた…。」

だがな、あの女に連れ戻された…。

…いいか！早く逃げるか、ちゃんとした霊能者に見てもらいなさい。おじさんも今からある霊能者の所へ行ってくる…。

そうだ！君にも渡しておこう。近いうちに行ってみなさい。」

そつ言っておじさんは私に地図を渡し、そのまま逃げるように去った。

「霊能者ねえ…」

そして電車の音が聞こえ、

「自殺だあー！！！」

と聞こえたのはそれから数秒後の事だった……。

自殺……！？

まっ、まさか……！

わたしは声のするホームへ走り出した。

………！！

「……うそ……」

現場はすごい生臭い臭いがした。
そこには明らかにさっきのおじさんのちぎれた衣類があり、頭の一部が半分残っていた……。

いやあああああーっ！

わたしは心の中で叫んだ……。

そして必死にその場から逃げた……。

タッタッタッ……

「はっ…はっ…」

わたしの中ですごい恐怖感が押し寄せた。

「はっー…はっー…」

あの人が…あの女の人がやったのかしら？

だとしたら…

次に殺されるのはわたし？

「はっ…はっ…」

わたしはふと自分の手に握られてるモノを見た…。

さっきのおじさんが渡してくれた地図…。

わたしはしばらくそれを見つめていた…。

「ただいま…」

わたしは夢中で家に帰って来た。

玄関まで迎えに来る母の姿が見えない。

「…？ 母さんただいま…」

わたしが居間へ向かうと見知らぬ男の人が立っていた。

「おかえり。えーとナツキちゃんだったかな？」

「あ…はい。」

「わたしはこうゆう者だが…」

そういつて渡したのは名刺だった。

その名刺には…

「精神科の…先生…ですか？」

「はい、そうです。早速ですが、最近あなたのお母さんの精神が不安定だと感じる時ありますか？」

「……あ・あります…！やっぱり母はおかしいんでしょうか？」

「…んゝ。実はお母さん自ら電話頂きまして、頭がおかしくなりそう…っておっしゃるんですよ。」

「…はあ…」

「娘さんから見てどんな風におかしいか説明してもらいたいんですよ…」

先生はタバコに火をつけながら質問してきた…。

「…一番はその顔のアザなんです。日増しに増えてる気がして…。誰かが来てる気配はないし…」

わたしは一瞬、あの女の人がやったのでは？
…と思ったのだが、説明しづらいのでいわなかった…。

「今はお母さんは薬で自分の部屋で寝ております。

あの様子だと、ここんト寝てなかったんじゃないありませんか？」

「…かも知れません。それで母は…？」

「もうしばらく様子見てみます。今日はこの辺で失礼します…」

「…あ！どうも…」

そういつて精神科の先生は帰った…。

わたしは母の部屋へ向かった。そして音を立てぬようゆっくりとドアを開けた…。

ガチャ…

母はぐっすりと眠っていた…。

一体、母に何があったのだろうか…？

精神的に不安定になるくらいだからやっぱり…

あの女の人が出るんだ…。

それしか考えられない。そして何らかの危害を加えてるんだ。アザができるくらいなもの…。

わたしはそつとドアを閉め自分の部屋に入る。

もう…全て始まっている…。いや…終わってるとでも言おうか？

とにかくあの女の人の復讐劇が起きているのだ…。

わたしは夕方に会ったあのおじさんの事をふと思い出し、また恐くなつた…。

「…はあ…はあ…誰か助けて…！」

そう強く思っても誰も助けてくれない…。

とにかくわたしは落ち着こうと必死に自分を押さえてた…。

カチャツ…

窓から音がした…。

カタタタ…

「…誰？」

カタカタカタ

カーテンの向こうで窓がカタカタ鳴ってる…。

風にしては少し力強い…。

わたしは窓に近づきカーテンを開けた…。

そこにいたものは……。

あのおじさんだった…！

「きゃっ…！」

体中から血を流し口をゆっくりパクパクさせながら窓を叩いてる…。

いや、開けようとしてるのか…？

わたしはすぐにカーテンを閉めベツトに潜り込んだ…。

カタッ…カタタッ！

おじさんの叩く音は更に強くなる！

「……ひいっ…！…！」

その時、携帯の着信音になった。

012 おじさん』と』せんせい（後書き）

まだまだ続きます！
感想よろしく！

013 泣き『叫』ぶ母

「…もしもし…」

「あ…ナツキちゃん？俺だけど…」

「ナオキくん？…うう…ううう」

わたしはナオキくんの声を聞いて思わず泣いてしまった…。

「どうした？大丈夫？…何かあった？」

わたしは上ずる声を押さえ何とか答える。

「…ううん。ごめん…なんか…あたまがおかしくなりそう…」

「…イヤな予感がして電話したんだがやはり何かあったんだ？」

「…今…窓の外に…あのおじさんが…今日…ホームで飛び込んだのよ…」

「…ひつく…それなのに…なんでいるの…？ねえ！なんでえ…」

わたしはナオキくんに八つ当たりしていた。

それでもナオキくんは冷静に、

「落ち着いて！ナツキちゃん…今から…会つか？会って話そう…」

「……………うう。」

「ナツキちゃん？」

「……………」

「ナツキちゃん？」

「あ…ごめんね…大丈夫だから…」

ちよつとびつくりしたただだから…また…今度ね…」

「あ・ちよつと…」

“ピッ…”

「…………ふう…………」

わたしは切った携帯を見つめる。

…あまり…ナオキくんに頼ってはいけない…。

だって直樹くんは…あかりと付き合ってるんだもの…勝手に二人で会うのはよくない…。

そう感じたわたしはそのまま布団に潜り込んだまま朝が来るのを待った…。

勿論、なかなか窓を叩く音はやまなかった。

翌日

目を覚ますと母が立っていた…。

「母さん…おはよ。どうしたの？」

「……………」

「母さん…？」

「……………」

…ボタン…

母は黙って部屋を出ていった…。

「…母さん…」

「ナツキ、どうしたの？ボツィとして…」

あかりの声が聞こえる。気づけば学校にいた。

「あ…うん…色々と考え事して…」

「…なんかあったらあたしに相談してよ」

「…ありがと。それより…昨日のデート楽しかった？」

「…うん！でもね、ナオキったら色々聞いてくるのよ、
ナツキや琴美の事とかも。」

「へえ…。そうなんだ…」

わたしは妙にドキッとした。

「うん…まあ…別にいいんだけどねえ。それより、ナツキ痩せたんじゃない？」

「え？ホント？それは嬉しいかも…」

「あたしは心配だよ。ねえ…マジでなにか悩みはないの？」

「…うん。大丈夫。」

ガララ…

「ねえ…ナツキ…」

琴美が昼食の買い物から戻って来た…。

「ん？」

「ナツキの母さんが廊下にいたよ…」

「…え！ウソ！？」

「ホントよ…すぐその廊下に…」
ガラッ。

わたしはすぐに席を立て廊下へ走った…！

…しかし…なんで…？なんで学校に…

…タッタッタッタ…

「…はあ…はあ…」

わたしは必死に母を探した…。

「ナツキ…」

うしろで声がした。振り向いたら母が立っていた…。

「母さん…なんで学校に…？」

「うん…あんたに話したい事があって…」

「…なに？」

「…うん。」

「…？」

「勇気を出して…言っわね…」

「……………」

「最近、母さんの顔にアザがあるの…わかるよね？」

「…うん…誰かに殴られてるんでしょ？」

「……………そうね…」

「誰に…？」

「…………あなたよ……」

「え？」

「あなたが…夜中にわたしの部屋に来て殴るのよ…！
毎日…それも毎日よ？それなのに…なんで？なんで覚えてないの？
ナツキ…！」

母はわたしの肩を掴みながら言った…。

「え…？」

「突然よ！あなたは…まるで何かにとり憑かれたように…
わたしを殴るのよ…！でもあなたは覚えてない！何故なの！？」

「わたしが？」

わたしはただ呆然としていた…。

「ナツキ…どうして…」

母はその場で崩れ落ちるように座り込み泣いていた…。

「どうして！どうしてええええええ！！」

014 わた『し』の過去

「…じゃあ…今まで…母さんは黙ってたの…？」

「……そうよ」

「…わたしが…わたしが寝てる時に…？」

…あの女…わたしが寝てる時にわたしの体を……そして母さんに…」

「…ナツキ…？」

母は不思議な顔をしていた。

「…そうか…だから最近出ないんだ…」

「ナツキ…あの女って誰の事を指してるの？」

あんたは心当たりあるのかい？」

「…母さん…ごめんね…」

今まで気付いてあげられなくて…わたしが悪いんだよね？」

「……ナツキ…私は別にお前を責める気はないよ…」。

だけど…お前の精神が少しおかしいとか…そういう意味で不安だったんだ…」

「…ごめんなさい…母さん…ごめんなさい…」

「…今日…学校終わったら…昨日の先生に診てもらおう…ナツキ…そうしょ…？」

「…うん…でも…きっと先生に診てもらっても何の解決にもならないかも…」

…うう…！…急に頭が…！」

「ナツキ…！」

「…ううう！」

わたしは突然の痛みに耐え切れず頭を押さえては座り込んだ。

「ナツキ大丈夫！？」

「あああああ！」

「ナツキ…！」

わたしの頭はカナツチにでも殴られように激痛が走った…。

そしてその激痛が増すと共に自分という存在が薄れて行くカンジがした。

母さんの声が明らかに小さくなっていく…

「ナツキ！」

ナツキ！
！」

「ナツキ…！」

「……………ひどいよ…母さん…」

「ナツキ？」

わたしはゆつくりと立ち上がりながら言う。

「ホントはわたしなんていらなかったクセに…！」

「何を…言ってるの…？」

「…だってそうじゃない！？わたしは…母さんが22の時…レイプされて出来た子供だもの…！」

「…ナツキ…」

母はわたしの発言に驚いていた。

「母さん…父さんは…ずっとそれに気付かないで死んだと思ってる？」

「…ナツキ…？」

「気付いていたのよ…！父さんは大人になってハシカにかかり、子供が出来ない体質だったから…種無しだったんだから！」

「…やめなさい！」

「…でも…父さんはそれを受け入れた…
子供ができない父さんにとっては子供はありがたかった…」

「やめなさい…！」

「…でも…やはりムリがあつたのよ…母さんをどんなに愛してても…
どこの男の子供かわからない…父さんもわたしを愛そうと必死だった！

…でもある日…父さんは自殺した…。
どんなに努力してもわたしを愛せなかった…！
心のどこかで母さんに対しても憎しみがあつた…！
その気持ちに気付いてしまったから…！」

「やめなさいって言うてるでしょう！？」

バシッ…！

わたしの頬をぶつ母の目から大量の涙が溢れていた。
それでもわたしは続ける。

「…母さんだつてそうよ…。わたしを100%愛せない！
だつて自分を犯したオトコの子供だもの…！
ホントは…ホントはわたしが憎いのよ！
わたしなんかいらないうって思ってるクセに…！」

「そんな事思つてないわ！あんたは父さんとの間に出来た子よ！
父さんは会社の経営に苦しんで自殺したの…！
あんたが言ってる事全部まちがってるわ！」

「嘘よ……わたしはちゃんと知っている！わたしをバカにしないで」！

「……あんた……ナツキの言う……あの女かい？……ナツキを返して！」

「きやははは……！心にもない事を……！」

あんたの旦那が死んだ時あんたはこの子を怨んだクセに……！

この子を殺して自分も死のうとしたクセに！ だったら死ねば？

アンタなんか生きる価値なんてないのよ！

この娘がいなけりやあたしだって死ななかつた！

早く死ね！死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね

死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね

死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね

死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね

死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね

死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね死ね

[illegible]

「いやあああああ！」

ナツキを返して！返して！」

「きやはははははははははははは！」

「ナツキイイ！目を覚ますんだよ！ナツキ！」

「きゃははははははははははははははははははははははは！」

015 母の『結』末

どれくらい時間が経ったのだろう…

わたしは我に返った…。

そこにはもう母の姿はなく、

ちょうど日が沈みかけていた…。

わたしは放心状態のまま二人のいる教室に戻った。

ガララ…

「ナツキ！あんた今までどこにいたの！？お母さんと帰ったのかと思ったわ…」

「…うん…ちょっと…」

「…とりあえず私達帰るけど…ナツキも一緒に帰る？」

琴美は心配そうに聞いてきた。

だが、あかりは

「あたしはデートだからパスね！」

「わかってるって！」

琴美がすかさず突っ込んだ。

「…わたしはゆっくり帰るから先帰ってて…」

そう言つとわたしは椅子に座つた…。

「じゃあ…帰るわね…」

「うん。明日ね…。あかりも楽しんでね…」

バタン…

「……………」

静まり返つた教室でわたしは必死にさっきの事を思い出そうとした…。

一体わたしは母に何をしたんだろう…？

何故、気付いた時に母の姿はなかったのだろうか…？

あの女の人わたしにとり憑いて何をしたんだろう…？

いくら考えてもわたしにわかるはずがなかった…。

そして、わたしは鞆からあの紙キレを取り出した…。

「今から行つてみよう…」

あのチカンおじさんからもらったある霊媒師の地図を見つめながら
呟く…。

そして、教室を出た。

わたしはバス停へ向かった。

彼女はここにも現れる事があるから不安だったが怖がつてる場合じゃないのは百も承知だ。

あの霊は母にまで忍び寄ってきて一刻を争うのだから…。バスの姿が現れるとわたしは何も考えず乗り込んだ。

そして学校と家の間の町にわたしは着いた…。

「たしか…この辺りだと思うけど…」

だが、なかなか見つからない。

この紙切れにかいてあるのは本当なのだろうか？

少しずつ不安になった頃、人とぶつかってしまった…。

「あ・すいません…」

「いえいえ、先程からウロウロしてるけど…どこかお探ですか？」

「…はい。あの、この辺に霊能者がいるって聞いたんですけど…」

わたしはその人に紙キレを渡した…。

「ああ！ここね…！でもこの霊能者はインチキよ…。行かない方があなたの為よ…」

「え！？そうなんですか！？でも…」

「…わかった。簡単にだけど私が診てあげる…」

「…え？」

「たぶん、ここに書いてる人よりは当たってると思うわ…。やってみる？」

「でも…」

「……わかった。今から言うから聞いただけ聞いてね…」

「……はあ。」

「……あなたはまず、何かに狙われてるわ」

それが、最初の一言だった。

「よく見えないんだけど…女の人だね。」

彼女は目を瞑り、手を額の上に当てる。

「その人は今、わたしの近くにいますか？」

「…何かを感じるけどそこにはいないわ…」

それから…あなたにとって悲しい事が起こるかもね…

それも近いうちに…あなたには

それを取り越えなきゃいけない試練が待ち受けてるの…」

「それが何かはわかりますか？」

「ごめんなさい…わたしの能力ははっきりした形では現れないの…。でもはずれる事はないのよ…。今のところはこれ以上はわからないから。」

わたしの名刺を渡しておくわ…」

わたしは名刺を受けとった。

名刺には名前と電話番号、『霊能力』ではなく、『超能力』と書かれてる。

「私、今から用事があるので失礼するわね…」

「ありがとうございます。」

その女の人はそのまま歩いて行った…。

わたしは紙キレに書いてある霊能者の所にも行くかどうか悩んだが、結局行かない事にした。
そしてわたしは母の事が気になって急いで家に帰った…。

「ただいま…」

「……………」

家は真っ暗だった。母からの反応がない。まだ帰って来てないのだろうか？

「母さん…！いないの？」

わたしは靴を脱ぐとゆっくりと居間に向かった。

テレビの音が聞こえる。わたしは少し早歩きになる。

「なんだ、母さんいるなら返事してよ！」

わたしは居間の電気がついてないのでスイッチボタンを押す。

カチッ。

「ひっ……」

わたしは一瞬息が詰まった。

居間で母が首を吊っていたのだ。

「……母さん……」

わたしはそれを見て静かに座りこんだ…。

そして思う。

ホントに独りぼっちなんだ…。

わたしの目からは涙がこぼれた。

015 母の『結』末（後書き）

むむ、とことん暗いですな。
感想お待ちしております。

016 訪『問』者

母が死んだ…。

先が真つ暗になった。

でも、正直悲しさよりもまた誰かを巻き添えにするんじゃないかと恐かった。

だからわたしは母の葬式が終っても家から出ようとしなかった。

誰にも会いたくなつたからだ。

勿論、学校にも…。

ピンポーン。

その音にわたしはベッドから顔を上げた。

だけどすぐ、顔を下ろした。

まだ誰にも会いたくないし…。

ピンポーン

……………。

ピンポーン

ああー！もうしつこい！うゝん…。

わたしは重い体を起こし、起き上がる。

ピンポーン

…はいはい…。

ガチャツ。

ドアを開けると、先日来ていた精神科の先生が立っていた…。先生はわたしの顔を見ると軽く頭を下げた。

「お久しぶりです。」

わたしもつられておじきをした。

「…どうも…」

「お母様が亡くなったと聞いて…線香をあげても良いかな？」

「あ・はい…。わざわざすみません…。」

先生は仏壇の前に座り母にあいさつをしていた…。

仏壇に線香をあげ終わったのを見計らってわたしは、先生に質問をした。

「先生、母から聞いていたんでしょ？わたしが母に暴力を振るっていた事…」

「…はい。だが、君は覚えてないんだってね？わたしはそう聞いたが…」

「…ええ。わたしが寝た後、行動に出るらしいんです。これは一種の夢遊病なのでしょうか？」

「…さあ…調べてみないと何とも言えないが…。色々考えられる…例えば、多重人格とか…ね？」

「…はあ…。」

「ま・一度、わたしのトコに来なさい。いつでも構わないよ」

「…はい…。あの…母はわたしの事をどう言っていました？」

「…全て私が悪いと言ってたな。私が原因でこうなったと…。」

「…父の事も？…。」

「…うむ。君にはツライ事だな。両親が自殺するとは…」

「…原因はきつと…わたしが母にひどい事を言ったと思うんです。わたしには記憶がないんですけど…。」

「…あの…催眠療法でわたしの中にある何かを呼び出す事は可能ですか？」

「…まあ…可能性としては有りかも…」

「…じゃあ、わたしが母に言った言葉とわかる可能性もあるんですよね？」

「…正直試してみないとわからないが…」

「…近いうち伺います…。その時ヨロシクお願いします…」

「待つとるよ。」

そう言つて先生は立ち上がり玄関へ向かった…。
だが、急に立ち止まりわたしを見つめる。

「…先生？」

「……はあ……はあ……」

「？ どうしたんですか…？」

「はあ……はあ……」

息が荒くなつた先生はゆっくりわたしに近づいて来た…。

「ちよつ…先生！？」

ガッ…！

先生はいきなりわたしに飛び掛かった！
わたしは思わず叫んだ。

「きやあああー」

ドスン…！

覆い被せる様に廊下にそのまま倒れた。

「はあ……かわいいな…… ああ！お前はなんて可愛いんだああー！」

先生は大声でそう言い、キスをしようとした……！

「やめてえー！何でこんな事するのぉ！！！」

「私は感じるんだよ！君との運命を……！」

君といつかはこうなるんじゃないか……ってね！なあ……お嬢ちゃん！」

「まさか……！」

その声はまさしくあのチカンおじさんの声だった……。

「気づいたか？ そうだ！ おじさんだよ！ 覚えててくれて嬉しいなあ

「あははは……！」

[illegible]

「おじさんはね！君が許せないんだよ！あの事件は君がやったんじゃないか！

「なの、君より先におじさんが死ぬのは何か矛盾してないか？
なあ！君も思うだろ？だから私が道づれにしてあげようと思ってな
！」

「いやあああっ!」

そして先生の…いや、おじさんの手がわたしの首を締めつけた…。

「やめて…う…げ」

「ははは…このまま死んだ方がいい!」

先生の腕の力は更に力強くわたしの首を締めた。

017 訪『問』者2

ピンポーン

インターホンが鳴った…。

誰が来たのだろうか…？

キリキリと締める腕、わたしは声が出ない。

ピンポーン

「だずげでええゝ…」

それでも声を出してみたが届くはずがない…。
苦しそうなわたしを見ながら笑う…先生…

「はは…君も…可愛いそうな子だよ…」

ぐぐっ…！

「はっ…はうう…」

「…はははは…」

ドンドンドン！

今度はドアを叩いてる…。

ドンドンドン！

「…うぐぐっ！」

わたしには力も意識も無くなってきた…。

ドンドンドン！

「…うっ…」

「…っ…」

…。

…。

…っ…っ…っ…

はっ…！

「…あれっ！？」

わたしはゆっくりと身体を起こした。

「…ほっ！…ほっ！」

「…大丈夫？」

「…ごぼっ！…うん…」

隣に誰かがいたのでわたしはゆっくりとよく見た。

「…え！？あ！ナオキくんっ…？」

「…よお…」

そこにいたのはナオキくんだった…。
わたしが呆然としていると微笑んだ。

「…あかりちゃんと来たんだよ。
今は買い物行ってるんだけどね。

なんか嫌な予感してさ…来て良かったよ…」

「あ…そうなんだ…わたし…」

「…うん…そこに倒れてたんだ…」

「…いや、あの…他に人はいなかったの？」

「…ううん…誰かいたの…？」

「…あ…」

わたしは立ち上がるとごまかすように

「…いいの…わたしのカン違いかも…」

わたしは何故か先生がいた事を隠した…。

だげどナオキくんはわたしの態度に気付いてか、突っ込んで来た…。

「…ねえ…なんで一人で全部抱えようとすんの？

俺達、友達だろ？大体、君はあかりちゃん達にも何も話してないじゃないか…」

「……だって巻き込みたくないもの……」

「君の気持ちわからないワケじゃないけど…何だかほっとけないよ…」

「…ごめん…でも…今は…気持ちの整理がついたらみんな話すから…」

少し変な空気になる頃、ドアが開く音と同時に声がした。

「ナツキ！」

買い物から戻ったあかりがわたしを心配そうに見ていた。

「もう！アンタは心配ばかりかけて！良かったあ大丈夫だったんだね…」

あかりは少し涙ぐみながらホッとした表情を浮かべている…。

「ごめん…」

「うつん…。大丈夫ならいいの…」

ねえ、買い物たくさんしてきたの！ご飯一緒に食べない？」

「…うん。」

こうしてわたし達は夜まで色々話しながら時間だけが過ぎて行った…。

「…じゃあ…落ち着いたらでいいから学校に来てよね？…あと何かあったら連絡してよ！」

「…うん…色々ありがとね。」

「…じゃあ…」

「ありがとう。ナオキくん…」

そして、わたし達は別れた…。

「良かった…ナツキが倒れてたの見た時はどうなるかと思ったけど…」

「そうだね。ナツキちゃんは恋人とか好きな人とかいないのかなあ…」

「…それがいないのよ。意外と男の子からモテるんだけどね。」

「…だよなー。カワイイもん。」

「ねー…って、もちろんあたしの方がカワイイでしょ！？」

「ああ！もちろんさ」

二人は軽くキスをして暗闇に消えた…。

二人が帰った後、

わたしはゆつくり風呂に入り、そして決心した…。

…彼らに立ち向かってみる事にした。

このままでは何も変わらない。

わたしなりに対策をとらなくては…。

まずその為には力を持つてる人が必要だ…。

わたしは、先日会った女性から貰った名刺を見て電話をかけた…。
携帯から電話すると、ワンコールで出てくれた。

「もしもし…」

「あの…わたし先日あなたに道でみてもらった者なんですけど…」

「…よく掛けてくれたわね。待ってたの…。

今ね…あなたに憑いてる女性なのか知らないけど『な』の文字が見えるの…」

「『な』ですか？」

017 訪『問』者2（後書き）

まだまだ話は続きます。

どうかお付き合いお願いします！

018 自『首』

- 数日後 -

今、わたしは県立図書館にいる。

あの日ホームで飛び降りがあった記事を調べる為だ。

まだ2ヶ月足らず前の事だから記事はすぐに見つけた…。

“若い女性が飛び込み！妊娠を苦に自殺か！？”

…と書かれてる…。

えつと…名前は…ないのかな…あ。

“山田奈津子”

奈津子！？『な』がつくんだ…。

やっぱりあのお姉さんが言ってた事はホントなんだ…。

しかし、妊娠を苦に…とは書いてあるから、お腹には子供がいた…。
ホントに生むつもりだったのか…死ぬつもりだったのか…

まあ、幽霊となって出てるんだから生むつもりだったのだろう…

わたしは名前から何とか住所を割り出し、彼女の家へ行く事にした…。

ここだ…。

翌日、わたしは早くも彼女の家へ来た。

…といつても彼女はもとはアパートに一人暮らしだった…。
そのアパートはとくに他の人が住んでいたので実家の方に訪ねる
事にした…。

「どなた？」

「あの…わたし亡くなった奈津子さんの友達なんですけど…線香あげてもよろしいですか？」

ドアから出で来たのは若い女性だった…。

多分、お姉さんにあたる人だろう。

わたしは友達だと嘘をつく事で家に入れてもらい、話を聞く事にした…。

「奈津子とはどういう関係で…」

「実は…うちの姉と会社の同僚でして、わたしは妹のように可愛がられてもらいました。」

「…そうなの…。たしかあの子は自分より下の子が好きでした…。
楽だからかしら？」

前に弟が欲しいって言ってましたヨ。ふふふ…」

お姉さんは遠くを見ながら話していた。

「…それである…妊娠してたってホントですか…？」

「…みたいね。正直、妹は高校卒業してからすぐに家を出て、
ほとんど会った事ないからわからないの…。

父親も誰だかわからないし…。

線香ひとつもあげに來ないところを見ると妹は遊ばれたんじゃないかな。

自宅で遺書らしきものも発見されたわ…

子供が出來た事で問題になったんでしょねえ…

でも、あの子に子供なんか育てられるのかしら…」

独り言のように言つては首を傾げていた。

わたしは変な人だなゝとは思っていたが續けた。

「じゃあ…ホントに自殺なんですか？」

「ええ…」

わたしは仏壇にある写真を見て氣になった。

「…あのゝ。写真が二つあるんですけど…」

「右が奈津子で、左が母よ…。母もね、自殺だったの…」

「え！？」

「奈津子は実はノイローゼ氣味でちょっとした事でも被害妄想に走るの…。」

だから母は毎日奈津子に苦勞してた…。ある日 奈津子はこう言つたの…

『アンタが死ねば、私は救われる』

つてね。よほどショックを受けたのか、母は首を吊つて死んだわ…」
「……………」

わたしは言葉を失った…。

「まさか…二人そろって自殺するなんてねえ…」

お姉さんは目の前にあったお茶をすすりながら言った…。

わたしは、初めて写真でだけど、奈津子の顔をキチンと見た。

美人ではないが、芯の強そうな顔をしてた

。もし彼女が、子供を産むつもりであればきつとりっぱに育てただあろう。

わたしは複雑な気持ちで奈津子さんの実家を後にした。

…彼女はわたしより五つ上の22歳。

ある小さな会社に19歳で入社し、地道ながらがんばって来た…。

そしてそこで誰かと出会い身ごもった…。

だけど認知されず自殺した…。

…そう、あの日彼女は死ぬつもりだった…遺書はあったから…。

けどわからない…彼女は何故わたしの前に現れるのか…。

わたしの母、チカンおじさんを巻き込んで来た…。

アレは明らかに怨みから来てる。

…わたしが押したから？

……彼女を？…

…じゃあ…彼女はわたしが警察に全てを話し、罪を認めれば許してくれるのだろうか……。

……そう……それが当たり前……わたしは自分が悪いと認めてない……
アレは偶然だと、事故だと……ずっと逃げてきた。

……ふと、気付くとわたしは警察署の前に立っていた……。

……ドクン……

……わたしは勇気を出して警察署の入口まで来た……

……ドクン……

……入口に立つてる警察の人と目が合う。

わたしはすぐにそらし、奥の方をみる。

そしてゆっくりと足を踏み入れたその時……！

「待てっ！こらっ！」

奥の方から男の人が走って来た……。

男の後ろには数人の警察の人が追い掛けていた……。

そして男はわたしにぶつかって来た……。

ドンッ！

「きゃっ……！」

わたしと男はその場に倒れ込んだ。

「オマエが警察に自首してもおじさんは許さないよ……」

……と、わたしの耳もとでその人は言った……。

え…！？

「こらっ！ここまで来て逃げるなっ！」

警察は男を捕まえ、奥に引っ張りこんだ…。

「くくく…」

…男はわたしをずっと見つめながら笑っていた…。

「大丈夫ですか？」

「え？」

「…あの？」

「…あ…大丈夫です！失礼します！」

わたしは振り返る事無く警察署を後にした。

「…ハア…ハア…」

逃げられない！

そう思った。

たとえ奈津子さんが許しても、あのチカンおじさんが許してくれないのだ…。

「はあ…は…ふふ…ふふふ」

わたしは急におかしくなって笑った。
だって笑うしかない。

もつどうする事もできないもの。

わたしが『死ぬ』以外に許せるものがないから…。

「ふははははは…」

翌日

わたしは学校へ行く為に身支度をした。

このまま家にいても色んな考えが頭をよぎり、独りの世界でおかしくなりそうだったから…。

わたしは軽く食事を済ませ家をあとにした…。

「はあくキモチいい… 何日ぶりだろう…こんな早くから外に出たのは…。」

わたしは独り言を言いながら学校へ向かった。

久しぶりの学校は少し緊張する…。

わたしは勇気を出して教室に入った…。

「…ナツキ…！」

あかりがわたしの名を言った途端、みんなの視線が一気にわたしに集中した…。

「おはよ…」

…わたしは自分の席に着き、カバンを置いた…。

何人かの人々がわたしに声を掛けては励ましてくれた…。

それが逆に疲れたりもしたが、素直に嬉しかったりもした。

休み時間、ふと気付くと琴美が独りで窓際にポツンとしていた…。

「どうしたの？琴美…元気ないね…。」

「…うん。そんな事ないよ…。良かったよ、ナツキが元気そうで…。」

「ありがと。家にいても沈んじゃうだけだからさ。気持ち切り替えなきゃと思って…」

「…そうだよねえー」

琴美は何か悩んでるようだったが、わたしは敢えて聞かなかった…。時間はあつという間に過ぎて放課後になった…。気付けば琴美の姿もなく、あかりもいない。

「あれえ？みんな帰ったのかな」

あかりはナオキさんとデートって想像できるけど、琴美までもすぐにいなくなるなんて…。

わたしがしばらく来ないうちに環境も変わったもんだ。わたしはそのまま歩いていたら、校門にナオキさんの姿が見えた。

「よっ！久しぶり…」

「最近、会ったばかりだよ。」

「そうだった？良かった…学校行く気になったんだね。」

「うん。少しでも変わらなきゃと思って…」

「じゃあ…みんなに話す気になった？」

「…それはまだ…また今度ね…」

ガシッ！

「え！？」

直樹くんの前を通り過ぎようとしたら、ナオキくんはわたしの腕を掴んだ…。

「心配なんだよ…君はいつも独りだし…なんでもっと心を開かない！？もっと信用してくれよ！」

「…ナオキくん…」

…ナオキくんはいつもより真剣な顔つきだった…。

「ナオキくん…」

「…なあ…もっと信じてくれよ…」

ナオキくんはわたしの腕をよりいっそう強く掴んだ…。
少し痛いけど…暖かい感じがする。

「なにしてるの…？」

向こうから声がした…あかりだった…。

「…あ。」

わたしは直樹くんの腕を素早く振り払った。

「なにしてるの…？」

あかりがゆっくり近づいてくる…。

少し雰囲気…刺がある…

ナオキくんは頭をポリポリ掻きながら笑っている。

「何でもない…ホント何でもないんだ…」

「ふん」

あかりは笑いもせず返事ひとつだけした。

「…あ・ごめんね…わたし帰るね…」

わたしはそのまま二人から遠ざかった…。

「……。」

……ドクン…

「…はっ」

ドクン…ドクン…

「…はっ…はっ…」

わたしは歩きながら自分の心臓が高鳴るのがよくわかる…。
それはナオキくんの手があまりにも力強かったから…目が…本気だ

ったから…。

男の人のそんな事をされた事ないわたしは正直ドキッとしてしまった…。

翌日

わたしはあまりの気分の悪さに目が覚めた。

「うつっ
…」

わたしはトイレに駆け込み、嘔吐してた。

「はあ、はあ…」

わたしは鏡を見た。
起きたばかりなのにすごい疲れきった顔をしている。

「…やな顔」

わたしは重い体を起こしてはすぐに学校へ行く支度をした。

「おはよう」

学校に着くなり、あかりが挨拶してきた。

「…おはよ。」

「……うん。」

…多分、わたしが来るのを待っていたんだろう。
あかりは何か言いたそうにうずうずしていたが、我慢できなかったのか口を開いた。

「昨日の事なんだけどさ…」

「…ん。」

わたしは普通に返事した…。

「…ナオキ…変じゃなかった？」

「…変って…？」

わたしは何も知らないフリをして聞き返す…。

「…だからあー………」

しばらく間があった。

「ぶっちゃけ言えばね、ナオキ…すごくナツキの事気にするの…」

「…え!？」

わたしはあかりの言葉に思い切り反応した。

「…あ!もちろん、今のナツキが大変だから気にするのはわかるけど…。」

なんて言うのかな……えっと…

ナオキの事知れば知るほど…ナオキはあたしの事…好きじゃないよ
うな気がして…」

「あかり？」

いつも明るいまかりがすごく切ない表情をしていて、今にも泣き出しそうだった…。

…これが恋する女のコの姿なのだろうか…？

「…ごめん…あたしナツキに八つ当たりしてるみたいね…」

「…ううん…いいよ。気にしないで…」

「…あたし…昨日もそれが気になってほとんど眠れなかったの…あはは…ばかだよね？」

「…そんな事ないよ…あたし…あかりが羨ましいよ…
こんなに人を好きになれるなんて
…わたし…今…何を信じて生きていいのかわからないもの…」

「…ナツキ…」

あかりはわたしを見て更に口を開いた。

「ナツキは何に苦しんでるの…？」

「……え！？」

「…まだ言えない？あんだ…夏休みからずっとおかしかったじゃない

い…
あたし…いつか、ナツキから言ってくれと信じて待ってたんだけ
ど…」

「……………！」

正直、わたしは今なら全て話せると思った…。

これ以上隠していてもあかりやみんなに心配されるだけだし、
更にいろいろな誤解が生じてしまうのではないかと思ったから。

わたしは勇気を出して言おうとした。

「…あのね…」

…オジヨウチャン…

その時、目の前にあのチカン親父の顔が浮かんで来た。

…オジヨウチャン…

その顔はすごく醜くて恐ろしい顔…。

…オジヨウチャン…

そしてわたしをすごく憎んでる…それは奈津子さんも一緒。

…オジヨウチャン…

全てを話せば彼等に関わる事になる。

…オジヨウチャン…

わたしは我に振り返り首を横に振った。

「……………」。

「…ナツキ？」

「…ごめん…今は言えない…」

わたしは、ただそう言うしかなかった。

020 琴美の『秘』密

「ナツキ、話があるんだけど…。」

めずらしく、琴美がお昼休みに私に声を掛けて来た。

「…うん」

わたしはキョトンとしながら返事ひとつした。

そして、私達は人が少ない屋上に場所を変えた。

「…どうしたの？こんなトコまで…」

「……………」

「…琴美？」

「あのね……………」

琴美は言いにくそうに口を開く

「わたしね。好きな人がいるの…」

「…え？誰？」

わたしはシンプルに問う。

「……………」

「わたしの知ってる人なの？」

「うん。」

「まさか…直樹くんじゃ…」

「違うわよ。あかりの彼氏だよ？」

「だって言いにくそうな人って言ったら直樹くんぐらいでしょ？」

わたしは内心すごいドキドキしていた。

自分でもよくわからないが。

「実は7組の副担任の村山先生なの。」

「あ・そうなんだ。」

一瞬ホツとする。

「…ただ好きなだけじゃないの。」

「…というと？」

「…うん。親しい仲なの。」

「まさか…それは体の関係はあるって事!？」

「うん、そう。」

琴美は顔を赤くして俯いた。

「何だかスゴイね。ドラマみたいな話だね？」

「…で、問題っていつか心配事があって…」

「うん。」

「…来ないのよ。アレが…」

「アレって…生理の事？」

「うん。」

一瞬、風が吹く。わたしは続けた。

「それって…つまり、赤ちゃんの可能性があるって事？」

「…うん。そういう事になるかなあ〜。」

琴美はガクツとその場に座り込んだ。

「…え…で、その事は村山先生には言ったの？」

琴美は髪を押さえながら首を横に振る。

「ん〜ん、まだ。ちゃんと病院行って確認してないし。」

「早く言わないきゃ！」

「でも、まだ問題が…」

「なによ。」

わたしはもったいぶって言う琴美にイライラしていた。

「村山先生には家庭があるの。奥さんも子供もいるし…」

「ええ〜？じゃあ不倫なのぉ〜？」

わたしはかなり驚いたので、思わず大声を上げてしまった。

「…しっ！そういう事になるかなあ。」

「あ、ごめん…いつから、そういう関係になったの？」

「夏休みからかな？それ以前から、私は先生に魅かれてたけど、きっかけは夏かな？」

「…そうなんだ。全然気がつかなかった。」

溜息をつきながら琴美は

「やっぱり堕ろさなきゃいけないかな？」

そう言った。

わたしには理解できない。

奥さんや子供がいる人の子供を産みたいという気持ちを。

「…そりゃあ、先生がそばにいてくれるなら必要ないけど、家族を捨ててまで一緒にいてくれる人なんて、中々いないわよ。」

だからあてつけっぽく言った。

「でも私、先生の事好きだし産みたいって思ってるの。」

「琴美！それで苦勞するのはアンタだよ！」

少し怒鳴る様に言い返すと琴美は黙り込み

「そうね。」

そう言つて彼女は立ち上がる。

「とりあえず、先生に話して病院行ってみる。
ごめんね、変な事言つて…教室戻ろつか。」

「ううん。わたしで良ければいつでも相談にのるよ。」

わたし達はこうして教室に戻ろうとした時、

「あ！先生…！！」

琴美は奥にいる村山先生に声をかけた。

「おう……」

「話したい事があるんですが……」

こうして二人はどこかへ消えて行った。

わたし達三人の中で大人しい琴美が学校の先生と不倫するなんて思ってもみなかったのだ

わたしはボツと、しばらくその場にいた。

「ねえ、ナツキ。琴美見なかった？」

教室に入るなりあかりが言った。

「ああ、さっきまで一緒だったよ。」

わたしは自分の席に座りながら返事する。

「あ・そうなんだ……。何か琴美も最近、変なんだよね。何かに悩んでるカンジ。アンタもだけど……。」

あかりはわたしの顔を見つめながら言った。

「あはは……」

わたしは軽く笑った。

きつとあかりは、ホントにわたしの事を心配してくれてるのだろう。

でもわたしが悩みを打明けないから、
自分に心を開いてくれないから面白くないんだろっなあ。

だから、少し当てつけっぽい言い方するのだろう。

「…ごめんね、あかり。」

「だったら早く言いなさいよ」

あかりは笑いながらわたしの頭をなでた。

その手は温かく、やさしかった…。

020 琴美の『秘』密（後書き）

これから琴美編へ突入でございます。
ぜひ、感想をお願いします！

021 叔母の『告白』

「ナツキ！」

わたしは琴美に呼ばれた。

「…どうだった？」

「ちよつと屋上へ」

わたし達はまた屋上へ上がった。

「あれから病院行って来たんだ。」

「…で？結果は？」

「うん。妊娠してた。」

琴美はあっけらかんとして言った。

「…あ…村山先生はなんて？」

「…墮ろせて…」

「……！」

「…はあ。どうしよう…」

「琴美はどうしたいの?」

「…産みたい。」

「でも、それで苦労するのは琴美だよ!」

「でも産みたいよ!この子を殺すなんてわたしにはできない!」

「……!」

その時、わたしの頭の中にある光景が浮かんだ。

「三ヶ月…?」

「…はあ…私にはこの子を殺す事は出来ない…!」

「よし!あの人が断っても私ひとりでこの子を育てる!」

映画のようにひとつひとつ場面が流れ、光景の中のわたしは独り言を言っていた。

「…ナツキ?」

…はっ…

「アレツ!？」

わたしは我に返った。琴美が不思議そうにこっちを見てた。

「大丈夫？」

「あ・うん。ごめん…ボツ」としてた。」

「やっぱり産む事は許されないかな？」

世間でいう不倫だし…この子も幸せになれないだろうし…」

「でも好きなんですよ？先生の事…」

「うん。」

琴美は少し涙を浮かべて言った。

「つらいなあ…」

その村山先生というのは顔立ちが元々良い為、女子にはかなり人気があった。

政治・経済の先生だが話しもわかりやすく親しみやすいカンジがした…。

（あんな…愛妻家みたいなイメージしてるのにな…）

正直、琴美とそういう関係になったなんて信じられなかった…。

まあ、わたしは恋をした事はないが、男と女なんてのは理屈じゃないんだろっな…なんて思ったりもした。

家に帰ると母の姉である叔母が中でわたしを待っていた。

「…おかえり。」

「叔母さん、どうしたの？」

「あなたが心配だから見に来たのよ」

言い忘れたが、今のわたしの生活費を出してくれてるのは叔母なのである。

いつも叔母はキラキラした服を着てる。それが彼女のこだわりなのだろう。

だから見た目はかなり性格がキツそうに見えるが、面倒見がよく、わたしが母の次に心を許してる親戚の一人なのだ。

「とりあえずは元気そうね？妹が死んだ時のあなただったら普通じゃなかったから」

「…何とか落ち着きました。あまり考えないようにしてます。」

「そう…。それがいいわ。」

そう言っただけ叔母はタバコを取り出して吸った。

「叔母さん…わたしに何か話したい事があったんじゃないの？」

「……………うん」

叔母は吸っていたタバコを消しながら言った。

「…もう少し時間が経ってから言った方がいいかな？って思ってたんだけど…」

「…うん。」

少し間をあけ叔母は続けた。

「ナツキと父さんの事なんだけど…」

「うん。」

「父さんの顔みた事ある？」

「うん。写真でしか見た事ないけど」

「……その写真の父さんはナツキのホントの父さんじゃないの」

「え？うそ！？」

「ナツキのホントの父さんは誰かわからないの。」

「どういう事？」

「…はつきり言えばね。あんたの母さんは若い頃、レイプされたのよ。」

その時出来た子があなたで、その写真の父さんはあなたを承知で後から結婚した人なの…。」

「そのレイプした人は誰なの？」

「……それは誰かわからない。顔は覆面を被ってたらしいわ。もしかすると、知り合いだったかもしれないわね。」

「……………！」

わたしはあまりのショックで言葉が出なかった。

しかし、何で突然そんな事を？

わたしは不安で仕方なかった。

022 久『し』ぶりの会話

「ごめんなさい。急にこんな話を話して
もしかするとあんたの母さん…近い内あなたに話すつもりだった
のかも知れないわね。」

「…だけど…言えなかった…だから思い余って…
アルコールが検出されたから、酒の力を貸りて…」

「……………」

わたしはただボツ〜としていた。

叔母は吸っていたタバコを消すと立ち上がる。

「じゃあ私は帰るけど、あなたは大丈夫なの？」

「…うん。」

叔母をわたしに近づき額にキスをした。

「うふふ…」

叔母は少し照れ臭そうに笑った。

「うふふ…思い出しちゃった。」

「なにを？」

わたしは問いかける。

「あなたの母さんの顔よ…すごく驚いてたわ…すごく青ざめてた。」

「……？」

わたしは妙な胸騒ぎがした。

「だってそうでしょ？」

ナツキの口からそんな言葉が出るなんて…必死に隠してたのに…」

「……え！？」

叔母はくすくすと小さく笑い出した。

（…違う！叔母じゃない…！？）

わたしがそう思った瞬間、叔母は言った。

「やっと気付いた？そうよ奈津子よ！アンタと直接話すのは久しぶりかしら？」

「ねえまさか…母が自殺した理由ってあなたがわたしの中に入って母に言ったの！？」

「ピンポーン 言ったわ！あなたの口から！

あなたのお母さんの心の奥底にしまっていた思いでをこじ開けちゃった！きやはは…」

「……！」

「あんたも可哀相よね～！レイプされて出来た子供なんて…どう？」

「真実を知った気分は？」

奈津子は笑ってた。

心から…。

「奈津子さんあなた…本当はあの日…死ぬつもりだったんでしょ？
わたしがあなたをまちがえて押してしまったのは悪かったと思って
る！」

わたしを憎むのは仕方ないわ…。

でも…関係ない人まで巻き込むのだけはやめてよ！お願いだから…」

わたしは膝をつくと泣きながら奈津子さんをお願いした。

「……………あの日…わたしは死ぬ事をやめたのよ…」

だって私のお腹の中にはあの人との子供が…私はその子と二人で生
きて行こうと決めたのよ！

あんたにわかる！？わかるわけないよね！？本気で人を愛した事な
いあんたにね…！」

奈津子はわたしが今までに見た事のない顔をしていた。

わたしはあまりの恐ろしさにただ泣くしかない。

「じゃあじゃあどうしたら許してくれるの？」

「うふふ…さあ？」

そう言って奈津子は家から出て行った。

次の日

わたしはいつもの駅で電車を待っていた。

正直、今でもこの場にいるのが恐い。

いつ奈津子さんが現れるか…あのチカンおじさんだって……。

それでもこの駅に来る理由というのはきつと今のわたしにはそこま
で生きる気力がないからだろう…。

どこかで『死ぬ覚悟』をしてる自分がいる…。

わたしはレイプされて出来た子供…母にとってわたしは必要とされ
てなかったんじゃないかと…

そして母はわたしのせいで死んだ。

あまり眠ってないせいか頭がボツ―としていて悪い考えしか浮かん
で来ない。

“わたしは何のために生まれたんだろう。”

その言葉が頭の中でグルグルしてる。

電車の音が聞こえてきた。

…ああ…早く学校に行かなきゃ。

行けば友達がいてひとときでも嫌な事忘れられる。

早く…はやく行かなきゃ…。

行かなきゃ…行かなきゃ… 行かなきゃ…行かなきゃ…

行かなきゃ…行かなきゃ… 行かなきゃ…行かなきゃ…

行かなきゃ…行かなきゃ… 行かなきゃ…行かなきゃ…

「ナツキちゃん！」

わたしはその声にハツとした。

ナオキくんはびっくりした様な顔でわたしを見ていた。

わたしは笑顔で挨拶をした。

「おはよ。」

「おはようじゃないよ！何やってんだよ！」

スタスタと直樹くんはわたしのトコへやって来て腕を掴んだ。

「どうしたの？怖い顔して…」

「どうしたの？どうしたのじゃないよ！君こそ怖いじゃないか！」

「え………！？」

よく見るとわたしは、あと数センチで下の線路に落ちる場所に立っていた。

「…うそ…！？」

びっくりしたわたしは思いっきり後退りをした。

「…まったく何やってんだよ！このまま君までいなくなったら最悪じゃないか！」

「でも、わたし電車の音がしたから　ちょっと前に行っただけなのに…」

「電車はまだ来てないよ！…考え事してるからだよ。頼むから気をつけてくれよ！」

「…ごめん…」

「…ん！…ほらっ…今度はホンモノの電車が来たゾ！」

そう言っつて直樹くんは笑つてた。

ガタン…ガタン…

「ね？あかりとはうまく行ってるの？」

「うん。たぶんね。あかりからは何て聞いてる？」

「うまく行ってる事は言うけど…あまりノロケないわね。…っていうか最近、わたし達バラバラな時多いからさ。」

「なんでまた？マンネリ？」

「…マンネリって…恋人同志じゃあるまいし大げさだよ。でも互いに自分の事でいっぱいつてのは確かだね。」

揺れる朝の電車でわたし達は話に夢中になった。

そして…

「あ！わたしはここで降りなきゃ。」

「うん！また今度。」

「あ・そういえば…最近あまり不思議な力の事いわないね。」

「……うん…あまり感じなくなった。でも君は気をつけてよ！油断はしないように」

「うん。いつも心配してくれてありがとう。」

「はは…君のカレシになる人は大変だな。」

「それ、どういう意味よー！失礼しちゃうわねー！」

「ははは…」

そうやってわたし達は別れた。

朝からなあんかいいい気分だった。たまにはこんな気分もいいね。

「ナツキ！おはよー」

学校に着くなりあかりが声を掛けてきた。

気分の良いわたしは元気な声で言い返す。

「おはよー!」

「おっ!今日はいつもと違って明るいナツキですな!」

「…え!?いつも通りだよ。」

「違うばい!なんか昔のナツキだよ!表情が違う。なんか良いことあった?」

「え!?」

わたしはしばらく考え…

「別に。」

ニコリと笑う。

「…ふう〜ん。じゃあ、たまたまか…」

「そっ!たまたまってかわたしが普段元気ないみたいじゃん〜!」

「あははははは…」

わたしは何故かナオキくんに会った事を言わなかった。

別に言うほどの事じゃないと思ったのか…

よくわからなかった。

023 二人の『世界』

わたしは今、授業を受けている。

あの琴美の不倫の相手、村山先生の授業。

彼は何くわぬ顔をして琴美の前で、“教師”の顔してる。

しかも、生徒のお腹に子供がいるのに…。

わたしは琴美を見た。

彼女もまた、いつも通り“生徒”を演じてる。
ホント普段と何ら変わらない。

だから今までわたしも気づかなかったんだが、
こんな大変な状況なのに凄یと思ってしまった。

「私…いやだ。堕ろしたくない。」

休み時間、屋上で琴美が最初に発した言葉だった。

「じゃあ、どうするのよ！産むの！？」

「…わからない。でも堕ろすのだけはいやつ！！」

「何言ってるのよ！先生は琴美と一緒にいる気なんてないんだよ！
産むとしても一人で育てられないよ！」

わたしがそう言っていると琴美はわたしを睨み

「ナツキには私の気持ちわかって欲しかった！
あかりは絶対、賛成しないのわかってたからナツキにだけ相談したの…」

「…そりゃあ、琴美の事が心配だから反対してるんだよ！あかりだって同じだよ！」

「でも、私は産みたいのっ！先生が認知しなくてもいい！」

「例え、この子を産んだとしても周りに迷惑かけるだけだよ！先生の奥さんや子供だって…」

「そんなの関係ない！」

大声で叫ぶとわたしに背中を向ける。

「関係あるよ！不幸になるだけだよ！琴美も子供も！」

「どうしてそんな事言っの！？好きな人の子供産んで何が悪いのよ！」

「じゃあ、どうして先生と寝たのよ！奥さんや子供がいるの知ってたのに！」

「…どうして？って？だって好きになっちゃったんだもん！好きになったら相手に奥さんがいようが、子供がいようが関係ないもの…。」

「でも、わかるでしょ？踏み込んだじゃいけないって」

「そんなイイ子になれないよ。本気で好きになつたらキレイ事なんていけないよ」

「……琴美……」

琴美はわたしに向きを変え

「…ナツキならわかつてくれると思ったけど…
ナツキはまだ本気で人を好きになつた事ないんだね……じゃあ…無理だよ。」

琴美はそのまま歩き出した。

「琴美！」

「ごめん、ナツキ。やっぱ一人で考える。あかりにはまだ言わないで」

「……………」

寂しそうな顔をして屋上を去る琴美。

わたしはただ黙って見てるしか出来なかった。

…たしかに、わたしはまだ“恋”をした事がない。

人を好きになるってそんなに凄い事なのだろうか。

琴美にはつきり言われた事がショックだった。

「じゃあナツキ、あたしは先に帰るね。」

「うん。今日もデート?」

「うん! ナオキと会っよう! あっ! 急がなきゃ! 明日ね!」

「あっ! ねえ...!」

わたしの呼び止める声を見殺してあかりはそのまま小走りで行ってしまった。

今朝、直樹さんと駅で会った話を話すつもりだったのに...

「デートかあ...」

わたしは考えた。

“もしデートをするなら誰がいいのか?”

と。

わたしの知ってる周りの男の人から芸能人まで...

「.....」

「うん...」

「…あつ！」

一人だけ浮かんだ人がいた。

でも、それは少し笑える話。

だって…

“直樹くん”

だったから。

仮にも人の恋人なんだから、それはありえない話。

わたしは少し笑い、いつもの駅へ向かった。

そしてふと、

“あかりと直樹くんは今日はどこでデートするんだろう。”

…なんて考えていた。

024 琴美の決断

今日は日曜日。

せつかくの休みというのにわたしはいつもと同じ時間に起きた。あまり体調も良くないが、眠れそうにないので起きるしかないのだ。カーテンを開けると外は冬だというのに日差しが眩しく暖かった。

「ふう。さて、今日は買い物でも行つて気分転換しようかな？」

わたしは部屋を出て、朝食を食べ、出掛ける準備をした。

「普通だったら、デートとかしてる年頃なんだよね。何やってんだろ、わたし……」

わたしは独り言をブツブツ言いながら、タンスを開けた。

「外を出たのは、いいけど、何処に行けばいいんだろう？
何も考えてなかったや。とりあえず洋服でも見るか。」

わたしの住んでる住宅街のはずれには若者ばかりのストリートがあって、

そこにはたくさんの店が並んでいる。

この不景気の中どの店も繁盛していた。

「相変わらず人が多いなあ」

あまりの人の多さに少しわたしはひいたが、逆に気が紛れて悪い気はしなかった。

色んな店を廻ってる時、ふと奥に見覚えのあるカップルがいた。

…そう、あかりとナオキくんだった。

「…あ。」

わたしは、ふと足を止めた。

向こうはわたしに気付かず、二人で仲良く寄り添いながら歩いていて洋服屋に入って行った。

わたしは声を掛けようと、二人の後を追ってその洋服屋を覗いた。

当たり前だけど、そこには理想のカップルがいた。

普通の男と女。

お互いが必要とする存在。

自分をさらけ出せる存在。

わたしには羨ましい存在だった。

二人に入ることの出来ないわたしは声を掛けるのを諦め、そのまま店を出た。

すると、

「ナツキちゃん！」

「……………!？」

振り向くとナオキくんがこっちを見ながらゆっくりと近づいて来る。

わたしは何となく恥ずかしくなり

「めずらしいね。こんなトコで会うなんて。今、あかりも一緒なんだ。」

「うん。さっき二人でいるの見たよ。邪魔しちゃ悪いから声を掛けなかっただけ。」

「水くさいなあ。そんなの気にしないでいいって!」

「うん。」

「…どう?一緒に遊ばない?」

「…え!?邪魔しちゃ悪いよ。」

「別にいいよ。いつも二人でいるし、たまには。」

「ううん。いい!」

わたしは思いつき拒否した。

「あれ？ナツキ？」

あかりが店から出て来た。

「なあ、あかり。ナツキちゃんと一緒に何処か行こうや。」

「うん。いいよ。」

あかりはあさっさとOKを出した。

「ありがと。でも今日はこれから用事あるからさ。二人で楽しんでよ。」

「そうなんだ。じゃあ仕方ないな。」

あっさりと引き下がるナオキくんに少し寂しさを感じながらも

「うん。ごめんね。じゃあね……」

わたしは二人が見えなくなるまで急いで歩いて行った。

タッタッタッタッ……

「絶対、嫌だ……やだ……」

わたしは二人の間に入る事は絶対避けたかった。

今のわたしには二人には眩し過ぎるからだ。

しばらく歩いていると、ある家族を見掛けた。

それは琴美の不倫相手、村山先生と奥さん、その子供の三人だった。

「……………あ。」

村山先生は学校とは違う父親の顔をしていた。

わたしは父親がいない。

誰かわからない。

もし、あんな父親がいたら理想だろう。そんな感じがした。

…不倫さえしなければ…。

どうして…男の人は一人の女性じゃ満足できないんだろう。

あんな綺麗な奥さんがいて子供もいるのに。

何が不満なのだろう。

わたしはただ突っ立って先生を見ていたら、先生はわたしに気付き、

「ナツキじゃないか」

わたしに近づいて来た。

「買い物か？」

「あ・はい…」

「はは。私服は初めてみるな。」

「そうですね。今日は暖かいし…」

「はは…暑いよな？」

わたしはいつもより薄着だったせいか、先生はわたしの体を舐めるように凝視していた。

…すごい嫌な感じがした…

「後ろにいるのは、先生の家族ですか？」

わたしの一言に先生はハツと言うような顔して我に返り、

「…ん。今から家族で飯食いに行くつもりなんだ。」

「ホラ、早く行ってあげて下さい。待ってますよ。」

「ああ。また学校でな。」

先生はまた、わたしの体を見ては笑顔で家族の元へ走って行った。

奥さんと子供はわたしに軽く会釈して三人で奥へと行った。

「……………」

その光景を琴美は見た事があるのだろうか？

今となつては子供は出来てしまった。

そんな状況の中 村山先生が平気で家族と仲良く出来る神経にムカついたわたしは何だか街をウロつく気も失せ、家に帰りたくなった。

外は外で居心地悪かった。

家に帰ろうと路地裏を通つてたら、そこに小さな産婦人科があつてその横をわたしは歩いていた。

「ナツキ…！」

その声の方を向くと、病院の前に琴美が立っていて、今にも入ろうとしてた所だった。

「…琴美…。」

琴美はわたしに近づくなり泣き出した。

「嫌だ！嫌だよ！ナツキ！私…堕ろしたくない！どうしたらいいの！？」

琴美は今から病院で子供を堕ろすつもりだったらしい。

「琴美…残酷な事言うようだけど…わたしは堕ろした方がいいと思う。」

だつてさっき見たの。先生が家族と仲良く街歩いてるところ…。

琴美の事を全然気にしてないよ！わたし今日見てはつきりわかったよ！」

「……………」

「琴美…。わたしも一緒に病院付き合うから…。ね？そうしょ？」

「……………うん。」

わたしは琴美の手を引っ張り、病院の中へ入って行く。

病院の待合室でわたしと琴美は手を握りあっていた。

琴美の手はかすかに震えていて、わたしにも緊張が伝わってきた。

「琴美さん…」

看護婦さんが名を呼ぶ。

琴美はそれに反応する様に立ち上がり、歩き出す。

そして、わたしの方を見た。

わたしは静かに首を縦に振ると、琴美も同じ様に応えた。

そして、姿は見えなくなった。

「琴美…気分はどう？」

「どつって…最悪よ…」

全ての作業が終わってからの会話だった。

「あ・ねえ！来週はクリスマスじゃない！？私達でパーティしようよ！ね？」

「……うん。」

「じゃあ決まり！場所はわたしの家でどう？あかり達は…邪魔しちや悪いから何も言わない方がいいかな」

「……私、夢だったの。好きな人とクリスマス過ごすの…。」

いつか好きな人がいて子供がいて…家族で過ごすの。

…でも、もう子供もいない…好きな人には振り向いてもらえない…」

「琴美…今はツライと思うけど…がんばってよ！わたし応援してるから！」

「だったらどうして応援してくれなかったの！？子供産む事に！もういないのよ！？せつかく授かったのに！！」

「……………」

「ごめん。ナツキは私の事考えて言ってくれたんだよね？」

「…いいの。わたし…琴美に本気で人を好きになつた事ないの？
って聞かれた時、何も言え無かった。

だって人を好きになる気持ちかわからないから…。

だから平気で子供堕ろせて言えたのかも知れない。

でもね！あの先生は琴美の事を大事にしてないの確かなのよ！今日
だって…」

わたしはさつき、舐めるようにわたしの体を見てた村山先生の顔を
思い出した。

「ナツキ…もう、ここでいい一人で帰れるから。今日はありがと。」

「え？うん。」

「また明日ね。」

「うん。明日」

わたしと琴美はここで別れた。

気がつけば、少し北風が強まり寒くなっていた。

「さむっ…！」

わたしは急いで家へ向かった。

翌日、昨日とは変わって朝から雪が降っていた。

あまりの寒さに学校までの道のりがしんどかったかったが、無事にいつもの時間に着いた。

だが、琴美の姿はなかった。

024 琴美の決断『断』（後書き）

何だか切ないですなあ…
よろしければ、感想下さいな！

025 『嫌』な予感

「琴美：今日も休みか。ホントどうしたんだろっね？」

あかりが琴美の席に座りながら言った。

琴美が学校に来なくなって今日で三日目。

あれ以来、電話をしても家に訪ねてもわたしにさえ会おうとしなかった。

「ねえー。ナツキ本当にわかんないの！？どうしちゃったの？琴美」

「……うん。わたしだって何とも」

わたしは思わず嘘をついた。本当は全て知ってるクセに。

「今日、ふたりで琴美ン家に行ってみない？」

「昨日も訪ねてみたんだけど会ってくれなかったよ。多分、今日行っても……」

「でも行こうよ！やっぱ心配だし。」

「うん」

しかし放課後になると、あかりは逆の事を言い出した。

「ごめん！ナツキ！あたし急用が出来ちゃった！だから行けない！」

「えー！？そっちから行くって言うておいてそりやないでしょう！」

「実は今日、ナオキとナオキの友達と一緒に会う約束してたの、すっかり忘れてた！」

「ナオキは今度にしようって言うてたけど、その友達に悪いしね…。やっぱあっちを優先する事にしたの」

「わたしは正直、こんな時までもナオキくんを優先するあかりに少し呆れていた。」

「だが、あかりは何も知らないのだから仕方ない。」

「仕方ないな。いいよ、わたし一人で見てくるよ。」

「ごめん！後で琴美の様子おしえて！いつでもいいから…じゃっ！」

「あとで電話するね」

あかりは少しバツの悪そうな顔をしては教室を出て行った。

「…はあ。」

正直、一人で琴美に会うのが嫌だった。

理由を知ってるわたしは琴美に何て言うてあげればいいのだろう？

“元気出してね”

“まだ若いんだから”

なんて、ありがちな事言っただけでしょうがない。

そんな事言われなくても本人が一番よくわかってるんだから。

それでも元氣が出ないのが現状なんだが…。

気が付けば、琴美の家は目の前だった。

わたしが家に入るのを少しためらっていたら、いきなり玄関のドアが開いた。

「あ・琴美！」

琴美が家から出て来たのだ。

「……………」

「ねえ！大丈夫なの？」

「……………」

琴美はわたしの顔は見ているのだが、何も言おうとはしない。

しかし、三日会わないだけで人はこんなに変わるのだろうか？
って思うくらい琴美はやつれていた。

「琴美…大丈夫？」

わたしが言葉を発した瞬間、琴美はこちらに歩いて来て、わたしをそのまま通り越した。

「琴美！どこ行くの…！？」

琴美はわたしの言葉に何の反応を示さないまま、そのまま歩き出す。

「ん…？」

後ろで人の気配を感じたので、ふり返ったが誰もいない。

そして前を向くと琴美の姿は既になくなっていた。

「どうしよう…何か嫌な予感する…」

わたしは携帯を取り出し、あかりに琴美を探すのを手伝ってもらおうと電話した。

だが、あかりは携帯を切ってるのか、圏外にいるのか通じなかった。わたしは歩きながらも一度かけたが、通じなかった。

「んもう…！何がいつでもかけてよ…なのよ！」

わたしひとりでパニックになっていた。

いくら歩いても琴美の姿はない。

わたしは何処へ行っているのかわからないので、とりあえず学校に向かった。

もしかすると、村山先生に会いに行ったんじゃないかと思ったからだ。

職員室を覗くと担任の先生がいたので確認をとる事にした。

「…あのお、村山先生いますか？」

「ん？ナツキ、まだ帰らないのか？村山先生はさっき電話で誰かに呼ばれて出て行ったよ。

何処に行ったかはわからんが…」

「あ、そうですか。」

わたしはまちががなく、琴美が村山先生を呼んだ事に気がついた。

しかし、場所は何処だろう…。

そんな遠くない所だと思うけど…。

わたしは琴美の言葉を思い返した。

よく村山先生と会った場所などと言ってなかったと

「あ！もしかして…」

わたしは急いでそこへ向かった。

走りながら琴美の言葉を思い出した。

「私と先生は夏休み直前から親しくなったの。

でもその時はまだ教師と生徒の関係で。夏休み入ってからだったかなあ。

私がちょうど中央公園に小さな湖があるじゃない？

あそこでボツとしてたら、村山先生が歩いていたの。

私、元々 先生がタイプだったから思わず声掛けてね。いろいろ話したんだ。」

わたしは必死に走った。その公園に行けば二人がいるような気がしたから。

「はあ…はあ…」

「先生は根がいい人だから何でも親身になって話を聞いてくれたの。私もその“優しさ”に余計に魅かれちゃって本気で好きになっちゃったの。

だから私先生に告白しちゃった…。」

何とか公園に着いた。

だが、ここの公園は広く湖まで少し距離があった。

そこでわたしはハッとした。琴美に電話する事を忘れてたからだ。

「やだ。何で気づかなかったんだろう。」

わたしはすぐ琴美に電話した。

琴美は出てくれるのだろうか？

“ピッ……”

「もしもし！？琴美？」

「……………」

「今、何処にいるの？ねえ！」

「……………」

琴美は電話に出てるが何も言おうとしない。

「琴美……！何とか言ってよ！」

「……………死んだ……………」

「なに……？誰が？」

「私の……子供……………」

「うん……………でも仕方ないじゃない……………」

「……………」

「今どこにいるの！？教えてよ！」

わたしは湖に向かいながら必死に走った。

辺りは真っ暗になっていて視界に苦しんだ。

そして琴美の言葉をまた思い出した。

「もちろん、先生は私の告白に困っていたわ。

私の気持ちに応える事もできないとはつきり言っていたし。

でも、わたしが強引に迫ったのが良かったのか悪かったのか。」

琴美は少し顔を赤らめニヤけ顔になっていた。

「はあ…はあ…」

もうすぐ…！もうすぐで湖付近だ。

琴美は電話を切り、かけても出ようとはしなかった。

「もちろん、私は先生の家族から先生を盗る気なんてなかった。

ただそばにさえいてくれれば。先生もそう言ってくれると助かるって。

ナツキの言いたい事わかるわ…そんなのズルイって言いたいんですよ？

村山先生が一番おいしい思いしてるって…。

でも…私はそれでも…それでもいいって思ったのよ…

それだけ先生の事好きだったからかも知れない…。」

琴美が数日前にわたしに言ったセリフだった。

「はあ…はあ…」

やっと湖に着いた。

視界が暗い為、人の気配に感じるトコへただ歩いた。

「はあ…はあ…」

“絶対、ここにいる…！”

「はあ…はあ…」

わたしは何故か確信していた。

「はあ…はあ…」

奥に人の気配を感じ、ゆっくりとわたしは近づいた。

「私…堕ろしたよ」

琴美の声がする。その奥にはうつすらと村山先生が見える。

「…そうか…君には迷惑かけたな。」

「先生…私達の子供…死んじゃったんだよ？」

「……ああ。本当にすまないと思ってる…」

「正直…私…産みたかった…。先生と一緒にいなくてもいいから。」

「そんな事したら、君は幸せになれないよ。」

二人の間に入れないわたしは身を隠すように立ち聞きしていた。

「…先生…私…もうダメなんです…堕ろした日から私の体の一部が失くなったみたいで…」

「…もう…生きる気力さえないんです…！もう…！」

そう言って琴美は鞆から小さなナイフを取り出した！

025 『嫌』な予感（後書き）

みなさんいつも感想有難うございます！
これからも宜しくお願いします！

026 血『痕』

「琴美……！！馬鹿なマネはやめるんだっ……！！」

「……だって……仕方ないじゃないですか……もう……生きる気力がないんですから」

「確かに……君にはツライ思いをさせた。でも……それは今だけだっ。いつか君にふさわしい人が現れて……」

「もう子供は帰って来ないんですよ……！！」

琴美は震えながらナイフを両手で握り締めていた。

「わかった！わかったから！琴美！お前は何が望みなんだ？」

「……………子供……」

「いい加減にしてくれないかつ……！！」

村山先生は大声で怒鳴った！琴美はびっくりして目を瞑る。

「子供！子供って……！！もう戻らないんだから諦めるよ！
大体、俺と君との間には子供なんて出来てはいけないんだっ！
それは君も承知のはずだろっ……！！？」

「………………。」

「……もうウンザリなんだ……！！君は……気付いてたか？」

俺は本当は君の事なんとも思っていないんだ…!!」

「……………え？」

声が裏がる琴美。確認しようと目が訴えてる。

「…先生…それって…」

わたしは聞いてはいけない言葉を聞いた気がした。

「俺は君が可愛かった。でもそれは生徒としてだ。それ以上の感情はない！だが…君は俺に恋をしてた…それにすぐ気付いたよ」

体を震わせながら琴美は口を開いた。

「…じゃあ私の事は本当に好きじゃなかったんだ？」

「…好きだよ…生徒としてな。これでわかっただろ？こんな俺の為に君は死ぬ気か？」

その瞬間、わたしはある記憶の断片が見えた。

「…オレトワカレテクレ…」

顔のよく見えない男の人にそう言われてる。
その声と村山先生の声がダブる。

「じゃあ…なんで…なんで私なんかと恋人みたいに…会ってたりしてたの？」

私の身体を求めたの？」

肩を小刻みに震わせ琴美が問う。

「決まってるだろ？やりたかったからさ。気のあるフリしてたんだよ。」

「やめて!!」

叫んだのは琴美じゃなくわたしだった。

そして二人はびっくりしてわたしを見た。

「ナツキ…」

「ナツキくん…!」

わたしは村山先生に向かって歩きながら怒鳴った。

「なに勝手な事言ってるのよ!

だったら最初からやさしくしないでよ…!余計辛くなるだけじゃない!」

「…ナツキくん…君には関係ない話だろ。悪いが口出ししないでくれないか?」

「黙ってられない!だって先生は何もしてないじゃない!精神的にも肉体的にも傷ついたのは琴美だもの!

それなのにただやりたかったからやりましたなんて！」

「…ナツキ！お願いだから黙って」

「…だって…そんなの…納得できないじゃない！」

わたしは混乱していた。

今、目の前で起きてる事がまるで自分の事のように感じてる。

それは“奈津子の記憶”だからだろうか…？

わたしの中で何かがはじけたまま収まらなくなった。

「…とにかく…琴美にはすまないと思ってる…許してくれ…」

村山先生は深く頭を下げた。

「許すも何も…私はただ生きる気力がないって先生に伝えたかったの…」

先生に私が死ぬ所を見て欲しかったの…。ただそれだけ…」

わたしは琴美の肩を掴み、

「琴美！こんな奴の為に死ぬなんて…馬鹿らしいよ！」

だが、琴美はわたしの腕を振り払い、

「ナツキは黙ってて！もう帰ってよ！」

そう叫んだ。

そして村山先生が口を開く

「迷惑な話だ……！死ぬのは君の勝手だが俺を巻き込まないでくれっ！俺は帰る……！だからガキは嫌いなんだっ！」

その言葉を聞いたわたしは更に頭に来て村山先生の頬を思いっきりビンタした。

バシッ！

「そのガキとセックスして喜んでたのはアンタでしょう！」

「もう！いやあああああああゝっ！！！！！」

琴美は叫びながらナイフを振りかざした！

「……………」

その瞬間にわたしの視界に飛び込んで来たのは真っ白な世界だった。

そして赤い血のようなものが飛び散った……。

今度は一気に暗くなる。

○

...

... וְלִי יְיָ אֱלֹהִים ...

「はっ!!」

わたしは真つ黒な世界から一気に現実の世界に戻されたように目を開いた。

「……はあ……はあ……」

体をゆっくり起こすとそこは自分の部屋だった。

「はあはあえ？」

わたしはよく状況がわからない。

だって最後の記憶はあの公園の湖付近だったはず。

「わたし…いつ戻って来たんだろう…。全然記憶がないや。」

時計を見ると、朝の6時半だった。

「…え？ちよつと待って…。意味わかんない…。
昨日確か、あの公園で琴美と村山先生がいて…」

頭が混乱してる為シャワーでも浴びようと風呂場へ向かった。

「えつと確か…三人で言い合いになって……………なにコレ？」

ふと、自分の手に赤い何かがついてるのに気が付いた。

「コレってもしかして……………」

そして、急いで洗面所に駆け付けた。

ダッダッダッダッ…

「…はっ…うそ…」

わたしは自分の姿を鏡で見て愕然とした。
わたしの顔、首、腕、そして服全体が全て赤色に染まっていた。

「何よコレ…なんなのよぉっ！」

声を上げると、服を脱ぎ風呂場へ駆けた。
そしてお湯も出ない内に体全体を濡らした。

ざああああーっ

「…気持ち悪いっ…」

まるで風呂場の壁にあるカビを落とす様に自分の体を洗った。

少し痛かったが、それでも全然落ちてないような気がして何度も洗った。

何度も何度も…。

ざあああああーっ

しばらくして、少し落ち着いたのでお湯を止め服を着た。

そして鏡を見たら、いつものわたしがそこにいたので少しホッとした。

「……なんなの…」

さっき脱ぎ捨てた服が目の前に無造作に転がっていて、赤い色が際立っている。

「コレって…明らかに血 だわ…。やっぱりあの時に何かあったのよ…。」

でもなんで記憶がないんだろう…」

わたしはパニック状態だった。訳もわからず家中を歩き廻った。

そして色々な事が頭をかする。

琴美は生きてるだろうか？

村山先生はどうなったんだろうか？

そして、わたしの体に付いてた血痕

わたしが無傷だけに血痕は二人の内の誰かのものだ。

それにあの量からして重傷以上にしか考えられない。

「どうしよう…どうしたらいいんだろう…」

しばらく自分の部屋に入りウロウロしてたら携帯が目に入った。

「そうだ…」

わたしは何も考えずに電話をかけた。

プルルル…プルルル…

「…はい…もしも…」

ピッ…！！

しかし、すぐに電話を切った。

相手の声を聞いて我に返ったからだ。

「やだ…わたし…何で直樹くん…」

そしてすぐに、また電話をかけた。

今度は琴美に。

027 『不』気味な琴美

この電話に出れば琴美は生きている。

琴美なら全て知っているはず。

わたしは乾いた喉を潤す為に唾を大きく飲み込んだ。

そして受話器から呼び出し音が鳴り響いた。

プルルル… プルルル…

「お願い… 琴美出て… 無事でいて…」

「もしもし」

琴美はすぐに応答してくれた。

わたしは携帯を両手で固定しながら声をだす。

「琴美！？ 無事なの？ 良かったあ…。 ねえ！ あの後どうなったの？
わたし… よく覚えてないの！

わたしに… いっぱい 血 みたいのが付いてた」

「うん。あとでわかる。学校で会って話す… じゃあね」

そう言つて琴美はすぐに電話を切った。

わたしはますます嫌な予感がした。

学校は終業式で、明日から冬休みにはいる。

そして今年ももうすぐ終わる。

わたしは色んな事を考えた。

いつもの駅に着けば奈津子さんの事を思い出し後悔する。

電車に乗れば変わる景色にうつすらと自分の顔が映る窓ガラス。

今のわたしの顔は…他の人からどんな風に見えるのだろう。

もうこれ以上の不安はないだろうと思ってたのに。

まだ不安は積もるばかりだ。

そして、あっという間に学校に到着すると、すぐに琴美を探し出した。

「お早う、ナツキ…」

琴美の声だった。

「ねえ！昨日どうなったの！？村山先生は？…それにあの血は？」

「落ち着いてナツキ…心配ないわ。それに今、私…すごく気持ちいいの。」

村山先生がいなくても…ね？」

「…死んだの？」

わたしが小さくそう言つと琴美の顔が心なしか笑つた様に見えた。

「おっはぁー!？」

突然、あかりがわたし達の間に入つて来た。

正直、今のタイミングで来て欲しくなかった。

琴美から全て聞きだせるチャンスだったのに…。

「今日で2学期終わりだよ。長かったあ！」

「……うん、そうだね。」

わたしは引きつって笑い、琴美は無言だった。

「何よ2人して暗いね。ねえ聞いて！あたし達冬休みに泊まりがけで旅行するの！」

ナオキのお父さんの仕事場があつてね、
年末年始は誰もいないから二人で…って言いたいけど…
どう？お二人さん…一緒に行かない？」

わたしと琴美はキョトンとした。

「…場所は？遠いの？」

「うん！電車で1時間くらいらしいけど…」

「私…行けない…」

琴美が即座に断りの返事を言った。

「ええ？行こうよ…ねえ！」

「いや…。」

またもや、はつきりと返事をする琴美。

あかりは首を傾げながら少しムツとした顔をした。

「なんか、最近付き合い悪いんじゃない？どうしたのよ？」

「それはこっちのセリフ。口開いたと思えばナオキくん！ナオキくんって…もうウンザリよ！」

「…琴美…言いすぎよ！」

わたしはすぐに琴美を止めに掛った。

「…………。」

あかりはすごく驚いていた。

今まであかりの言う事に反抗した事のない琴美だったから無理もない。

「…………とにかく無理っ！」

琴美はその返事を残しさつさと教室に入って行く。

「なによー！あんな言い方ないんじゃない！？せつかく誘ってやっ
てんのに！」

「機嫌悪いのよ。今日は…」

わたしは怒り狂うあかりを何とかなだめ落ち着かせた。

それにしても…

なんだろう…

あの琴美の不気味さは…。

朝のホームルーム、突然担任の先生が

「実は昨日から村山先生の姿が見えてないらしい。家にも帰ってないそうだ。

昨日、何時でもいいから村山先生の姿見た人いないか？」

当然、クラスのみんな誰一人見たものはいなかった。

わたしでさえ、今何処にいるのか想像もつかない。

わたしは琴美の方を見た。

琴美はわたしの視線に気付き、少し笑ったように見えた。

場所は変わって村山先生の自宅。

「…私にもわからないんです。何故、主人が帰って来ないのか…
もしかしたら事故とか事件に巻き込まれたんじゃないか…あ・はい…
何かあったらお電話いたしますのでお義母さん…」

電話を置くと、体中のチカラが抜けたのかソファに一気に腰掛けた。

ドサッ。

「…ふう…全く何処に行ったのかしら？」

ピンポーン

「…主人かしら!？」

「ちわー。お届け物です!村山さんのお宅ですね？」

「…はい」

「ここにサインを…」

「……………」

「ありがとうございます!失礼します!」

「お疲れさま。何だ主人じゃないのか。なんだろう?これ…私宛だわ…」

「……………」

「…ん？新聞で包まれてる」

「……………！」

「紙があるわ」

「“ただいま”…？意味わかんない…」

「……………え？」

「うそよ…」

箱の中には血まみれの塊が入ってた。

「いやあああああああああゝっ！…！」

「奥さん。これが届いたのはいつですか？」

「朝の9時過ぎです。コレは…主人の一部なのでしょうが？」

「今調べてます。結果が出ない今はなんとも…」

「……………なんで…主人は…こんな目に…」

「まだ、ご主人と決まったわけじゃないので…」

「ふふふ…」

「なんで笑ったの？琴美！」

「だっておかしいんだモン。」

「…なにが？」

「……あとでわかる…ふふふ…」

今日の琴美は ここ最近の琴美に比べて笑顔が絶えない…というか、かなり不気味だった。

昨日の事と関係してるのはまちがいない…。

わたしは琴美を屋上に引っ張り出し、問い詰めた。

「ねえ、いい加減に教えてよ！昨日あれからどーなったの！？琴美…
…なんか変だよ？」

「ナツキも意外とじつとしてられないタチねえ……。いいわ、教えてあげる…。」

「……………」

正直、本当は何も聞きたくない。

何も知りたくない。

関わりたくない。

でもそんなワケにいかない…。

わたしはそこから逃げられないのだから。

わたしは琴美が何を言っても驚かないよう覚悟してた。

「奥さん悪い知らせです。」

「アレは…うちの人のモノだったんですか…？」

「…はい。ほぼまちがいないでしょう」

「……………！」

「……………今、目撃情報集めてますんで…」

「…どうして…！うちの人か…！！うわああああ〜ん…」

「古田警部！」

「…ん？」

「昨日の放課後…一人の女子生徒が被害者を探しに職員室に来てた

そうです。
「

「…彼女が最後に会った可能性が高い…ってトコか。よし、会ってみよう！」

028 安『心』感

「…え！？なに？」

わたしは声を張り上げた。

「…だから村山先生は死んだわ。わたしはあの時…たしかに死ぬつもりだった。

でも彼が邪魔したの私を止めようとしたの…。見てたでしょ？」

「…うん」

「私、思ったの。なんでこの男は私がやる事全てを邪魔するんだろ
う…って。

…すると…だんだんムカついてね。…だから刺しちゃった。」

「…うそ…」

とても恐ろしい事を琴美はサラリと言ってた。

わたしはどうして良いのかわからず呆然としていたら
琴美はわたしをジッと見つめていた。

「本当に覚えてないの？都合のいい記憶力ね。だったらその続きも
教えてあげる。」

どこか遠くを見るような視線で話を続けた。

「…あの後、まだ息のある先生を…近くにあった小屋みたいなトコ

に運んだの…」

「……………」

「その時…先生が私を掴んでね…『頼む…助けてくれ…』って言ったの…」

私…可哀相になって…先生を家に帰してあげようと思ったの。バラバラにして…」

「…！！！」

わたしはゆっくりと唾を飲み込んだ。

だがカラカラになった喉は唾だけでは潤せなかった。

「そこにノコギリみたいなのがちょうどあってさ。

ああ、ナツキはその時からボツ〜としてたね…たぶん現状が把握出来てなかったのかもね…」

「何を…何を言ってるの？琴美…」

「でもカン違いしないで。あの人が…あの人が私に指示するのよ…。私はただ言われた様にしただけ。だから…私…先生を…先生の一部を切断して。

お家に帰す事にしたの。その方が喜ぶってあの人が…」

「……………琴美…？あの人って…」

わたしの質問に耳を貸さず、独り言のようにポツリと言った。

「……今頃……家に着いてるわね……先生のおチンチン……。」

「……………！」

琴美の肩を掴んでわたしは叫んだ。

「琴美なんでそこまでする必要があるのっ！なんで……先生を殺す必要があるのっ！」

「じゃあナツキは私が死ねば良かったと言いたいワケ？」

「違う……！なんで……もつと他に方法があつたはずでしょ……！」

「そう言うナツキも共犯なんだからね！あなたも一緒にやったんだからチクろうなんて考えないでよ！」

「なんでわたしまで？わたしは何もしてないわ……！」

琴美はわたしの腕を振り払い笑いながら言った。

「記憶も何もないのに……してないって言いきれなの？幸せな人！」

「……………だつてしてないもの！」

「自分の服や手を見たでしょ？血がいつぱいついてたでしょ？」

「やめて……！！何も聞きたくない！」

わたしは琴美の前にいるのが恐くなって、その場を走り出していた。

タッタッタッ

「ナツキ！」

遠くからあかりのわたしを呼ぶ声がする。

わたしはすぐに足を止める。

「……あかり……」

「ナツキ…泣いてるの？」

びつくりしながらわたしの元へ駆け寄るあかり。

「ううん。大丈夫……」

「そう？あっそうそう！」

どうやら村山先生は事件に巻き込まれたらしいよ！」

「ふう〜ん…そうなんだ？」

わたしは何も知らない振りをした。

「明日から冬休みだってのに物騒だね」

「…うん。そだね」

わたしが無理に微笑むとあかりはただ黙ってわたしを見ていた。

そして、終業式も終わり、わたし達はバラバラに帰った。

「ナツキさんですか？」

家に着くと家の前に二人の男が立っていた。

わたしは誰かわからず

「…はい。」と、答えると。

「少し時間頂けますか？すぐ済みますから。」

そう言ってまだ少年のあどけなさが残る今風の青年は警察手帳を見せてきた。

まるでドラマのワンシーンみたいな警察の登場に思わず「はい。」と返事一つだけすると

「ここじゃなんですから、家の中に入ってください」

ドラマのワンシーンの様にわたしは返事を返していた。

「どうぞ…」

わたしは二人の刑事にお茶を差し出した。

「あ・すいません。長居はしませんから」

「-それで…何の用ですか？」

「ああ、昨日…放課後に君が村山先生を探してたという情報が入ったモンですから…」

「村山先生がどうかしたんですか？」

「うん。実は殺された可能性があつて…」

「え？……そうですか…。昨日は会ってません…」。

「ちよつと用があつたんですけど…。結局見つかりませんでした。」

わたしもゆっくりとソファに腰を下ろした。

「いやに冷静ですね？先生が亡くなった可能性があるってのに…」

「ピンと来ないだけです。」

「とりあえず昨日は会わなかったワケですね？君はなんで先生を探してたんだい？」

「ちよつと用があつたんで…」

「その用とは？」

「そこまで言わなきゃいけないんですか？」

「いや、じゃあ夕方は何してたのかい？」

「えっと…テレビ観てました。」

刑事さんはわたしの顔をしばらく見つめ口を開く。

「……………。そうですか。わかりました。では失礼します。」

「もう終わりですか？」

「大体わかりました。まだやる事があるので…」

「そうですか。お疲れ様です。」

「では……………」

こうして二人の刑事は帰って行った。

ボタン。

「……………ふう。……………うっ！」

ダッダッダッダッダッ。

わたしはトイレに駆け込み 嘔吐 した。

「おええええええええ……………」

気持ち悪い。

色んな事が起こり過ぎて身体が悲鳴を上げてるんだろっか？

便器の横で少し休んでいると奥から電話の音が聞こえた。

「もしもし…」

「ナツキちゃん？俺、ナオキだけど…」

「ナオキくん！！」

わたしは思わず大声を出してしまった。

まさかこのタイミングで電話掛ってる来るなんて

夢にも思わなくてただ嬉ししくて…

気付けば目からは大量の涙が零れていた。

「どうしたの？大丈夫…？」

受話器ごしのナオキ君が心配そうに尋ねる。

「ごめん…ちょっとびっくりしただけ。」

「大げさだなあ〜！ははは…」

そして、わたしはそこで気付く事になる。

ナオキくんへの気持ち。

安心感という存在を…。

028 安『心』感（後書き）

いつも読んでくださってありがとうございます！
まだまだ続きますので気長にお付き合い下さいませ！

029 閉じ込める『心』

「あの…あかりから聞いてると思うんだけど、冬休みに俺の親父が使ってる別荘にみんなで行こうかな？って思ってるんだけど…」

「あ・聞いた。でも琴美は行かないみたい。わたしは…」

「え？行こうよー！あ・でも、俺とあかりの間に入るの嫌だよね？」

「…嫌ではないけど…」

わたしは『嫌』だったけど言えるはずもない。

「ナツキちゃんはいないの？」

「…え？」

「想ってる人。」

「…あ…いないよ…！いるワケないじゃない…！」

「いたらWデートとかしてみたいな〜なんて…」

「それは当然有り得ない話だけど…」

ナオキくんの口から聞きたくない言葉。

「なんで？君は自分が思ってるよりも可愛いよ。もっと自信持たな

きや……」

「……ありがと。」

「とにかく…明後日までに返事くれないかな？返事は携帯にでも…」

「うん、わかった。よく考えとく。」

わたしは静かに受話器を置いた。

…ドクツドクツ…

心臓の音が少し聞こえる。

わたしは明らかに動揺した。

ナオキくんの言葉に。

ナオキくんの声に。

一気に体中のチカラが抜けたわたしは座り込んだ。

「…やっぱり…わたしは直樹くんを…？」

そして愕然とした。

まさか…最初に好きになった人が友達の恋人なんて。

しかも親友の。

その日の夜、わたしはベランダに立って月を眺めていた。

そして直樹くんへの気持ちをよく考えてみる。

さっきは思わず動揺したが、

最初に好きになった人が直樹くんみたいな人で良かった…と今は思う。

もちろん、それはわたしだけの秘密。

あかりにも琴美にもそして直樹くんにも知られてはいけない気持ち。

この先わたしは皆とうまくやって行かなきゃいけないから。

それよりも今は琴美の事が気がかりだ。

わたしも共犯者なのかはつきりさせたいし…。

わたしはベッドに入り、明日 琴美の家へ行ってみよう…

そう考えながら眠りに就いた。

わたしは夢を見た。

それはまさしくあの日の出来事だ。

わたしが奈津子さんを突き落とした日。

奈津子さんはそのまま下に落ち、わたしの視界から消える。

そしてわたしは確認する。

電車が停まった線路を。

そしてわたしは叫ぶ。

きゃあああああ……！

電車でぐちゃぐちゃになったのは奈津子さんではなく、村山先生だった。

すると隣から泣き声が聞こえる。

振り向くと村山先生の奥さんと子供が泣いていた。

奥さんは目を真っ赤にして、わたしのトコへ歩み寄る。

「……………！」

何かを言っている…かなり恐い顔して叫んでいるが声が聞こえない。

聞こえるのは子供の泣き声だけ。

「殺したのはナツキだよ！」

琴美が突然現れた。

「違う！わたしじゃないわ！」

わたしは分かってもらおうと叫んだ。

「ううん。あんただよ！」

「違う！違う！」

「ナツキよ！」

いきなり琴美の額にヒビが出来、血が流れ出した。

「…琴美？」

その血はだんだん量が増え、琴美の額に裂け目が出来た。

「うふふふ…」

「…琴美…？」

裂け目は更に大きくなり、中から血まみれの奈津子の顔が現れた。

「あんたが殺したのよ…！」

「きやあああああああああああああゝっ」

そこでわたしは目が覚めた。

体中汗をかいて服がビショビショに濡れて気持ち悪い。

「ハア…ハア…」

わたしはベットから出て洗面所に向かい、顔を洗った。

凍ってしまっくらい水は冷たかったが、わたしには丁度いいくらいだった。

「はあ…はあ…」

顔を上げるとわたしの後ろに奈津子さんが立っていた。

そして鏡ごしにわたし達は目が合った。

だが、彼女はすぐに消えた。

わたしは着替え、琴美の家へ向かった。

わたしが関わってるにしろ、やはり警察へ自首しなければいけないと思ったからだ。

何とか説得しなければ…と…。

琴美の家に着き、わたしはチャイムを押そうとした瞬間、ドアが開いた。

「待ってたわ」

琴美はまるでわたしが来る事を知ってたようだ。

付き合いが長いせいで分かったのだろうか？

わたしは不思議に思っていた。

「警部！被害者の村山の遺体が発見されました！」

「- 場所は？」

「中央公園にある倉庫です。」

「よしっ！行ってみよう……！」

「はい。」

琴美はわたしにあったかいココアを差し出した。

わたしはそれを一口飲み干すと、琴美はゆっくりと微笑んだ。

「来るんじゃないかと思ったんだ……。そろそろね……」

「……………」

「ナツキの言おうとしてる事わかるよ。自首しようって言いに来た

「んでしょ？」

「うん。ねえ！早く警察に行こうよ！どうせバレるのも時間の問題だし……」

「……そうね……。でも明日まで待つてくれない？明日までいいから……」

「なんで明日までなの？」

「色々しておきたいじゃない？どうせ明日には警察に自首して私の人生は終わりだし……」

「終わりじゃないよ！ちゃんとやり直せばいちから始められるわ！」

琴美はまた微笑む。

「とにかく私に今日一日時間を頂戴……お願い……！」

わたしは、これ以上言っても無駄だと判断し折れることにした。

「……わかった。」

わたしは少しココアを残し、家をあとにした。

琴美が自首してくれるなら今日ぐらいは自由にしておこうと考えたのだ。

しかし、それがまちがいだった。

「警部…これが…」

「ん？プリクラじゃないか……。……これは…被害者と…誰だ？」

「わかりません。今、調べてみます。」

「ナツキではないとすると…。こいつが…犯人の可能性が高い…」

029 閉じ込める『心』（後書き）

うつ…かなり寝ぼけながら作成したよ…。

030 琴美の行『動』

「ただいま」

わたし以外だれも住んでない家だけど、

わたしは外から帰って来る時必ず言うようにしていた。

そうすると誰かが奥から返事をしてくるような気がしたから。

わたしは首のマフラーを解きながら、ゆっくりと中へ歩いた。

すると突然、電話が鳴った。

「もしもし…」

「ナツキ？あかりだけど」

「どうしたの？」

「旅行の話、明日になっちゃった。だからどうしようか相談したいんだけど？」

「…うん。やっぱりパスする。琴美も行かないんじゃないかな」

「ナツキン家、FAXあるでしょ？年末ギリギリまではいるから地図送るから来れたら来て。」

「あ・うん」

「急な話でごめんね。あとでFAXするからねー」

「うん。楽しんで来て」

わたしは電話を切り、部屋に向かった。

そして上着を脱ごうとした時、自分が映ってる鏡をみながら -

「行けるワケないよ。二人でいる場面なんて見たくない…。見れるワケがない…」

- と、独り言を言った。

自分の気持ちに気付いたわたしは更に自分との戦いを背負わなければならなかった。

ピンポーン

「ママあ！誰か来たよ…。パパかな？」

子供が奥さんを見つめるなりそう言った。

奥さんはただ黙って見つめ返した。

「……………」

ピンポーン

二度目の呼び出し音が鳴るとすぐに応対した。

「もしもし、どなたでしょうか？」

インターホンの画面に高校生の女の子が映し出される。

奥さんは首を傾げ画面と受話器に集中した。

「村山…先生のお宅ですよね…？」

女の子の声が小さく聞こえると、顔を上げカメラを見つめた。

その後ろに髪の長い女の人が立っているのが見える。

「そうですけど何か？」

「村山先生について話したい事があります。事件と関係があるかもしれないません。」

受話器の向こうからそう聞こえると奥さんはすぐに

「…え？今ドアを開けますので！」

ガチャッ

乱暴に受話器を置いて玄関へ走った。

子供もゆっくりと後を追う。

ダッダッダッダッダッ

ガチャッ！

ドアを開けると物静かに高校生が立っていた。

「初めまして…先生の奥さん。」

「えっと…一人？…主人の生徒ですか？」

「はい、琴美と言います。」

「それで…あなたは一体何を知ってるって言うの？」

「犯人を知ってます。」

「だっ…誰なの！？誰が主人を…！」

「……………」

琴美が黙るので奥さんは琴美の肩を強く掴んでまた尋ねた。

「誰なのっ…？教えて頂戴！！」

すると、いきなり琴美は鞆から長いナイフを出した。

「…！ま・まさか……………」

「…そう…私が殺したの…」

「…！」

「ママぁ…どうしたの？」

奥から子供がやって来た。

「来ちゃダメー！」

琴美はいきなり子供の所へ駆け寄り、首にナイフを向けた。

突然やって来た女子高生に子供を奪われてしまう光景に
奥さんは夢中で声を出した。

「やつ…やめて！」

琴美は子供に優しく声を掛けた。

「ねえ…。パパの所へ行きたい？」

「…うん。知ってるの？どこにいるの？」

無邪気に答える子供に琴美はほほえむ。

「でも私は行つた事がないんだ…」

「やめて！なんでこんな事するの！？」

「ごめんね、奥さん…私…思ったの…やっぱり先生は奥さんや子供の事が好きなんだって…」

「……？」

「だから…先生が寂しくないように奥さんや子供を殺そうと思って…。
だからお願い！死んだら先生の傍にいてあげて…！」

琴美は子供にナイフを突きつけたかと思えば、

今度は涙を堪えながら叫んだ。

「…な・なに勝手な事言ってるのよ！なんで私達まで死ななきゃいけないの！

あなたが勝手に殺したんでしょが！」

「……そう殺したわ…でも…今は後悔してる。先生に寂しい思いさせてるから…」

「とにかくっ…子供は返して！」

奥さんが手を広げると琴美は子供を強く抱きしめる。

「いやよっ！私だって子供がいたのよ！でも村山先生が産む事に反対から…」

「…？何を言ってるの？何であなたが主人の子供を産むのよ！」

「…奥さん！私達は愛し合っていました。先生はどうかわからないけ

ど…私は今でも…」

「だから…殺したの？あなたのものにならなかったから」

「ねえ…そんな事よりパパはどこお？」

「パパに会いたい？」

「うん…！」

「やめて…！」

「ここが自宅か？」

「はい。琴美って子の家です。」

ピンポン

「……………」

「…いないようです…。」

「どこかに出掛けてるのか…」

刑事さん達は家を見上げていた。

プルルッ

「もしもし」

「ナツキ？」

「琴美どうしたの？」

「……うん。今から会えない？話しておきたい事があるの…それに夜風が気持ちいいよ」

「うん…いいけど…。場所は？」

「………学校…」

「え！？学校？それってヤバいんじゃない？」

「大丈夫よ。私 前に行った事あるから…」

「でもっ」

「とにかく待ってるわ。じゃっ…」

「…あ！」

琴美は一方的に電話を切った。

もしかすると明日自首するつもりだから最後に学校に行きたかったかも知れない…

わたしはそう思い、すぐに支度を済ませ学校へと向かった。

「警部…村山の妻から電話が…」

「ん？用は？」

「先程まで、琴美という生徒がナイフを持って自宅に浸入してたそうです！」

「なに！？無事なのか？」

「…ええ！奥さんも子供も無事でした。ただ琴美という生徒はかなり精神的におかしかったらしいです…」

「どういう風に？」

「最初は自分の名前を『コトミ』と言っていたけど後から『ナツコ』って言ってたそうです。」

「ナツコ？」

「…はあ…はあ…」

わたしは学校の門の前に着いた。だけど足が動かない。

夜の学校は昼と違ってとても不気味に見えたが、ここまで来て帰る訳にもいかない。

そして何故か、空気の流れが一気に変わってとても寒く感じる。

「ナツキ…待ってたわ…」

琴美が校門の向こうから姿を現した。

夜のせいか琴美の雰囲気の不気味さを増していた。

わたしは門を飛び越えると琴美を見つめた。

「…で話って？」

「その前に屋上に行きたい。」

「え？…うん。」

わたしと琴美は歩き出し、真っ暗な深夜の学校に消えていった。

030 琴美の行『動』（後書き）

いよいよ8月になりました。

これからも宜しく願います！

031 琴美の行『動』2

わたしと琴美は学校の屋上にいた。

元々今日の気温は低く、屋上は更に北風が強くなり寒くなっていた。

わたしと琴美はいつもの場所に立ち、屋上から見える町の明かりを見ていた。

「…それで話して？」

「うん。」

「明日、自首する気にはなった？」

「さっきね…村山先生の自宅に行つて来たの…」

「…？なにしに？」

「二人を殺しに。」

「…！？まさか…！？」

わたしは唾を飲み込んだ。
琴美はわたしを見て笑う。

「…ふふ…大丈夫よ。さすがに殺しは無理だったわ。」

「何言つてんのよ！何で更に人を殺す必要があるの？何でそこに行く必要があるの！」

琴美は屋上から見える暗い運動場を見つめながら口を開く。

「…私ね…自分の子供墮ろして以来…何もする気力がなかったのはつきり言えば死ぬつもりだった…」

そしたらある夜寝てたら突然目が覚めたの。何故か目の前に女の人がいて。

髪の毛で顔が隠れて顔はわからないけど…」

「…まさか…」

「私はあまりの恐怖で声が出なかったわ…体も動かなかった。すると突然 その人が言ったのよ。『あなたの気持ちわかるわ…』って…」

「…気持ち…？」

「うん…『あたしも好きな人の子供の事で悩んだ』って…」

「ねえ…その人…“奈津子”っていう名前だった？」

「…うん。言ってたわ。ナツキの前にも現れたの…？」

「……………」

わたしは言葉が出なかった。

まさか琴美の前にまで現れてるなんて。

「彼女が言ったのよ『先生を殺せ！仇を伐て』って…」

「……………」

「その言葉を聞いて気づいたの。

今まで何もやる気なかったのに…その言葉には体が反応した。
つまり、私は復讐を望んでたって…！」

琴美の背中が小さく震えていた。

「…琴美…」

「でも、いざ殺してみると何故か後悔した。自分で何て事したんだ
ろうって思った。

だから…あの二人も殺して先生と一緒に三人で天国で暮らして欲しいと。

でも出来なかった。そうすると先生が怒りそうな気がして。」

「……………」

琴美は流していた涙を拭いたかと思えば、いきなり目の前のフェンスを登り始めた。

「ちよっ…琴美…何してるの？やめてよ！」

わたしは琴美の背中を抱き、登るのを阻止した。

「離して！お願い！」

琴美はわたしを力強く蹴飛ばした。

ガッ…！

「きゃっ…」

わたし上手くバランスを取り倒れる事は無くすぐに琴美を止めようとしたが、
既にフェンスの向こう側に立っていた。

わたしはただ名前を呼ぶ事しか出来ない。

「…琴美！」

「ねえ、ナツキ…人を好きになるって大変な事よ。
ましてや恋人や奥さんのいる相手なんて…」

「……………」

ひゅうつうつ…と風が吹く。

「好きなんでしょ？」

「…………え！？」

「ナオキさんの事。」

「……………！」

「好きになるのって理屈じゃないから仕方ない。でもその後の行動は自分の責任でもあるの。」

私が先生と寝たのも私がしっかりしてなかったから悪いの。そうすれば子供だって……」

琴美は自分を責めるように言った。

以前のわたしなら理解に苦しむが、今なら分かる気がする。

琴美の気持ちだ。

好きになっではいけない人への『想い』。

「……でも……止まらないじゃない？わかっててもしてしまう事って……」

「そうすれば誰かが必ず傷つく。わかるでしょ？」

「……………うん」

「私は正直、直樹さんとの付き合いは認められない。こんな思いするのは私で十分。」

ナツキにとって初恋かも知れないけど片思いで終わらせて欲しいの。これが私からの最後のお願い……」

「……最後？」

「うん。私…先生に嫌われてるかも知れないけど…やっぱり傍にいたい。」

「わたしには諦めろって言うておいて自分は先生の傍にいる気？駄目よ！生きて！生きて償ってよ！」

「ううん無理よ。だって約束だもの。奈津子さんの…」

「…約束？」

わたしがそう言った瞬間、琴美の背後から突然手が現れ、琴美の首を掴み身体ごと引っ張った。

「琴美！」

わたしは琴美に手を差し伸べた。

「琴美！」

わたしに手を差し伸べ返す事なく倒れるように消えて行く。

「……………！」

ひゅっううう…

冷たい風がわたしの頬に当たり、痛く感じる。

「…琴美？」

わたしは姿のない琴美を呼び掛けた。

「……………」。

しかし、返事は返って来ない。

わたしは勇気を出してフェンスを越え、下を眺めた。

「…琴美…」

小さい琴美の姿が目に入る。

「……………」

わたしはフェンスを越え、急いで下に降りた。

その途中わたしは何度も願った。

琴美の無事を…。

せめて命だけは…と。

「はっ…はっ…」

カンカンカン…

「…はっ…はっ…」

階段を降りると玄関が目に入る。

玄関はガラスで出来ているのでその向こう側に琴美の横たわってる姿が見えた。

わたしはおそろおそろゆっくりと近づいた。

「はっ…」

「はっ…」

「…琴美…」

今、目の前に琴美がいる…。

上から落ちてきた衝動で至る所が関節のように曲がりくねっていた。

…目は遠くを見たまま開いてた。

「…はっ…はっ…こ…とみ？」

わたしは震えながらも琴美を呼び掛けた。

「琴美！琴美！」

だが、琴美は何も反応を示さなかった。

ただひたすらそこに転がってるだけだった。

わたしはその場で膝をつき放心状態になった。

「……………」

そして涙が次から次へと溢れ止まらなかった。

「…うつ。」

「…うつうつ…」

わたしは泣きながら琴美との事を思い出した。

あかりとわたしの中立だった琴美。

何かあった時にいつもわたしを支えてくれたのは琴美の存在だった。

そんな琴美が奈津子さんの事で繋がってるなんて…。

「…だから言つたでしょ？」

突然、聞こえて来た声。わたしはゆっくりと顔を上げた。

だが、目の前には琴美しかない。

「……………？」

「あんたのせいだつて…」

いきなり琴美がムクリと起き上がった。

「……………！」

032 力強い『手』

「可哀相：あなたの友達や家族、あなたに関わる全てのものは不幸になるのよ」

ムクリと起き上がった琴美の鼻や口からは血が滴っていた。

そしてゆっくりとわたしを見つめ口を開いた。

「あなたはそれだけの事をしたのよ。あたしは絶対許さない。」

声が琴美の声ではなかった。

「……奈津子……さん……？」

「許さない！許さないからあ……」

「……奈津子さんのね？」

「許さないいいいい」

「そんなに許せないならさっさとわたしを殺せばいいじゃない！」

「……………」

バタッ。

琴美はそのまま倒れピクリとも動かなかった。

「…こ…琴美…ううう」

わたしはすぐに携帯を取り出し救急車を呼んだ。

全ての作業を終え、ボロボロになりながらも無事に家に着いた。

そして考える。

琴美にも奈津子さんが絡んで来た事を。

このままじゃ あかりやナオキくんにも危害が及ぶ…

更に恐怖を感じたわたしは、押し潰されそうになった。

だが、今のわたしには琴美が意識不明の重体で命が助かった事だけが救いだっただけ。

そしてふと、FAXが来ていた事に気がついた。
あかりから例の旅行の地図が送られて来たのだ。

「…大友尚道催眠事務所…？」

泊まる予定の建物の名前なのだが、その名前にびっくりした。

『大友尚道』というのが最近テレビでよくみる催眠博士の名前だったからだ。

- つまりナオキくんはその人の息子だったというわけだ。

・翌日・

あかり達は出発を一日ズラし琴美のそばにいた。

「なんでこんな事になっちゃったんだろね」

「……うん。」

あかりはそつと琴美の手を握り琴美を見つめる。

「どうして黙ってたの？」

「…え!？」

「琴美が妊娠してた事…正直ショックだよ。」

「ごめん。きつとあかりに心配かけたくなかったんだよ」

「でもナツキには話すのね。」

少し刺のある言い方をして、あかりは握っていた手をそつと戻す。

わたしは何て言えばいいのかわからないので少し黙っていたら

「…まあ…それはいいとして…明日やっぱり一緒にいこ! ナツキも気分転換が必要だよ!」

「…うん…でも…」

「とにかく、よく考えてから返事ちょうだい。」

「…うん。」

そして翌日。

やっぱりわたしはあかり達とは行く事はできなかった。

ナオキくんの事もあるし、琴美の事がかなり気になったから。

「わかった。でも気が向いたら来て…一日でもいいから…ね？」

「ありがと。琴美の事はわたしがみとくから安心して楽しんで…」

あかりとの電話を終え、わたしは朝ごはんを作る。

ただでさえ最近食欲がないので消化に良い物を食材にし、テレビを観ながら食べた。

そして家の掃除をし、天気が良いので洗濯もした。
少しでも体を動かしていれば何も考えないで済む。

「…ふう。とりあえず終わったあ…」

わたしは家事を終え、ベットで横になっていた。

その時、以前道端で偶然会った不思議な力をもってる女の人の事を思い出した。

「…そーういや…あの『な』のつく人って言ってたなあ…」

それってナツコさんの事だったのかな？
ちよつと連絡取ってみようかな？」

わたしはその人からもらったメモを大事に机にしまったので、それを取り出し電話をかけてみた。

するとワンコールもしない内に相手が出てくれた。

「もしもし……」

「あ・あの……わたし以前あなたに道で見てもらった人なんです……」

「はい」

「ナツキと言います。」

「あなたがナツキちゃん？」

その人はわたしが名前を言つと過剰に反応したのでびっくりした。

「あ・はい……」

「……実は……あの子から遺言が……」

「遺言？」

「はい……あの子は1カ月前に交通事故で亡くなりました。」

「……亡くなつたんですか？」

「はい。病院に運ばれたんですけど出血が多くてね。その時うわ言を言っただけで…」

「なんて？」

「女性の住んでたアパートに行け…」と…」

「アパート？」

確か、わたしは奈津子さんの実家には行ったが、亡くなる直前まで住んでたアパートには行っていなかった。

「ただそれだけです。」

あの子は人とちょっと違うけど言ってる事はまちがった事じゃないです。

だから言われた事守って下さい。そうすればあの子も喜ぶます。」

そして電話を切った。

やはりこれも奈津子さんの“怨念”のせいなのだろうか？

たった一回しか会ってない人でさえも巻き添えにするなんて。

「偶然にしちゃ…おかしいもの…わたしと会った人が次々と死ぬ」

言葉にすると現実味が増してきて怖くなる。その時電話が鳴った。

「ナツキちゃん？琴美の母です。」

「…あ・どうも…」

「たった今、琴美は天国に逝きました。」

「…え？」

「今まで友達でいてくれてありがとうございました。琴美も…楽しかったと…うう…思い…ま…す…」

「…うそ…」

「…ううううっ」

この後、受話器からは母親の泣き声しか聞こえなかった。

「…琴美…」

わたしも一緒に泣いた。

こんな事で…こんな事でこの世を去るなんて…。

電話を切ったあと、部屋のベットに倒れ込んだ。

「…みんな…死ぬ…」

ただその言葉が浮かんで来た。

「…怖い…怖い！」

枕に顔を埋め、何も考えないようにした。

はっ…！

わたしは視線を感じ、顔を上げた。
横にはクローゼットがあり少し隙間が開いていた。

もちろん、ただの暗闇しか存在しないのだが、そこからはっきりと
視線を感じた。

「そこにいるなら出て来なさいよ！」

わたしはそこへめがけ枕を投げた。

バフッ…！

その衝動でドアがゆっくり開く。

ギイイイ…

「ひっ…」

そこには首を吊っている母親がいた。

「いやああああ」

叫びながら部屋を出た。

リビングに逃げたわたしはコートを着てサイフと携帯を持ち、家を飛び出た。

「…はっ…はっ…」

外は夕方になり、かなり冷えていた。

「もう…いや…」

そして、ただひたすら歩いた。

じっとしてられなかった。

家から離れたかった。

気付けば何故かあの駅にいた。

駅は夕方のラッシュでかなり人が多く、騒がしい。

そこはいつもと同じ時間でいつもと同じ空気が流れていた。

…もうあれから半年は経ってる…。

誰があの事件の事を記憶してるのだろうか？

誰がわたしのせいだと知ってるだろうか？

本当にわたしのせいだろうか…？

遠くから電車がやって来る音がした。

…もうこのまま死んでしまおうか？

…このまま線路へ飛び込もう…

考える事に疲れたわたしはそう考え、足を一步前に踏み出した。

…これ以上誰かを巻き込むのは嫌だ…

さらに一步前へ踏み出した。

プアアアアアアーン

ガシッ！

誰かに腕を掴まれた。

「駄目だよ、ナツキちゃん…。死んじゃいけない。いけないよ。」

力強くわたしの腕を掴んだのはナオキくんだった。

「ナオキくん…?」

だが、それは幻だった。

わたしの心の中で死にたくない気持ちがわたしを止めたのだろう。

……………。

わたしは少し考え電車に乗る事にした。

そしてあかりとナオキくんのいるトコへ行こうと思いついた。

理由はただひとつ。

…彼に会いたくて…。

032 力強い『手』（後書き）

次回からまた新たな展開が！？
お楽しみに

033 あかりのお『願』い

ガタン…ガタン…

辺りは真っ暗になって来たのでほとんど景色は見えず、街の明かりが目立ち始めていた。

わたしはサイフからある紙キレを取り出した。

「…大友尚道催眠事務所…」

そう…それは…あかりから送られて来たFAXだった。

わたしはそれを見つめ、場所を確認していた。

なんとか、行けそうだ。

ガタン…ガタン…

わたしの中で何かが変わっていた。

それは恐怖が後押ししてるのか、

琴美が死んだ事が後押ししてるのかわたしにはわからないが、ただ素直にナオキくんに会いたかった。

「ナオキくん…」

「あゝあ！結局ナツキ来なかったね…」

「…しょうがないよ。そんな気分になれないだろうし」

「ホントなら皆で楽しむ予定だったのに…なんでこんな事になっちやっただろ？」

「ほらあゝ考えたってしょうがないだろ。俺、喉渴いた…何か買ってくるか？」

「あ・お願い。あたしフロに入って来る。先に入ってるからナオキも後から来てね」

「ばあゝか。とりあえず買ってくる…」

ボタン…

家と少し離れた所に自動販売機があつて、そこへ向かってナオキくんは歩ていた。

「ふうゝ。やつぱ寒いなこは。早く買お。」

「ナオキくん！」

「ん？」

一瞬、足を止めるナオキくん。

だけどまたすぐに歩き出すので、わたしはまた名前を呼んだ。

「ナオキくんっ!!」

首をキョロキョロさせ、ようやくわたしに気付き、驚いていた。

「ナツキちゃん？」

「ナオキくん！」

わたしは直樹くんに抱きついた。

無意識だった。

ただ会いたくて…気付けば彼に向かって走っていた。

わたしは初めて自分からナオキくんに触れる事が出来た。

触れたかった。

その体温があまりにも気持ちよすぎてわたしは

このまま時間が止まってしまえばいいのに…。

そう心から願った…。

「…ナ…ナツキちゃん…？」

ナオキくんはびっくりして呆然としていた。

「ナツキちゃん…来てくれたんだね？」

ナオキくんの一言に目が覚めた。

「やだ、ごめん！急に抱きついたりして…わたし何やってんだろ」

わたしはゆっくりとナオキくんから離れた。

「ははは…。でも悪い気はしないよ。でもどうしたの？泣いてない？」

「…あ・うん…ちょっと色々考えてたもんだから…何か混乱してるみたい」

「とりあえずさ、俺んトコ行こうよ。あかりもいる事だし…」

ナオキくんはわたしの腕を掴み寝泊まりする場所へと誘導した。

「ごめん…わたしやっぱり駄目。なんか二人の邪魔してるみたいだし」

わたしは足を止め、首を横に振った。

「何言っただよ。」

元々はみんなで行こうって話から出てるんだから君はいて当然なんだよ

。変な気つかうなよな！」

ナオキくんは笑顔でわたしにそう言ってくれた。

彼のやさしさが痛かった。

彼の笑顔が眩しかった。

それが全部あかりに向けられてると考えると正直、胸が痛い…。

それでもわたしは隠さなければいけないのだろう。この気持ちを…。

「ほらっ！遠慮しないでこっちに来いよ」

ナオキくんは戸惑っているわたしの背中を押すように強く言った。

「わかった。行く…」

「はは…そう来なくちゃ…」

事務所は意外と大きかった。

五階建てのビルで三階に私達が寝泊まりする場所になっていた。

「なんで黙ってたの？」

「え？何が？」

ナオキくんがわたしに聞き返して来た。

「お父さんが有名人だって事…わたしびっくりしたよ。」

「…ああ、あんまり言いたくなかったんだよ。俺と親父あんまり仲良くないし…」

別に有名だからって芸能人じゃないし…ね。
でも細木数子くらい有名になったら言ってたかも。」

「まあ…そう言われればそうね」

エレベーターで3階に上がり、部屋のドアを開けた。

「おーい！あかり！ナツキちゃん来たぞ！」

「え？うそ！？ナツキ…！？」

バスタオルを巻いたあかりがフロ場から出てきた。

わたしはその光景を見て2人がまるで本物の夫婦に見えて…
二人の愛の部屋に入っていくような気がして少し複雑だった。

「わあ！嬉しい！来てくれたんだね。」

「うん。それと報告したい事もあって…琴美の事なんだけど…」

わたしは今日琴美が病院で亡くなった事を2人に話した。

あかりはバスタオルのまま直樹くんに抱きつきながら泣いていて、ナオキくんはあかりをそつとやさしく包むように黙ってた。

しばらくすると、あかりは、

「ごめん。ちょっと服を着てくる」

といい、隣の部屋へ行った。

わたしとナオキくんは黙ったまま あかりが戻って来るのを待っていた。

「ナツキちゃん…ツライだろうが、君もがんばるんだよ…時々君みてる俺もツラくなる。」

君と知り合ったのは何かの縁だし幸せになって欲しい…」

そういつてナオキくんはわたしの手を握った。

「ありがとう…」

わたしはナオキくんの手を握り返したかったが、あかりの横でそんな事できるわけもなく優しく手を離れた。

「あ・ごめん。」

ナオキくん少し照れ臭そうに頭を掻いていた。

「ん〜ん…ありがとね。でも嬉しいよ。わたしの事心配してくれて

る人がいるなんて…」

「当たり前だよ。君は一人じゃない…」

「…うん。」

わたしは少し笑い、ナオキくんを見た。

ナオキくんはわたしをじつ〜と見つめ小さな声で -

「さっき…何で抱きついて来たんだ？」

「…え？」

「君が抱きついて来なけりゃ…俺は気持ちを整理出来たのに…」

「…え？…」

一瞬、何を言ってるのか分からなかった。

直樹くんはいつもと違う表情でわたしを見ていた。

「…ナオキくん…それって…」

「……………」

ナオキくんはずっと黙ったままだった。

「……………あ。」

ナオキくんのその態度をみたら、わたしまで変に緊張してしまった。

ガチャ…

あかりが隣の部屋から出て来た。

「あたし達も明日には帰らなきゃね」

「あ…そうだな…」

ナオキくんは立ち上がり -

「俺…ちよつと外の空気吸ってくる…」

「…？ いいけど…。さっきも出たばかりじゃないの？」

「…あ…いや、ほら2人で琴美ちゃんの事とか話したいだろうし…」

ナオキくんはオロオロした様子であかりと目を合わせようとしないかった。

あかりは首を横に傾げながら、

「…まあね、行ってきたら？」

ナオキくんは軽くわたしに挨拶をして外へ出ていった。

わたしもさっきの事で変な緊張感があり、あかりと2人になるのが少し恐い気がした。

「ねえ……」

あかりが低い声でわたしに呼びかける。

「……ん？」

「お願いだから、ナオキの事好きにならないでよ？ナオキは誰にでも優しいんだから……」

突然のあかりの言葉にびっくりした。

もしかして……さっきの会話聞こえたのだろうか……？

わたしは更にドキドキしたが平然を装った。

「………わかってる……」

「絶対だよ？あたし……前から気になってたのよ……もしかして……ナオキは……」

「あかり！もう心配しすぎて！」

「……わかってる……でも何か感じるの……」

「………。やっぱりわたし帰ろうか？」

「あ、ごめん！そういうつもりじゃないの……ただ……気になって……ごめん、忘れて……」

そういつてあかりはキッチンへ向かった。

033 あかりのお『願』い（後書き）

やばっ、凄く寝ぼけてるよ。
感想よろしくうう！

034 ホントの気持『ち』

「…何か飲む？アルコール類だってあるよ？」

あかりがビールを冷蔵庫から取って見せていた。

「ダメだよ。仮にも未成年でしょ！紅茶ある？」

「ふふ…マジメだね。ナツキは」

笑いながらわたしに紅茶を差し出した。

「琴美…いなくなっちゃったんだねえ…」

「うん…。」

あかりはまた目に涙をうかべ、わたしもつられて泣いていた。

そして、琴美の事を思いながら夜を明かした。

- 朝 -

わたしは何気に目が覚めた。

時計をみるとまだ朝の五時半だった。

「ちょっと早く目が覚めたな…眠れそうにないから散歩でも行こうかな」

わたしは服を持って来てないので昨日と同じ服に着替えた。

事務所とはいえ来客用の為の部屋なのか、服以外はみんな用意されていた。

「直樹くん家ってかなり金持ちだろうね」

わたしは独り言を言いながら静かに外へ出た。

「寒い〜…」

外に出るとかなり空気が乾燥していて気温は低く。
すぐに手がかじかんできた。

近くには大きな公園があつて、わたしはそこを歩いた。

「…空気はキレイ。都会とは違うのね」

深呼吸をし、田舎の綺麗な空気を味わう。
空を眺めるとまだうす暗く夜は明けてなかった。

「……………」

わたしは空をじっと眺め、ある決意をした。

それはしばらく、あかりやナオキくんに会わない事を。

そして奈津子さんの事をもっと調べてみることに。

「ナツキちゃん」

「 - え！？ 」

わたしは思わずびっくりして声をあげてしまう。

「ごめん。俺だよ」

「ナオキくん…」

「昨日、あれから眠れなくて…」

「え？ うん」

「俺、自分でもよくわからなかったんだ」

ナオキくん何かを話し出した。

「わからないって…何が？」

「自分の気持ち。」

「……………！」

「最初に会った時からそうだった…君はずっと何かを隠し続けて来た。

誰にも真実を語ろうとしなかった。俺はそれが不思議でなかった。

あかりが傍にいても君が苦しんでいる姿が浮かんできて…君の事いつも心配してた。」

「……………」

「君の事考え過ぎたのだろう。気付いたら君は俺の心に住みついたんだ。」

衝撃な告白だった。

「ナ・ナオキくん…もうやめよ…?」

わたしは話をそらせようと笑った。

だってこれ以上話したってどうにもならないし。

「俺はここ最近ずっと変なんだ。自分が自分でないような気がして…」

「ナオキくん！もういいよ。」

「言わせてくれ！俺はずっと我慢してきたんだ！あかりの前では嘘の自分を演じなければいけない！多分あかりも気付いてる…」

「やめてよ…」

わたしは大声をあげた。

「俺はただ……」

「わたし……許さないから！あかりを傷つけたら　いくらナオキくんでも……」

「じゃあ、君はなんで俺に泣きながら抱きついて来たんだ！」

今度はナオキくんが真剣な顔で怒鳴った。

「……………！」

「あれを見て俺は気持ちがあつきりしたんだ。君を守らなきゃ……君を守りたいって……」

「直樹くんはわたしに同情してるのよ。好きとは別な気持ちなのよ」

「ああ。最初はそうだったのかも知れない。でも同情から変わる愛だってあるだろ？」

「……でも……」

「君の気持ちはどうなんだい？俺はそこが聞きたい」

「わたしは………」

チャラチャラ～

いきなりナオキくんの着メロが鳴った。

わたしはハッとしてナオキくに背を向けた。

このままだと自分の気持ちを言ってしまいそうだったから。

それだけはどうしても避けたい。

「もしもし…」

ああ、今外に散歩に出てる…。

ナツキちゃん？…知らないなあ…

いないの？じゃあ散歩がてら探してくるよ。

わかった、後でな…」

ナオキくんは携帯をポケットにしまった。

「今の…あかり？」

わたしはごまかす様に笑顔でナオキくんを見た。

「ああ、君とは会ってない事にした。だから君も一人で散歩した事にしてくれ。」

「うん…じゃあわたし行くね」

「ナツキちゃん！」

ナオキくんはわたしの腕を引っ張り強く抱き締めた。

「きゃっ…」

「俺は本気なんだ…これだけはわかってくれ！」

「…痛いよ…ナオキくん…」

わたしは否定しながらも内心はすごくドキドキして離れたくないと強く思っていた。

ナオキくんの力強さが心地良かった。

…けど、

「もう…やめて…！」

わたしは力いっぱいナオキくんを振り払った。

「ナツキちゃん！」

「…ありがとうナオキくん…気持ちだけ頂くわ…じゃあね」

わたしはその場を走った。

ナオキくんが見えなくなるまで走った。

「ハア…ハア…」

今度はどんどん堪えていた涙が溢れて来た。

「…ハア…ハア…！」

…ザッ…

「ズルイよ…そんなの…だって…ナオキくんはあかりの…あかりの恋人だモン…」

わたしにはナオキくんを好きになる資格なんて…

…うつうつうつうつうつうつ…うつうつうつうつ…！！」

わたしはやり場のない怒りと苦しさでその場で泣き崩れてしまった。

「おかえり〜ナツキ。長い散歩だったね。」

わたしはしばらくしてあかり達の元に戻って来た。

「なんか知らないうちに遠くまで歩いていたみたい。ごめんね心配かけて。」

「いいけど。あたしとナオキは先に朝御飯食べちゃったよ？」

「あ・うん…」

わたしはテーブルに腰掛け、目の前にあった朝食のパンを取り、

「いただきますあ〜す」

と言って食べ始めた。

「ナツキ、御飯食べたら帰る支度してね。今夜、琴美の告別式やるみたい」

「……うん。」

そしてわたし達はあつという間に地元に戻って来た。

その帰り道の間、ナオキくんとも目を合わす事無く、話すらしなかった。

「じゃっ、後で」

わたし達は駅で別れ、一旦家に戻り、琴美の家でまた集まらなければならぬ。

わたしは色々と考えながら家に向かった。

だが、家に着くと家の前にナオキくんがいた。

「……あれ？なんで……」

いきなりナオキくんはわたしのトコに駆け寄り、キスをして来た。

「……んっ！」

わたしはびっくりしてナオキくんを思いきり突き放しビンタをした。

バシッ…！

「いい加減にして！」

「こうでもしなきゃ…俺の気持ちは通じないだろ？」

そう言うナオキくんの顔がとても寂しそうだった。

「頼む…君の気持ちが知りたいんだ…教えてくれないか？」

「どうして？今更そんな事知って何になるの？」

「君が俺の事を好きならあかりと別れようと思う。」

「駄目よ！じゃあ、はっきり言うわ…！ナオキくんの事何とも思っていない！ただの友達よ！」

「……なあ！本当の気持ちを言ってくれ！」

「本当の気持ちよ！」

「……………！」

「わたしはナオキくんの事…友達以上に思っていない。」

「それが君の本音か？ただの俺の思い過ごしか…？」

「…そうよ…。だから…あかりの傍にいてやって！もう…帰って！」

わたしは大きな声で言った。

034 ホントの気持『ち』（後書き）

なんか、韓国ドラマみたいになってるね（笑）

035 ホントの気持ち、『望』んでいた事。

「…わかった。急にキスしたりしてごめん。
俺はただ…自分の気持ちに嘘をつきたくないんだ。
それはもちろん君やあかりに対しても…だ。」

「わかってる」

「…じゃあ…あとでな…」

「…うん。」

わたしはゆつくりと玄関のドアを開け中に入った。

…ボタン…

ドア越しにナオキくんが遠ざかる足音が聞こえる。

「……………」

わたしは必死に声を殺しながら泣いていた。

「…うううう」

口を両手で押さえながら…ナオキくんに聞こえない様に。

「…うつうつうつうつ…」

わたしはシャワーを浴びていた。

浴びながらさっきまでの出来事を思い返す。

本当はナオキくんの事好きでたまらないのに受け入れる事のできない自分に腹が立つ。

でも、あかりを悲しませたくないのも事実だ。

わたしはシャワーを終え、洗面台の前に立った。

このままじゃ…いけない…今…直樹くんに会おうとわたしはあかりを裏切る事になる。

わたしは制服に着替え、琴美の家へ向かう準備をした。

琴美の家に着くと、既に2人の姿があった。

「ナツキ…」

あかりはもう既にボロボロになり、涙で顔はぐしゃぐしゃになって

いた。

わたしは琴美に線香をあげ、あいさつをした。

琴美の母親の話によると、

部屋には遺書があり村山先生との事件の罪を認める内容になってるらしく事件は解決した事になった。

もちろん彼を好きになったのは彼女の意志だが、

その心の隙間に入って来た奈津子さんをわたしは許せないと思った。

そして、絶対あかりやナオキくん近づけさせない…と決心をした。

わたしは2人には会わず、そのまま自宅に戻った。

そして、年が明け冬休みもあつという間に終わり3学期が始まった。

学校が始まってわたしはなるべくあかりを避け、ナオキくんとも会わない日々が続いた。

このまま行けば、わたしは直樹くんに深入りせずに済む。

あかりを傷付ける事もない。

そう自分に言いきかせた。

だが、うらはらに孤独感が日増しに強くなり直樹くんに会いたい気持ちだけが大きくなっていった。

…そう…

きつと待っていたに違いない。

彼女、奈津子さんは…

わたしの心に隙間ができる瞬間を！！

…。

…。

「……………」

「…う。」

「……気づいた？ナツキちゃん……」

「ん？」

「おはよ。」

「ナオキくん……？」

「なんで驚いてんの？」

わたしはゆっくりと身体を起こした。

「え？」

わたしは自分が服を着てない事に気づいた。

「きゃっ」

「あはは…何だよ。今更照れるなよ」

「…なんで？……」

「なんでって昨夜、君が会いたって俺を呼んだじゃないか……」

「まさか」

わたしは全てを把握した。

奈津子さんがわたしに取り憑いてナオキくんを誘った事を！

「…ナツキちゃん…何で黙ってるんだ…やっぱり俺とこうなった事後悔してるのか？」

「ナオキくん…ごめんね…あなたを巻き込んで…わたし…」

「…ん？」

ナオキくんは優しい目でわたしの話に耳を傾けた。

目が合うと言いくいのでわたしは向こうを向いて言った。

「わたしじゃないの…ナオキくんを誘ったのは……」

「何言ってるんだよ？君しかいないじゃないか…。現にこうして二人で朝を迎えているのに？」

「…そうだけど…だから本当のわたしじゃないと言っのかな…」

「じゃあ…ノリで？」

「違う！身体はわたしであって心はわたしでないと云うか…」

「…まさか…あの女の人とでも？」

「……………」

わたしは「うん」と言う代わりに首を縦に振った。

「そうなのか？あの女の人君にとり憑いて…俺と寝たのか？」

「…うん。」

「そうか…そうだったのか…」

「…だから…だからゆうべの事は忘れて！あかりの傍に戻って！」

わたしは声振り絞って言った。けど、ナオキくんは

「俺はね…何となく気づいてたよ…ゆうべの君は君じゃないって…」

「…え！？」

「そりゃあ…俺は君の事見て来たつもりだし。好きだし…」

「気づいててわたしと寝たの！？信じられない！身体はわたしでも心はわたしじゃないのよ…！」

わたしは立ち上がり服を着た。

「悪かったとは思っ…でも、俺はそれでも良かった！

君に触れる事が出来るなら…君に少しでも近づく事ができるならっ」

「勝手な事言わないでよ！わたしの気持ちはどうなるのよ…！
それに…わたしにとっては初めての…」

すると、ナオキくんは後ろからわたしを抱き締めた。

「…ごめん…確かにズルイとは思っ…」

でも俺は君の事が気になって仕方ないんだ…好きなんだよ！君だつて本当は俺のこと…」

ナオキくんは抱き締めてる腕を更に強くした。

「…好きよ！わたし…直樹くんの事好き！」

わたしはとうとう直樹くんに自分の気持ちを打ち明けた。

「…だからわかって欲しいの…」

あなたもあかりも巻き添えにしたくないの…好きだから…わかって…」

わたしは胸の内から込み上げてくる感情を抑える事が出来なかった。

このまま隠し続ける事が

真っ直ぐに向かつてくるナオキくんに悪い気がしたから。

いや…彼を好きだと気づいた時点でわたしは待っていたのだ。

この日が来る事を…。

本当はあかりが羨ましかった。

嫉んでた。

許せなかった。

わたしだけを見て欲しかった。

「…うつ…」

わたしは一気に力が抜け、ナオキくんに寄り掛かった。

涙が次から次へと溢れて止まらなかった。

わたしは自分が愚かな人間だと言う事に今更ながら気付いたのだ。

結局は心の狭い人間だという事を。

「ナツキちゃん…何も怖がらなくていいんだよ…君は俺が守る…守つてみせるよ！」

そういつてナオキくんはわたしの目を見た。

「…うん…」

わたしは目をゆっくり閉じ、キスをした。

そして、わたし達は本当に結ばれた。

「ねえナオキくん…あかりはどうなるの？」

「大丈夫。近いうち俺からちゃんと言うよ。だから君は心配しないで…」

「すごく怒るだろうな。きっと許してくれない
あかりはああ見えてもすごい一途なトコあるから」

「…わかってる…」

「……………」

わたし達はベッドの上で天上を見つめながら寄り添っていた。

「ねえ…なんでわたしがあの女の人に狙われてるか教えてなかった
よね？」

「それって君がずっと秘密にしてた事？」

「そう…実はね、あれは確か夏休みが始まってまだ間もない頃に」

こうしてわたしはナオキくんに全てを話した。

035 ホントの気持ち、『望』んでいた事。(後書き)

ますます韓国ドラマに(笑)

036 あかりが口に『し』たこと。

「…つまり、君はその奈津子さんを突き落とした…と？」

「そういう事になるね…だから…わたし警察に事情を説明しに行こうとしたわ

でも…それも許されなかった。わたし…奈津子さんだけでなく、そのチカンおじさんにも狙われてるの」

「…？ 何言ってるんだ！？あのオヤジが死んだのは君のせいではないだろ？」

「でも、わたしが狙われてるのは事実よ」

「無茶苦茶だ！そんなの馬鹿げてる！そもそも奈津子という女性は遺書があっただろう？」

「自殺するつもりなら何で君を狙うんだ？」

「彼女のお姉さんが言ってた。被害妄想が激しいトコあるって。彼女の歪んだ憎しみがわたしに…」

「君の言う事がホントなら、早く見せてもらった方がいい…。力のある人に」

「一人いたわ。でもその人も…ここにはいない。」

「……え？」

「そうやって琴美も…琴美も死んだのよ！わたしのせいだ！」

わたしは琴美のあの時の顔を思い出し、体が震えだした。

ナオキくんはただ心配そうにわたしを見つめている。

「ナツキちゃん？」

「あの時琴美が言ったの…“彼女との約束”って…現れたのよ！琴美の前に！」

「ナツキちゃん！落ち着いて…」

「だから！だから聞いて…直樹くん！…わたしには関わらないで！ゆうべの事忘れて！」

わたしは直樹くんの目を真っ直ぐみて訴えた。

いきなりの事に直樹くんはキョトンとしてたが、すぐに口を開いた。

「それは出来ないよ。俺は君が好きなんだ。やっと君とひとつになれたのに…無理だよ。」

そう言っでわたしを抱き締めた。わたしは払いのけようとしたが、腕に力が入らない。

「もう…どうしてわかってくれないの…？」

「わかってないのは君だよ…君こそどうして素直にならない？」

確かに君は色んなものを抱えてる…でも俺はそれでも君がいい！君

でなきゃ…」

「本気で言ってる？もしかしたら死んじゃうかも知れないんだよ？」

「ああ、本気だ。」

ナオキくんの目は強くわたしを見つめていた。

それはまさしく本気の間だった。

わたしはその目に吸い込まれ、キスをした。

「ナオキくん…」

「好きだよナツキちゃん…俺は君を守りたい…だから、俺を信じて欲しい。」

「…うん。」

わたしはベッドへ押し倒されナオキくんの“体温”に包まれる。

その瞬間、わたしは周りの事がどうでも良くなった。

今ある危機もあかりの事も…。

ただ幸せだった…。

そして、それからまた月日が経ち、3月になった。

学校では3年生が既に学校を卒業し、期末考査も終わった。

授業も短縮に入り、少し自由の時間が増えた。

「ねえ、ナツキ今日一緒に帰らない？おいしいケーキ屋見つけたんだ……」

あかりが帰りのホームルーム直前に言った。

「あ・ごめん。今日用事があるんだ。」

「ふうん最近、付き合い悪いよね。そうそう、直樹もね付き合い悪いのよ。」

電話しても『忙しい』連発してさ」

「え？そうなんだ」

「学校が違うからさ、仕方ないんだけど……はあ……」

「ごめんね、あかり。」

「あ・いいのよいいのよ……」

「……じゃっ」

わたしが走り出そうとしたら、あかりがわたしを呼び止める。

「あ・ナツキ！」

「ん？」

「……良かった…あんたが元気になってくれて…」

「……………」

あかりが優しく微笑んだ。わたしも笑顔で、

「…ありがとう。」

そう言った。

今のわたしの元気はナオキくんがくれたもの。

だからあかりに対する『罪悪感』よりも
ナオキくんに対する『感謝』と『幸せ』しかなかった。

もうわたしは後戻りも出来ない。目の前の現実しか見えない。

わたしは駆け足で家に向かった。

家に帰ればナオキくんがいる。

わたし達はあれ以来、あかりに隠れて定期的に会っていた。

毎日だとバレル危険性があるので週に一回、わたしの家でわたし達は会っていた。

それがどんなに待ち遠しいか、そして何よりも楽しみだった…。

わたしは息が切れても走るのをやめなかった。

「わたし…信じられない…直樹さんと2人でこうやっていられるなんて…」

「俺もだよ…今…すごく幸せだよ。」

「…うん。」

わたし達はベッドでお互い寄り添ってた。

「…ねえ…あかりには感づかれてない？」

「さあ…？ただでさえマイナス思考な所があるからな…。もうそろそろかな？」

「…そろそろ？」

「ああ…学校も落ち着いて来たし…俺達も気持ちが一いつになったし。」

もう…あとはあかりに本当の事言っただけだろ？」

「……うん。そうだね…もう隠せないモンね。」

わたしはふと、あかりの泣く姿がよぎり、ナオキくんの腕の中に顔を埋める。

「どうした？怖い？」

「…ん。少し。」

「大丈夫だよ…時間をかければ。あかりだっていつかわかってくれる。」

そういつてナオキくんは笑った。

彼の笑顔はわたしを幸せにしてくれる。

その笑顔にわたしは楽になり、そのまま眠りについた。

・翌日・

わたしはあかりに呼ばれ学校の屋上にいた。

「…はあ。」

屋上に着くなり、あかりは深い溜息をした。

「どうしたの？あかり…」

「うん。ナオキの事なんだけどね…」

「ナオキくん？」

「どうやら他に好きな人がいるみたいなの。」

わたしの息が一瞬止まった。

無意識に次の言葉が出た。

「え？ナオキくんの口からそう聞いたの？」

「うん。昨日ナオキに会う為に学校に行ったんだ。

もう既にナオキは帰ってただけ…彼の友達から色々聞いちゃった。」

「色々って…？」

「これからある人に会いに行くって言っただけ。昨日は帰ったらいいよ。学校ではその人の話題ばかり口にするらしいの…。まあ、そのナオキの友達ってのはあたしの中学ん時の友達だから何でも話してくれるんだけど…」

「……………うん」

わたしは心臓が口から出そうなくらいドキドキした。

「わかつちゃった…相手が誰だか…」

「……………！」

「…なんでそうなるの？ナツキ…あたし…言っただじゃない！あれほどダメだって…」

あかりは真剣な顔でわたしを見つめていた。

けど、思ったより平然としていた。

「あかり…」

「…正直…あまりそこまで驚いてない。だって予感してたから。」

「……………」

「だってナツキ…直樹が現れてからずっとおかしかったんだものナオキの事でずっと悩んでたんでしょ？」

「……………え？」

「ずっと好きだったんでしょ？夏休みから…」

「……………」

あかりは大きなカン違いをしていた。

わたしが奈津子さんを恐れて苦しんでいるのをナオキくんが好きで苦しんでいると。

「でも！それだけは許さない！直樹を好きになんかならないですよ！あたしから直樹を盗らないですよ…！」

あかりは今まで我慢してた言葉をわたしにぶつけた。

「…あかり…ごめんねっ」

わたしはただあかりに謝りの言葉しか出て来ない。

その言葉を聞いたあかりが急に静かになった。

「……誰？」

「ーえ!？」

わたしはあかりを見た。

あかりはわたしを見ているようで見てない。
わたしの後ろを見ていた。

「………。」

わたしはゆっくりと後ろを見た。

「………。」

そこには誰もいなかった。

心したわたしは元の場所を振り向いた。

「あかり…？」

すると今度は、目の前にいたあかりの姿は消えていた。

「え？どこ？」

わたしはびつくりしてあかりを探す。

隠れるような場所もないので全部見たがどこにもいなかった。

「…まさか！」

わたしは急いで下を見た。

屋上から見える下を全部。

どこにもあかりの姿は見当たらなかった。

「はっ…良かった…自殺とかじゃない…はっ…はっ…」

安心したわたしは地面に座り込んだ。

037 あかりが口に『し』ようとしたこと。

教室に戻るとあかりはいたが、わたしと口を聞いてくれなかった。

仕方なくその日は何も言えないまま家に帰った。

家に帰る道、わたしはナオキくんにあかりにバレた事の報告の電話をすることに。

「もしもしナオキくん？ナツキだけど…」

『……うん』

「あかりに…わたし達の事バレたよ。」

『ああ、俺の友達が全部話したらしいね。時間の問題だからいいんだけど。』

ナオキくんは割りと淡々と話していた。

元々言うつもりだった彼にはちょうど良かったからだろうか？

でもわたしは嫌だった。どんな形でバレたにしろあかりにとって同じかもしれないが、

わたしかナオキくんの口から伝わって欲しかった。

「…こんな形でバレるって…」

『ごめんな。俺がもつと早く言っておけば…とにかく今からあかりと話してみる。』

「うん。優しく話してあげてね」

『わかった。また夜にでも電話する。』

「…うん。」

少しイライラしながらわたしは家に帰った。

「なんでこんな事になっちゃったんだろ」

温かいココアを飲みながらテレビを観ていた。

もちろん、集中など出来ない。

頭はナオキさんとあかりの事で一杯だった。

テレビを観ていても何度も携帯をチェックしてしまう自分がいる。そこへ、携帯が鳴った。

あかりからである。

わたしはすぐに携帯に出る事が出来ず数秒悩んだが、

いずれは向き合わないといけない事なので、不安ながら電話に出た。

「もしもし…」

『…あかりだけど…さっきまでナオキと話してたんだ。どうしてもあたしの口から言っておかないといけない事があるの…』

「え？…うん」

『実はね…あたし妊娠してるの』

「え？妊娠！？」

『もちろん、堕ろす気なんてないわ』

「……………それ…本当なの？」

『あたしが嘘ついてるとでも？』

「…いや…そういう意味じゃ…」

『さつき直樹にも言ったら何も言い返せなくなってた。
とにかくあたしの子供の事考えてナオキと話合ってみて…』

「……………うん」

『じゃ…また明日ね…』

あかりはそう言って電話を切った。

わたしは目の前が真っ白になる。

まさか、あかりが妊娠なんて…。

ピッ

「……………ふう。これで直樹やナツキに話したわ。

あの2人はもうくつつく事なんて無理…絶対そうはさせない!」

あかりは携帯を見つめながら独り言を言っていた。

カタッ。

「……誰?」

「……。。」

「誰かいるの?」

「……。。」

「もう…やめてよ!あなたなんか知らない!知らないわよ!」

「……うう」

「知らないってば!あたしに付いて来ないで!」

「……ううう」

「やめて!」

タッタッタッ…

「付いて来ないでってば…!」

あかりからの電話の後、すぐにナオキくんから電話があった。

「もしもし…」

『ナツキちゃん？あかりから聞いたかい？』

「やっぱり本当の事なの？」

『わからない…でもあかりがあんな嘘をつくとも思えないからな。悪いけど、もう少し時間がかかるよ』

「それは構わないけど…もしそれが事実なら…わたしナオキくんとは付き合えない」

『え…？…あ…その時になったら…ちゃんと話し合おう。』

「うん…じゃっ…」

わたしは携帯を切り、ソファへ体重をかけた。

「はあ」

わたしはひとつ大きな溜息をした。

翌日、わたしとあかりは学校の屋上にいた。

「もし…あかりの言う事が真実ならわたしは直樹くんとは付き合わない」

「そう！だったら直樹に近づかないで！お願いだから…あたしから

盗らないで!」

あかりはゆっくりとそう言った。

だが、変に落ち着きがない…時々周りを気にしている。

「あたしには…ナオキしかないの…ナツキだってわかってくれるでしょ?」

「…うん…わかってるよ。」

「ほんとに?」

「…うん。」

「本当にわかってるの? ねえ…! わかってるの!」

あかりは目を大きく見開きわたしに向かって言う。

その姿はどこか尋常ではない。

「ねえ! わかってるの?」

「…あかり?」

「………あたし…知ってるんだ………」

「え? 何を?」

「………。ううん、いい…教室に戻る。」

そう言っであかりは立ち上がり、下へおりて行く。

わたしはあかりの後ろ姿を見つめていた。

038 あかりが口に『し』た真実。

「ただいま…」

わたしは家に帰って来た。

最近はおオキくんが傍にいてくれて、あまり寂しさを感じなかったが、
今日はすごく孤独感を感じた。

「ふう」

わたしは部屋に入るなりベッドに倒れ込んだ。

『あたし…知ってるんだ…』

突然、あかりのセリフが脳裏によぎる。

あれは何を意味してるのだろうか？

わたしと直樹くんとのは知ってるだろうし…。

「うーん…」

いくら考えても思い当たるふしがない。

わたしは色々考えてるうちにそのまま眠ってしまった。

ピンポン

突然の呼び出し音にわたしは目を覚ました。

「あれ…？わたし…寝てたんだ…」

ピンポーン

二度目の音になる。

「…あ・はいはい…」

わたしは眠い身体を起こし、玄関のドアを開けた。

「どうも」

そこにいたのは、琴美の事件を調査していた刑事だった。

「あ・何か用ですか？」

「聞きたい事があるんですが、少し時間頂いてもいいですか？」

「あ…はい。」

わたしはコーヒーを入れテーブルに置いた。

「…あ・どうも。」

「それで用と言うのは？」

「実はですね」

刑事はポケットから一枚の写真をわたしに見せた。

その写真の人物にわたしは驚いた。

「…山田奈津子…という女性なんですが…見た事ありますか？」

「いいえ、ないです。」

わたしは思わず嘘をついた。

「その女性が何か？」

「…彼女は半年ほど前、その近くの駅で自殺を図りました。

私が担当だったんですが…電車が来る瞬間、投身したんです。

その拍子にはねられ亡くなったんですが…目撃者によると不自然だったらしいんです。

落ち方が…ね。」

「…はあ…」

わたしは微かに襲う震えをごまかそうとソファに掛けた。

「ホーム側を見てたらしいんです。

普通自殺する人はたいがい、遠くを見る様にして死ぬんですがね。誰かに押され、びっくりして振り返ったまま落ちたらしいんです…。

「

「…はあ…」

確かにあの時、わたしと奈津子さんは目が合った。

「まあ、私もおかしいとは思ってたんですが、自宅から遺書が発見され 結局は自殺で片付いたんですよ。ところがですね、今日の朝一通の手紙が届いたんです。」

今度はポケットから封筒らしきものを取り出し、中の手紙をわたしに見せた。

「たった一言しか、この手紙には書かれていませんでした。

“カギを握るのはこの女だ”…と。

そして一緒に…奈津子という女性の写真と、これ」

刑事はそう言うと、もう一枚の写真をテーブルの上に置いた。

「……うそ… これってわたし？」

「そうです。」

「……あ…。」

確かにこの写真はわたしだった。

写真から見てもあの日だろう。

わたしは恐る恐る顔を上げ、刑事さんに質問した。

「一体誰が？」

「…さあ…差出人はわかりません。無記名で届けられました。」

…本当にご存知ないんですね…？」

「……はい……」

「そうですか…用件はただそれだけです。まだ仕事が残ってるんで。」

「はい」

「…それから…最近、あなたの周りで色々起き過ぎじゃないですか？」

「…それって？」

「いやいや、深い意味はないですよ…何かあったら連絡下さい。」

「わかりました。」

刑事さんはお辞儀してそのまま帰って行った。

わたしはゆっくりと居間へと向かう。

「…あの日…わたしを見た人物がいる？」

わたしは警察に送りつけた人物が誰かをコーヒーを飲みながら考えていた。

だが、思いあたる人がいない。

「そもそも何で今頃になってわたしの事を？」

その時、わたしの頭の中である言葉が聞こえた。

『あたし…知ってるんだ…。』

・そう、あかりの一言だ。

「まさか…ね」

だとしたら…一体何の為に今まで黙ってたんだろう…と疑問が出てくる。

それこそさっぱり…やはり、わたしの知らない人なのだろうか？

ピンポーン

「また？…誰だろ」

ピンポーン

「…はいはい。」

ガチャッ

ドアを開けるとあかりだった。

「あかり…どうしたの？」

「ナオキ…あたしと別れるって！」

「え！？」

「…子供もいない…って！」

あかりはボロボロに涙を流し、嗚咽しながらわたしを見てた。

わたしはどうして良いか分からず、

「とにかく…上がって…」

「アンタのせいよ！ナツキ！アンタがいるからあゝ！」

「きゃっ…」

あかりは私の腕を掴み、中へ入って来た。

「…はっ…！」

あかりはわたしの後ろにゆっくりと視線を向ける。

そして大きく目を開いた。

「あかり…？」

「…ああ…あ」

不審に思ったわたしも後ろを向く…

その瞬間、大きな音が聞こえた。

ゴロゴロゴロ

カミナリである。

「きゃっ!!」

わたしが振り向いたその先には何もなかった。

いや、誰もいない。

だが、あかりはある一点から視線をそらさない。

「あかり…何を見てるの？」

「…やっぱり…ナツキには見えないんだ？」

「だから…何が…」

「女の人よ!!」

「……………!!」

「髪の毛の長い女の人はずっとこっちを見てるのよお!!」

声は聞こえないけど…口が動いてる…!!」

「…うそ…」

わたしはまた後ろを見た。やはり誰もいない。

それはどういう事なのだろう？

今、あかりが見ている人物が奈津子さんなら何故わたしには見えなののか。

「…もう…やめてよ…もう…」

あかりは耳を塞ぎ、何も見えないよう、目を閉じた。

「…あかり…」

何かにおびえるあかり。

まるで奈津子さんに怯えてるわたしそのものだ。

ザアアアアアーツ

いつの間に外は大雨になっていた。

「…ナツキ…あたしは…みんな知ってるの…」

あかりが突然話し出した。

「なにを？」

ザアアアアアーツ

「去年の夏の出来事よ…。あの駅の事件の日…。あたしそこにいたの。」

「…いたって？」

「…夏休みだったでしょ？あたし…友達の家泊まってて、そこから学校に行ったの。」

そしたらその駅でナツキを見て…あんな事になるなんて…」

ザアアアアアーツ

わたしは突然のあかりの言葉に何も言えず、ただひたすらに雨の音だけが響き渡っていた。

039 わたしとあかりとナオキ。

「だって…おかしかったから…」

あかりは言葉をかみ締めるように言いながら、わたしを見た。

「なにが？」

「…だって…あの日…あの駅で見てたの…あたしだけじゃない…」

「……………！？」

「ナオキもいたの…ううん、あれは見まちがいじゃないわ！」

あかりは自分に言いきかせるように言った。

「どういう事！？…だって…ナオキくん…わたしが話した時なにも言わなかったよ？」

「ナツキにずっと言ってたよね？ナオキはダメだって…
好きになっちゃ駄目だって…あたしずっと言ってたよね？」

あかり目からは涙が溢れていた。

「なんで…？なんでよ…意味わからない…」

「あたし…あの事件の後…すぐにナオキが現れた事が納得行かなくて…しばらく様子見てたわ…」

「…うん。」

「でも…ナオキが悪い人には見えなかった。それどころかとてもイ人で…」

「…うん…だからあかりも好きになったんでしょ？」

いつの間にかわたしの目からも涙が出ていた。

「そうね…結果的には…でも、それが間違いだったのよ！この事件に大きくナオキが絡んでるわ！」

「だから…どこにナオキくんが…」

「彼のお父さんの職業…知ってるわよね？」

「催眠術を使う人でしょ？」

「…おそらくは…あの幽霊は本物じゃない。」

「まさか！」

「だって…今、あたしに見えてナツキに見えないなんて…おかしいじゃない？」

「もしかして、心に隙がある人にしか見えないかも…」

「…やだ…近づいて来る…ごめん、あたし悪いけど帰る！」

「え…！？」

あかりはドアを開け、そのまま出て行った。

「ちょっと…あかり！」

ザアアアアアアアッー

ボタン。

「……………」

ゆっくりと後ろを振り返ったが、やはり誰もいなかった。

確かにあかりだけにしか見えてなかったみたいだ。

「…まさか…ナオキくんが…？」

わたしにはあまりにも信じられない事だ。

「でも…何故…」

「もしもし…」

「ナツキ？あかりだけど今、あたし病院にいるの。」

「え？どうして？」

「ナツキの家の近くにある公園の階段から落ちちゃって…
一応、捻挫だけで済んだけど、まだ検査が残ってて…」

「そんな事より赤ちゃんは？」

「うん。大丈夫…ナツキ…ううん…いい…またかける…」

「…あ」

ガチャッ…

ツ… ツ…

ツ… ツ…

「…何か言いたそうだったな…とにかくっわたしも行かなきゃ」

こうして、わたしは紙キレにある住所をあてに家を出た。

コン コン

「……………」

わたしは生前に奈津子さんの住んでいたアパートに来ていた。

コン コン

先程から部屋のドアをノックしているのだが、出て来ない。

今は別の人が住んでいるはずなのだが、留守なのだろうか？

「せっかく来たのに…」

引き揚げようとした、その時ドアが開いた。

「…ごめん、寝てたんだ。誰？」

若い男の人が出て来た。

多分、大学生くらいだろう。

「あ・すみません。あのこちらに前に山田奈津子さんって方が住んでたんですが…」

「ああ…山田さんね…俺の前に住んでたよ。自殺したって噂だけど？」

「わたし知り合いなんですけど…部屋見てみたいんですけど…いいですか？」

「いいけど…君いくつ？高校生だろ？」

「いいえ！違います！」

「…なんで嘘つくの？それより仮にも一人暮らしの男の部屋に入るんだよ。恐くない？」

「恐くないです。」

「…ふん…」

男の人はつまらなそうにわたしを見てた。

「ま・いいや。上がって…」

「はい…失礼します。」

わたしはその人の後に付いて行く様に部屋に入った。

039 わた『し』とあかりとナオキ。(後書き)

変な急展開ですな？

ホラーから離れてってます(笑)

040 稲『光』に見えた顔

部屋の中は意外とキレイで見た目よりは広く感じた。

「ふ〜ん…キレイな部屋ですね…彼女でもいるんですか？」

「いないよ…元から俺がキレイ好きでね…君が俺の彼女になる？」

「なに言ってるんですか！ …ふ〜ん…」

部屋に入ったら何かわかる気がしたんだけど

何をどうしたらいいのかわからないのでわたしは部屋を歩き廻った。

「…ねえ。」

わたしを呼ぶ声がしたので、振り向くと男の人がわたしの目と鼻の先にいた。

「きゃっ」

その反応を見て彼はニヤニヤしていた。

「俺が越して来た時、何枚かの写真が残されてたよ」

そういつて5枚ほどの写真をわたしに渡した。

「…うそ…」

わたしは目を疑った。

その写真には奈津子さんとナオキくんが写っている。

仲良く肩を並べ、幸せそうに微笑んでいる。

そう…それはまるで恋人どうしのように。

わたしは声も出ず、ただ呆然としていたら

心配してか男の人は声を掛ける。

「おい、大丈夫か？顔色悪いぜ。」

「…ひとつ聞いていいですか？

この写真に写っている女性…この部屋に出てきませんか？」

「それって幽霊のことか？ははは…こんな美人の幽霊だったら俺は感激だなあ」

そう言つて男は頭をボリボリ掻いていた。

「この写真頂いて行きます。どうもありがとうございました。」

「おいおい、もう帰る気？お茶でも飲んで行きなよ。今、コーヒー入れるからさ。」

「ごめんなさい…ホントに急いでるんです。それじゃ…」

「あ・ねえ…」

…ボタン…

わたしはそのアパートをあとにした。

わたしは以前、奈津子さんの実家に行った時のお姉さんの言った事を思い出した。

「奈津子は弟みたいな年下が好きなんです…」

…そうか…だとしたら…奈津子さんが21歳でナオキくんが17歳。

二人が付き合う可能性は十分に有り得る。

もし…ナオキくんがあ在现场を見ていたとしたら？

復讐の為にわたしに近づいた…？

じゃあ…奈津子さんの幽霊は…？

全部幻覚だとしても…？

まさか…それは有り得ない。

これは本人に確認をとるしかない。

わたしは携帯を手に取りナオキくんへダイヤルした。

だが、ナオキくんは電話に出なかった。

わたしはとりあえず、あかりのいる病院へ向かった。

「あかり！」

「ナツキ！来てくれてありがとう！」

あかりはわたしの顔を見るなり泣きそうに見えた。

「それより大丈夫なの？」

「うん。怪我の方は全然大丈夫。それよりナオキの事よ。」

「…まさか…あかりが怪我したのって…」

「ナツキ！お願いナオキを助けてあげて！彼はきつと何か苦しんでるのよ！」

自分でもどうしていいかわからないのよ！」

「…あの事件の日…ナオキくんらしき人物がいたのよね？」

「うん。あれはまちがいないと思う。」

「これ見て」

わたしは鞆からあのアパートに残っていた5枚の写真をあかりに見

せた。

あかりはその写真に集中する。

「ナオキの隣にいる人は誰なの？」

「その人なのよ…駅で亡くなった人は。」

彼女は当時ナオキくんが付き合っていた女性よ。」

「え！？それって…あの幽霊？顔が見えないからよくわかんない。」

「ナオキくんはわたしが彼女を突き落としたと思ってるかも。」

「だから復讐しようとしてるの？」

「わからない…どっちにしろ狙われているのはわたしだわ」

わたしはあかりに全ての事を話した。

琴美の事も全部。

あかりは何となく納得しつつ、
疑問いっぱい顔をしていた。

水を一杯飲むと今度はあかりが質問してきた。

「ひとつ疑問があるの。彼女は自殺したんでしょ？遺書だって見つかったのに」

どうしてナツキは奈津子さんの幽霊にもナオキくんにも狙われなきゃいけないの？」

「それはわからない。彼女が被害妄想と言えば話は終わるけど…それも…彼女が本物の幽霊ならね」

「…とにかくあたしも退院したら協力するから…ナオキの為にも」

「ごめんねあかり。今まで黙ってて。」

「何言ってるの…あたし達親友でしょ？」

「…うん。」

あかりはまだ検査の途中なのでわたしは病院から出た。

再度、ナオキさんに電話したのだが出てくれなかった。

一体、何が真実なのだろう…？

幽霊なんてずっといないと思っていた。

それが突然、目の前に現れて…わたしはいとも簡単に信じた。

それはわたしの彼女に対する罪悪感が後押ししてはいるが、

一番はわたし以外の人間が奈津子さんを目撃してたからだ。

チカンおじさんやナオキくん。

だから わたしは奈津子さんの幽霊を信じる。

いや、信じるしかない…。

だが…もしこれが何らかの力で幻覚だとしたら…？

ザアアアアアアーツ

いつの間にかまた大雨が降り出していた。

わたしは窓から滝のように激しく流れる雨を眺めてた。

たしか奈津子さんが現れた日もこんな大雨だったっけ？

テレビではこの時期にはめずらしい大雨だと天気予報士が言う。

髪の高い女の人はその隣でうんうん頷いてはボケをかましてた。

わたしはこの2人の空気に少し笑ってしまった…。

その時…

あの雨の日の事が脳裏に過ぎった。

わたしはベッドで寝ていた…。

雨の音だけが部屋中に響いている。

ふと窓を見上げるといつの間にか開いていた。

閉めようにもわたしは身体が動かない。

…そう…何かが部屋にいたのだ…何かが…

その何かがゆっくり近づいて来る…。

そしてそれはわたしのすぐ横にいるのだ…

髪の高い女性がわたしをずっと見ている。

だが暗さのせいで顔がよく見えない。

ピシャッ

一瞬まぶしい光が部屋中を包む。

「あかり。」

「はっ！？ナオキ？なんでこんな時間にここに……？」

「しっ！……なあ……俺の事好きか？」

「……好きよ……でも今のナオキは好きじゃない……」

「……そうか……俺も今のお前好きじゃない。」

「え？」

ドスッ！

ドゴッ！

「もう……お前はいない……」

041 わた『し』の言いたい事

チャララララ〜

「…ん？誰だ？こんな時間に電話する奴は…なんだ…ナツキちゃんか…」

薄暗い病室の中、ナオキくんは青白く発光している携帯のサブディスプレイに目をやった。

「…もしもし…ナツキちゃん？どうしたの？」

何度も電話をし、やっとナオキくんが出てくれた。

「…直樹くんに聞きたい事があるの。明日時間あるかな？」

「ああ明日？いいよ。何時に？…わかった。うん、じゃあね」

ピッ。

携帯を閉じると、床に倒れている明かりを見つめる。

「う。」

「…！なんだあかり…まだ意識あった？
なあ…あかり…俺の事誰にも話すなよ？なあ！」

「つまり…あかりさんの口封じの為に誰かが意識なくなるまで殴ったと考えられる。」

わたし達の背後から刑事さんが姿を現した。

「刑事さん…」

「お母さん…ナツキさんにも聞きたい事があるので少しいいですか？」

「…はい。」

あかりのお母さんは泣きながら病室へ戻って行った。

わたしと刑事さんはふたりきりになった。

わたしはすぐに口を開いた。

「言つときますけどわたしじゃないですよ！」

「わかってる…あの傷は女じゃ出来ない。男じゃないと無理だ。彼女はお腹も強く殴られ流産もした。」

「赤ちゃん…いなくなつたんですか？」

「残念ながらね…君はお腹の子の父親が誰かわかるかね？」

「ええ…でも…そんな人じゃ…」

「大友尚道の息子…ナオキだな？あの有名な博士の息子。」

「それが何の関係があるんですか？」

「要注意人物だよ。そのナオキという男は…」

「何故ですか？」

「……さあ。刑事のカンかな？」

刑事さんはそう言つてニヤリと笑つた。

あかりが誰かに殴られた…？

可能性としてはナオキくんは確かに有り得る。

…けどなんで…？

なんであかりをそんな目に遭わす必要が…。

わたしはナオキくんと会う為の公園に向かつて歩き出した。

昨日からずっと降り続けていた雨は止んだが、空はまだ曇り空のままだつた。

まだ夕方前なのに薄暗く寒い感じがした。

わたしが奈津子さんの話を持ち出す事でわたしはナオキくんにか
されるだろうか？

もしかしたら殺される？

でもそれは仕方ないかも知れない。

ナオキくんがわたしのせいで奈津子さんが死んだと思えば、怨まれるのは当然だ。

だからわたしは会うのだ。

ナオキくんから真実を聞きたい。

待ち合わせの公園にナオキくんは既にいた。

「ナツキちゃん…」

彼はいつもと変わらない優しい笑顔でわたしを迎えた。

「…ごめんね。呼び出したりして…」

「俺はナツキちゃんに呼ばれて嬉しいよ。」

「ナオキくんに聞きたい事があって…この写真見て欲しいの…」

「うん…。…！」

写真を見たナオキくんの顔は明らかに動揺してた。

「どこで見つけたの？この写真…」

「奈津子さんのアパート。」

「……………」

ナオキくんは同様のせいか、黙り込んでいた。

「…この人…私が突き落とした人。

つまり、あの女の人よね？あなたはその人と付き合ってたの？」

ナオキくんはわたしの顔みるなり、床に膝をついて土下座をした。

「ごめん！ナツキちゃん！」

「…ナ・ナオキくん？」

「実は…俺は彼女に脅されてるんだ！」

「彼女って？」

「もちろん奈津子の亡霊だよ！彼女の復讐に俺は付きあわされてんだ！」

「…奈津子さんの亡霊は本当にいるの？」

「ああ！俺は彼女に逆らう事は出来ない…

逆らうと俺は殺される…殺されるんだっ！うううう…」

泣き出すナオキくん。

わたしが黙って見ていると、足を掴んできた。

「助けてくれ！ナツキちゃん！」

「ナオキくんがわたしに近づいたのって…」

ナオキくんの意思じゃなくて奈津子さんがそうさせたの?」

「違うと言ったら嘘になる…でも俺は確かに君の事は好きだ…」

「- 嘘よ! あなたはわたしに復讐したいのよ!

わたしが奈津子さんを殺したと思ってる!でも違うじゃない!彼女は自殺したのよ!」

「違う!俺は見たんだ!君が殺した!」

「彼女の家から遺書が発見されたのよ!もし奈津子さんがそこにいるなら説明しなさいよ!」

「彼女は確かに自殺する気はあった!

だが、考えが変わってあの日はただ駅にいただけなんだ!」

ナオキくんの目からは大粒の涙がこぼれた。

だが、今のわたしには本物には見えない。

正確には…見えなくなっている。

「ねえ…なんであの日駅にいたのに…奈津子さんに声掛けなかったの…?」

「いた事に気付いた時には君が…」

「あなたでしょ?奈津子さんを殺したのは!」

その言葉にナオキくんは立ち上がった。

「ナツキちゃん…何を言い出すんだ？」

「だって！あの時の奈津子さんのお腹にはあなたの子がいたのよ！あなたは認知してなかったじゃない！」

「……………」

「邪魔だったんでしょ？奈津子さんとお腹の子が！」

「だとしても、俺がどうやって奈津子を？」

「自殺するように催眠かけたんじゃない？」

「………… ナツキちゃん………… 自分がした事を俺のせいには？」

「だってあの駅に何故あなたはいたの？」

「ナオキくんはとなりの街に住んでるんでしょ？」

「あなたは奈津子さんが死ぬのを見届ける為に隠れてたんじゃないの……？」

042 ナオ『キ』の言いたい事

「いい加減にしてくれないか…！」

ナオキくんは言葉を吐き捨てるように怒鳴った。

「…だって…奈津子さんは確かに現れるわ！でも直接的な被害はないのよ！」

彼女はわたしを殺そうとした様に見えたけど…でも何もない！」

「……ナツキちゃん……」

ナオキくんはそつとわたしの肩に手を置こうとした。

「触らないでっ！」

「え！？」

「…もう誰も信じない！」

そう言っつてわたしはその場から急いで去った。

ナオキくんはわたしをずっと見つめながら、

「…ちっ。」

と舌打ちをした事にわたしは気付かなかった。

とにかく…わたしは開き直った。

今まで奈津子さんに対する罪悪感があったから自分を抑えて来た部分もあつたが、

わたしは刑事さんに全てを話す事にした。

そうすれば何か前に進むはず。

わたしが法的に何らかの罰を受けるならそれでも構わない！

わたしは刑事さんに自宅へ来る様に連絡をし、家で待機した。

そしてまた雨が降り出した。

ザアアアアアアアッ

「また雨か…最近まで全然降らなかったのに…」

ピンポン

わたしは刑事さんが来たと思い、すぐにドアを開けた。

「…あ…。」

「話が見たいんだ…家に上がってもいい？」

そこには雨に濡れたナオキくんが寂しそうに立っていた。

「…ごめん…帰って…今は誰も信じられない…」

「…そう。」

一言返事したナオキくんはゆっくりと後ろに向き歩き出した。

わたしは何も言わずドアをゆっくり閉めようとしたその瞬間、ナオキくんがこっちに振り向き隠し持っていたナイフをわたしに突き出した。

「いいから、俺を家に入れろ。」

「…ひっ」

わたしは言われるままにナオキくんを家に入れた。

ボタン。

「いいか、大声を出したらお前の喉を切り裂くからな。」

「……………うん」

「ほらっ、さっさと歩け…！」

グイグイと前へ歩くようにナイフをわたしの腰に押し当てた。

「わたしをどうする気…？」

「どうもしないよ。話をするだけだ、そこに座れよ。」

わたしは言われるまま指摘されたソファに座った。

「君は色々誤解してるから真実を教えようと思って…ね？」

「真実？」

ナオキくんはゆっくりと頷いた。

「いいか：確かに俺は奈津子と付き合っていた。

彼女は年下の男の子に興味を持ってたから、

街を歩いてた俺に声を掛けたのが始まりだったんだ。

彼女は俺の為に何でもしてくれたよ。もちろん俺だって彼女を好きだった。」

ナオキくんは冷蔵庫から勝手にジュースを取り出し

「俺には子供の頃からの夢があっただ。」

そう言っって一口飲んだ。

「君だって知ってるだろ？俺の親父は有名な催眠博士だったこと。俺はよく親父に練習台にされてた。

知ってるかなー？催眠療法で自分の前世がわかるっていうやつ…」

「聞いた事はある」

「俺の前世ってね。昔どこかで大量に人を殺してた人物なんだって。その療法ってのは目が覚めると普通は記憶はないんだ。半分以上は寝てるからね。」

でも…俺の場合は断片的だが記憶に残ってた。当時8歳だったけどね。」

「前世ってホントにあるの？」

「…さあ。」

俺もね身に覚えがない記憶がいくつかあるから親父の事務所から俺のファイルを探し出したら、やっぱり殺人鬼だった。

しかも未解決の事件だらけの。信じられる？有り得ないよね？」

わたしの向かいのソファに体重をかけ、話を続ける。

「…その日からかな？何故だが無性に人を殺したくなったんだ。俺の中の何かに火がついた。」

でもまだ子供だし、そんな度胸はない。そしたらある日気が付いたんだ。

完璧な催眠術を使えたら簡単に人を殺せるんじゃないかってね…。」

「……………」

「幸いそれを使える親父がいたし…俺は必死に練習をして自分のものにしたよ。」

ほとんど独学でね。たしか…中学生の時だったかな…試しにクラスメイトの一人に催眠をかけたんだ。

そしたらいきなり屋上に上がって一気に身を投げたよ…。」

「死んだの？」

「その時俺は感動を覚えたね。俺の力でそんな事ができるなんて。これこそ完全犯罪だって…」

「ひどい！」

「でもね…まだ力は完璧じゃなかった。あとに何人かにもかけたがうまく行かなかった。

…だから…猛特訓してる最中に」

「奈津子さんと出会った？」

「…そう…俺は実験台になるなら誰でも良かった。何でも言うことを聞く彼女は俺にとって最高の存在だった…」

「好きではなかった？」

「好きだったよ。実験台として。でも飽きちゃった。…そう…確かに俺は彼女を殺した…。」

「……………！」

ナオキくんはそんな馬鹿馬鹿しいことを真剣に言っていた。

催眠術で人を殺すなんて…そんな非現実な事…。

「でね、何かをするにはテーマを決めなきゃと思ってね。題して『印』とでも言おうかな？」

「しるし…？」

「ほら…よくあるじゃん、殺人鬼とかでもさー
右手の指の爪を剥がすとか体にナイフでマークみたいなものを殺した後につけるみたいな。」

俺も何か俺がやった証みたいなのが欲しくて…

さあて問題です。全員は無理だけど一部の人には成功しました。それは何でしょう…?」

「待つてよ…まだ奈津子さんの話しか出て来てないわ…他には?」

「いや、奈津子にもりっぱな印があるけど。」

「…赤ちゃん?」

「おっ! 鋭いねえ…その通り。俺はわざと奈津子に種付けしたんだ!」

「…じゃあ…子供が邪魔とかじゃなくてわざと?」

「そつ。それでね俺はあるシナリオを作ったんだ。」

ただ人を殺すよりはドラマな方がいいだろ? 何も関係ない女の子を巻き込む悲惨な話をね…」

「それがわたしだっていうの…?」

「そう! 君は見事に主役の座をゲットしたんだ!」

指をパチンと鳴らし、そう言い放った。

「…でも奈津子さんは遺書を遺してる。あれは?」

「そう！これは計算外だったんだ。
まさか奈津子自らも死ぬ事を考えてたなんて…
シナリオでは君が殺した事になる予定だったのに。
遺書はマズかったなあ…あと、あかりもいたんだってね？
それも計算外。」

「やっぱ俺には計画性がないからね〜ミスだらけだ。」

頭をポリポリ搔くナオキくん。

いつもの彼で…平然と普通にしていた。

わたしの体は次第に怒りと恐怖が混じった感情のせいで震えだした。

「……………どうしてわたしを選んだの？」

「わからない。でもおれ好みだよ。」

俺はあの日君を見つけ…あの親父に催眠をかけたんだ。君をチカンするように…」

「…え！？あのチカンおじさんって…」

「そう…俺がそうさせたんだ…あの人はただのホームレスだよ。」

君がああ親父から逃げようと振り払った手が奈津子に当たったのも計算なんだ。

君は俺に利用されただけなんだよ…くくく…」

「…ひどい…」

「ひどい男だよなー？」

俺は…。そして数日後俺は君の家に忍び込んだ…」

「あの雨の日ね…」

「うん。大変だったぜ。なんせ女装してたし、その日に俺は君に暗示をかけた。」

君の母親への暴力を…ただし君には記憶はない。」

「母さんの顔のアザはその為だったの？」

「ああ…君に奈津子を取り憑いた感覚を味わせる為に…ね。」

「……くっ…」

わたしは溢れてくる涙を必死に堪えた。

「おいおい、まだ話は途中なんだぜ。泣くのは早いよ。」

立ち上がりながらナオキくんはに言う。

043 ニュースのセリフ

「本番は今からだよ…。そうだ、覚えてるか？君が道端で会った女性を…『あなたの後ろに“な”の文字が見える』って言ってた人。あの女は本物の力を持ってた。彼女は“奈津子”ではなく“直樹”の“な”の事を言ってた。おれは危険を感じ彼女を殺したよ。さすがの彼女も油断して死んだけどな。くくく」

「…もしかして…わたしの横にいつもいたの…？」

わたしがゆっくりと聞くとナオキくんは笑みを浮かべた。

「君が危ない目に遇った時、いつも俺が助けに来てたろ？常に君の傍にいたよ。」

ナオキくんはそう言い、また冷蔵庫へ向かう。

「琴美ちゃんの事だが…彼女の腹の子の父親は俺だ。村山先生はちゃんと避妊してた…」

「…！ あなた琴美まで…」

びっくりして立ち上がるわたし。

「うん。琴美ちゃんは俺が村山先生に見えたと思うけどね。だから彼女はあとで狂暴になったろ？暗示のせいだよ…」

「…ナオキくん…あなた…ホントに何がしたいの？」

「うん！いい質問だ。うつゝすっぱあゝい」

ナオキくんは冷蔵庫から取り出した梅干しを一口にする。

そして、わたしに近づき人差し指をわたしの額に当てる。

「これで君は動けない。」

「え！？あ・嘘…」

確かに動けなかった。

立った姿勢のままわたしの足はピクリとも動けない。

「君をメインにしたシナリオはもう終わりを迎える
。君には何も無いからね。これはあくまでも序章だよ。俺のホント
の目的はね…」

ピンポーン

「ん？誰だ？」

わたしはすぐに誰が来たかわかり、大声で叫んだ。

「助けてえええええ！わたしは殺されるうううっ！！」

その声を聞いたナオキくんは舌打ちしながらわたしを見た。

「ちっ！静かにしろっ！！」

ドンッ！ドンッ！

ドアを蹴るような音が響いて来る。

「あの刑事か？」

ナオキくんはわたしを見つめながら問う。

ドンッ！ドンッ！

「じゃあ、最後に教えてあげよう。俺の目的を…実はね…」

ガチャッ

ダッダッダッダッ

「はっ…はっ…ナツキさんっ！」

「……………」

刑事さんが中に入って来た時、わたしは呆然としてた。
ナオキくんは窓から逃げ、どこかに消えていた。

「おいっ！大丈夫か？奴は？」

「…え！？だれが？」

「来てたんだろ？大友直樹がつ！」

「…………？ ナオキ？知らないわ。そんな人。」

「ナツキさん、ふざけてるのか？
たった今、家の中から君の助けを呼ぶ声を聞いたんだぞ？」

「わたし…何やってたんだろ。」

わたしは目を丸くしてポツリとそう言うと、刑事さんは首を傾げ、

「ホントに忘れたんですか？ナオキと言う人物を…」

拍子抜けに言った。

「……聞いた事ある気はしますが…わかりません。」

「困ったなあ」

わたしはナオキくんの手によってナオキくんの存在を忘れる催眠をかけられた。

それだけでなく半年ほどの記憶もあいまいなのである。

わたし自身記憶がない事を自覚してるが、なかなか思い出せない。

「これじゃあ、解決へ進まない。どうしたら思い出す事ができるだろう」

刑事さんは思わぬ事件の展開に途方に暮れていた。

イライラのせいかさつき取り出した灰皿もギッシリと吸い殻が溜まっていた。

「そうだっ！ちょっと電話してくる。待っててね。」

刑事さんはいそいそと奥の方へ消えて行く。

わたしはこれ以上思い出す事は不可能だと察し、リモコンを取り出しテレビをつけた。

夕方のせいで、どのチャンネルも報道番組しかやっていない為、諦めてローカルニュースを見ていた。

『今日、×町で一家による無理心中がありました。』

この一家は父親と母親、そして3歳の長男と2歳の長女の4人家族でした。

近所の人の話によりますと何の問題もなく順調に見えてただけに自殺するのは考えられにくいという話も出ています。』

「……ふん。」

わたしは冷静に画面を見つめていた。

すると奥から電話を終えた刑事さんが戻って来てわたしに言う。

「…今、ナオキの父親の方に連絡した。

彼なら君にかけた催眠を解いてくれるはずだ。明日その父親と会う方がいいかね？」

刑事さんはソファに座るとまた、たばこを取り出して火を付けた。

「いいですよ。」

わたしは何のためらいもなく一言返事した。

その夜、ナオキくんが現れる可能性があるので何人かの刑事さん達はわたしの家に泊まる事になった。

記憶が曖昧なわたしとしては複数の男の人が家にいるだけで落ち着かなく、気分は最悪だった。

「落ち着かないですか？」

刑事さんは気遣ってわたしに声を掛ける。

「…ええ、少し…」

「すみませんねえ…でも用心しなきゃいけないんですよ。相手は魔法使いみたいな奴ですから、多い方がね」

「…わかってます。」

わたしは部屋に戻りベッドへ横になった。

一体その『ナオキ』という男は何をやったんだろう。

わたしの記憶を消して目撃者を減らしたつもりなのだろうか？

それなら、わたしを殺せばいいのに。

色々な事を考えてるうちにわたしは深い眠りにつく。

そして朝になった。

「おはようございます。」

「おはよう。ゆうべは眠れたかい？」

「はい、記憶がないせいでしょうか…久しぶりに寝た感じです。」

刑事さんはタバコの煙を口から出し、タバコを灰皿にこすりつける
と。

「君の場合は忘れた方がいい記憶が多いだろうな。」

気になるセリフばかり言う刑事さんにわたしは少しムカついていた。

『今日未明、×町の一家五人が住む家で火事がありました。
原因はまだわかっておりませんが…』

「朝から嫌なニュースが続きますねえ」

イライラしたわたしは話題を変える為、
話題をテレビニュースの方へ変え、洗面所に向かおうとした。

『これでこの町付近で5件も自殺に近い事件が起きております。』

「ん？」

わたしはふと足を止めた。

一瞬だが頭の中で言葉が聞こえた気がした。

「どうしました？」

不思議そうに刑事さんが聞く。

わたしはテレビの前へ歩き、座り込む。

「…自殺？」

突然、頭の中で顔の見えない男の声はつきりと聞こえた。

「…うそ…」

「どうしました？何かわかったんですか？」

刑事さん達はゆっくりとわたしを囲みだした。
わたしはテレビに向かって指を指した。

「今、テレビで言ってる心中事件…もしかしたら彼かも…」

「…え!？」

わたしの発言にみんな顔を歪めていた。

「声が聞こえるんです。『まずはこの辺りから人を減らす』って…」

043 ニュースのセリフ（後書き）

もう少しで終わりますよー！

044 事故『死』

「どういう事だっ！？ナツキさんっ！」

刑事さんは血相を変え、わたしに掴み寄った。

「…わからない。ただその声だけが…頭の奥から聞こえたんです。」

「とりあえず ×町一帯を調べてみよう！」

場所は変わって、ナオキの父親がいる事務所。

「先生、どこへ行かれるんですか？」

「いや、警察から連絡あつてな、わしの息子が何やら事件を起こしたらしい」

「事件って？」

「催眠術を使つてな、人を苦しめてるらしい…。あのバカが！」

「ナオキさんですか？なんでまた…」

「知らん、昔からあいつは何を考えてるかわからん！」

「じゃあ、わたしが運転します。」

「そうか…頼む。」

ボタン。

ブウウウウウーッ

「ナツキさん、準備できましたか？」

「…はい。あの…でも…」

「なにか？」

「わたし…思い出すのが恐いんです。本当に思い出さなきゃいけませんか？」

わたしは刑事さんを見つめながら言う。刑事さんは優しく微笑んだ。

「……あなたには思い出してもらわないとい困るんです。」

もしあの事件があのお男によるのなら…なおさらです。」

「そうですね。人の命がかかってますものね」

「はい。申し訳ないが協力して下さい。」

「はい。」

「じゃあ…大友先生のいる研究所に向かいますか。車に乗って下さい。」

ブウウウウウー

「全く！昔からそうじゃった。あいつが考えてる事はおかしい！
わしは人の為にこの力を使っておるのに…」

「その通りです。先生はいつだって人助けの為にがんばってらっしゃいます。」

それは助手のわたくしがよく知っております。」

「『催眠』は使う人によってはかなり危険なものだ。

ましてや自分の思いどおりに動く人間をみた時の『快感』を知った奴には…」

「それがナオキさんですか？」

「ああ。わしはひそかに気付いていた。ナオキの考えに…だが、わしの息子だ。

この力はあるだけ直樹には受け継いで欲しかった。
だから目を塞いでた部分もある…それがこんな…」

「……………」

「こんな外道な事に使うなんて…わしが止めてやる！」

「もう遅いですよ」

「なにが？」

「あそこから車がこっちに向かってます。」

「なに！？早くよけないか…！」

「無理です。わたくしの体は動きません。
すでに暗示をかけられてます。」

「なにっ！？今、解いてやるっ！」

キイイイイイイッグウワシャン！

ブウウウウウーッ

「警部…あそこで衝突事故が…」

「見てみよう。ナツキさんは車で待っててもらえますか？」

「あ…はい。」

家からナオキくんの父親がいる研究所へ向かう途中、
大きな事故が起きたらしい。

窓から見える現場は車と車が凄いスピードで正面衝突したと思
えないほど

車体の前部はへこみ、

乗ってる人はまちがいなく死んでるだろう…。

しばらくして刑事さんが顔色変えて戻って来た…。

「ナツキさん…大変な事になった！実は…大友先生が…ナオキの父親が死んだ！」

「え！？それって…偶然ですか？」

「いや、おそらく…奴の仕業だろう。」

「そんな…だつて自分の父親ですよ！」

「そついう奴だ。」

「……………！」

わたしは現場に視線を移した。

車体から少し煙が出てる。

あれ……！？

わたしは目を擦ってよく見てみる。

誰かがこつちを見てる。

「刑事さん、あそこにいる人……ずっとこっち見てます。」

「え！？誰がです？」

「あそこ……あれ！？」

また見るとそこには誰もいなかった。

「あれ？だってさっきいたんですよ！あそこに髪の毛の長い女の人が立ってたんです。」

わたしはその女の人に見覚えがあった。

誰だったんだろう？

結局あの後、わたしは家に戻って来た。

ナオキくんの父親が亡くなったので事件はまた振り出し戻ったってワケだ。

しかし、本当にナオキくんは自分の父親を殺したんだろうか？
そして、わたしは先程の事故現場で見た髪の毛の長い女性の事が頭から離れなかった。

どこかで見た事がある。

けど思い出せない。

わたしは目の前にあったコーヒーを口にした。

刑事さんはわたしの表情を察してか一枚の写真を差し出して来た。

「思い出せないですか？多分、この女性でしょう。」

わたしはその写真を見るや否や叫んだ。

「そうです！この人です！誰なんですか？」

「山田奈津子と言ってナオキの恋人でした。もう死んでますけど」

「じゃあ…幽霊？」

「いや、違います。『催眠』によって見えるだけで、そこには存在しません。」

「…何のために？」

「いや、それが全く…そこがポイントなんでしょうね」

刑事さんは苦笑していた。

わたしだけが見えた？何故？

どうして？

だが、何かがひっかかる。

過去の記憶を曖昧にしたわたしに彼はまだ『奈津子』という幽霊を見せる必要があるのだろうか？

わたしはただ不安いっぱいになっていた。

そしてナオキくんの父親が亡くなった今、わたしは記憶を戻せる事が出来るのだろうか？

045 近づく『悪魔』

「せんせい!!」

「……………」

「先生ってば!」

「あ・ごめんなさい。ボツとしてたわ」

「しっかりしてよ!先生なんだから……」

「どうせ、オトコにでもフラれたんじゃないのー?」

「はははは……」

「……………」

「ははは……。?先生?どうしたの?なんか……先生らしくない」

「……………もうすぐ結婚する予定なの。」

「え!?マジイ!おめでとう先生!」

「おめでとー!!」

「そう……嬉しいはずなのよ。」

「……何かあったんですかあー?あー!マリッジブルーだ!」

「…わからない。でも少し不安があつてこのままでいいのかなつて…」

「そりゃあ、結婚つて一生の問題つていうから誰だつて不安にはなりませんよ。よくある事です。」

「…結婚… ううん、結婚に不安じゃない。私自身に不安なのよ」

「そんな難しく考えなくても…」

「あなた達…みんなそれぞれ悩み事つてあるじゃない？」

でも人間つて結局、最後には死ぬわけでしょ？

死ぬ為に色々悩んで苦しむようなもんじゃない…。」

「そんな事言われたら身もフタもないじゃん！どう生きるかつて事が問題なんじゃないですか？」

「どう生きたからつて何なのよ？例え幸せになつたつて死ぬのよ？

余計、この世に未練残すだけだわ！結婚も同じ！
したからつて結局は次の欲が出て満足なんてしないものよ…」

「教師が言うセリフじゃないと思います！」

「教師の前に人間よ！それくらいわかつてよ！みんな考えた事ある？今死ぬのと後で死ぬのと何が違うかつて…」

「先生…大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ！あなたこそ大丈夫？」

「…そんな事言われたって私達…生まれたのは自分の意志じゃないもの…」

わ

「…そう…生まれる事は自分で決めたわけじゃない。
じゃあ…死ぬ時も自分の意志じゃなく流れにまかせるとでも…？そ
んなの嫌よ！」

「それって…」

「ねえ…最近、先生ね。幽霊みたいなものが見えるの。彼女はただ
見えるだけなんだけど、怖いってよりはただ哀しくて…ね。寂しい
の。」

「やめて！幽霊話は！」

「わかった！先生幽霊にとりつかれちゃったんだ！」

「…そうなのかな？でも彼女…何もしないの。ただ見えるだけなの。
見えるだけなんだけど…死にたくなるの。」

「だから！とりつかれてんだよ！」

「その幽霊を見ると、何だか馬鹿らしくなってね。生きるのが。い
ろいろ考えさせられたのよ。その結果が『生きる事は無意味』だっ
てこと。」

「意味わかりません！」

「……うふふ。なぐんてね！冗談よ！暇だからからかったのよーあはは」

「もう……先生のジョークってきつ過ぎ……」

「……はい！あ・プリント忘れたわ、ちょっと取って来るから待って……」

ガララ

ピシャン

「しかし……さっきの先生……恐かった。」

「うん！不気味だった……。」

「でも先生の言う事一理あるよね？」

シャッ……

「……………！」

「ねえ……今……窓から黒い影が見えなかった？」

「……うん。……上からでしょ？」

「……人だったよね？」

「…う・うん」

「せ…せんせい…に似てた…」

「ひっ… ま…さか…3階だよ…」。

「うう…うう…だって目が合ったもん…」

「嘘でしょ…?」

「いやあああゝ!」

「また…ですか?」

「ああ、今度は中学教師が突然、授業中屋上から飛び降りたらしい。」

「これで8人目ですか?」

「ああ…ナオキの目撃情報もひとつもないなんて」

「ナツキさん…ナオキはやっぱりこの近くにいると思いますか?」

「…はい。偶然にしちゃ自殺者の人数多いですね。」

やっぱりこれは彼のしわざだと思います。」

「……そうか……。」

「わたし……そろそろ寝ます。部屋に行きますね」

「あ・おやすみなさい。我々はここで待機させて頂きます。」

「お疲れ様です。」

ボタン

「ふう。」

わたしはそのままベッドに倒れ込む。

……。

カタッ

……ん？なにか音が聞こえたのでわたしは顔を上げた。

「……………」。

え？

部屋の窓が開いていた。

そこから風が入り、カーテンがヒラヒラ揺れていた。

え！？なんで窓が？

「駄目だよ。ちゃんと鍵閉めなきゃ…」

「…！」

声ができる後ろをわたしは振り向く。

「ナオキ…くん？」

「ふん。俺の顔を見てもあんまり驚かないね！まあ、記憶もあいまいだもんなあ」

「何しに来たの？」

「君を殺しにだよ。」

「なんですぐにわたしを殺さなかったの？」

「だって君がいれば刑事は君に気を取られて俺は動きやすいもん。でも、もういいかなって思って…」

「……………」

わたしはただ黙っていた。そして何処かに逃げる隙がないか探す。

「ねえ記憶戻りたい？戻してあげようか？君は俺の事好きなんだぜ」

「いらない！アンタみたいな残酷な人間の事なんか」

だが、ナオキくんは手を『パンツ』と叩く。

その瞬間、今まで見える事なかった記憶の闇に光が入って来た。

「やめてっ!!」

わたしは思わず頭を掴み、座り込んだ。

「…はあ… …はあ…」

わたしはゆっくり目を開け、ナオキくんを見る。

「…ナツキちゃん」

ナオキくんはいつもの優しい声でわたしを呼ぶ。

「…ナオキくん…」

その声に反応したわたしは立ち上がりゆっくりと彼に近づく。

彼は優しい顔でわたしを迎えようと、手を広げた。

「ナオキくんっ!」

わたしは彼の腕の中に……………

だが、わたしは思いつきり彼を突き飛ばしドアを開け、部屋から飛び出した。

ドタッ　ドタッダッダッダッ

急いで階段を降り、刑事さんのいる一階へ逃げ出した。

「刑事さんっ！」

「……………」

何故か一階に刑事さんの姿がない。

「刑事さんっ！どこにいるんですかぁー！」

わたしは探し回るが姿はやはりない。

一気にわたしに不安が襲い掛かった。

上から降りて来る足音が聞こえる。

わたしはすぐに玄関に走り出した。

「はあ　はあ」

「待てっ！」

ナオキくんの声が後ろから聞こえる。

わたしは振り向かず、そのまま走り玄関のドアを開け外に飛び出した。

「はあっ はあっ」

何処へ向かって走ってるのか自分でもわからなかった。

ただひたすら、ナオキくんから逃げようと、家から離れようと。

誰か…！

誰かわたしを助けて…！

誰か彼を止めて…！

誰か…！

誰か…！

046 絶体絶『命』

「はあっ…はあっ…」

わたしは必死に走った。

町はただの暗闇でわたしの走る足音や呼吸しか聞こえない。

どこに…どこに逃げればいいのかだろう…？

「はあっ…はあっ…」

わたしは走りながら後ろを振り返った。

追って来るはずのナオキくんの姿はいつの間にか消えていた。

「……どこ！？」

わたしは足を止め周りを見渡す。

だが、ナオキくんの気配すら感じられない。

「…はあ…はあ…はあ…はあ…」

わたしはゆっくりと歩きながら警戒していた。

…そうだ！とにかく警察だ…近くに交番があったはず。

わたしは足をまた早め、交番のある場所へ向かった。

「ナツキさん！」

後ろから呼ぶ声がある。

「…？」

振り返ると刑事さんが不思議そうにこっちを見ていた。

「どうしたんですか？何かあったんですか？」

「…う。。。」

わたしは刑事さんの顔を見るなり涙が溢れ、いつのまにか刑事さんの胸に飛び付いていた。

「ナ・ナツキさん？」

「ううううう…彼が！ナオキくんが…！」

「あいつが来たんですかっ！？すみません！家を空けてしまっ…ちよいと外の見回りに…」

刑事さんはわたしをギュッと抱きしめ済まなそうに詫びを言った。

「いいんですっ…ただちょっと恐かったので…」

わたしは久しぶりに触れた人の温もりにすごく安心した。

「…もう大丈夫です。俺がついてますから…だから安心し…ぐっ…」

一瞬、刑事さんの腕にすごい力が入る。抱きしめられてるわたしも苦しくなる。

「……え!？」

わたしは刑事さんの顔を見た。

刑事さんは口を少し開けると、腕の力が少しずつ弱くなっていく。

「そんな所で見せつけるなよ……」

背後から声が聞こえた。

「きゃっ……」

わたしは思わず刑事さんから離れると、刑事さんはそのまま地面に倒れた。

そしてナオキくんの姿が現れた。

「……あ……ああ……」

その手にはナイフを持っていて血が付いていた。

「刑事さんっ!」

わたしが刑事さんに近づこうとした瞬間、ナオキくんはナイフを突き出し……

「この刑事を死なせたくなかったら俺の言う通りにす……」

ナオキくんが言い終わらないうちに刑事さんはナオキくんの腕を掴

みナイフを奪おうとした。

「ナツキさん！逃げるんだっ…！」

「…え！？…」

「いいから逃げろっ！早くっ！」

背中から血を流しながら刑事さんは必死にナオキくんを押さえ込んでいた。わたしはどうしていいのかわからず、とりあえず走った。交番へ逃げようと思ったのだ。

「はあっ…はあっはあっ…はあっ」

…そうだ！あの角を曲がれば確か…交番があつたはず！わたしは嬉しさと恐怖の交じった表情を浮かべ走り続ける。

「あの角をまがれば…あの角を…はっ…はっ」

わたしは呪文のように唱えながらその角を曲がった。

「きゃっ…」

その角を曲がったそこには…

「……………！」

奈津子が立っていた。

「奈津子…さん？」

わたしはゆつくりと名前を言う。髪で顔を隠してただ突っ立っている奈津子。

「……………」

わたしはたた茫然と見つめていた。ゆつくりと顔を上げた瞬間、奈津子さんは目と口を大きく開け、すごいスピードでわたしに近づいて来た。

「ひっ…！」

今までに見た事のない奈津子の顔だった。

……………。

何が起きたのだろうか？

今、目の前にいたはずの奈津子の姿はない…。

「ナツキちゃん…」

ナオキくんの声にわたしは振り返る。

そしてわたしは気付く。

今いる場所は…

角を曲がると交番のあるあの場所ではないことに…。

「あれ？いつの間に…」

「君はわざとこの場所を選んだのかい？」

「…！？」

その一言でわたしは気付く。

ここは…あの駅だ…！！

奈津子さんを突き落とした現場だ！

今となつては全部ナオキくんのワナだったけど。

何故わたしはここに…？

「くくく…これはいいシナリオじゃないか…奈津子を殺した現場で君はそれを苦に自殺する…くくく…」

ナオキくんは笑いながらわたしに話し掛ける。

「許せない…！わたし…あなたを許せないから…」

「だからなんだ？オマエに俺が殺せるのか？無理だよ…」

「殺してやりたいわっ…！」

わたしは思い切り叫んだ。

だが、ナオキくんは冷静に口を開く。

「君は頭がいいから気付いてるはずだ。人の死ぬ苦しみを見て来た
だろ？」

「だからなに？あなたも苦しむつての？そんなの当然じゃない！これは罰よ！」

「くくく…君に何が出来る？俺が君に暗示をかければ君は何でもいう事聞くんだぜ…」

「……くっ……」

わたしは何も言い返せなかった。現にさっきまで暗示のせいでナオキくんの事を忘れていたから…。

わたしはどうかしてこの駅から出ようとそればかり考えていた。

「とにかく…俺はやらなくてはいけない事がある。君が死んだ後この町を出て…もっとたくさんの人に暗示を掛ける。俺の力がどれだけかを皆に解らせるのだ…」

「馬鹿げてる！そんな事できるなら最初から他の人がやってるわ！いずれあなたのやつてる事に反感を持つてる人があなたを封印するわよっ！」

「そんな事はさせない。邪魔者は全て消すんだ…。」

そう言った瞬間、直樹くんは指を『パチン』と鳴らした。

わたしに暗示をかけたのだ。

「！」

すると何故かわたしは、周りをキョロキョロ見渡し。ゴミ箱の方へ

と歩き出した。

そしてその中からガラス瓶を取り出し地面に落とす。

ガシャッ！

ガラス瓶は見事に粉々に砕け、鋭くナイフの様に砕けたかけらを選びそれを拾い上げる。

「くくく…そう…　それで君は自らの首を切り裂き自殺するのだ。
くくく…」

わたしはゆっくりとガラスを首に近づける…。

「ほらっ！早くやるんだ！ほらぁ！」

047 あなたの『手』、あなたの『心』

カタン！

ガラスが地面に落ちる。

「……………」

わたしはボツと遠くを見たまま動かない。

「どうした？早くやれよ！」

「うふふふ」

「……………ん！？」

「あははははは」

突然、笑い出すわたし。

「ナツキ？」

ナオキくんは不思議そうにわたしを見つめる。

「久しぶりね…ナオキ…あたしよ…」

「ひさしぶり？何を言ってる？」

「まだわからないの？」

わたしが静かに微笑むとナオキくんは察した様に驚いた表情をした。

「ま・まさか…」

「…そう…奈津子よ。あなたは随分元気そうじゃない？あははは…」

「馬鹿な！なんで死んだお前がナツキに…お前…まさか…」

「…あなたが作り出したあたしは本当に存在するの…！
少なくともナツキにはあたしが見えていたはず！幽霊としてね…」

わたしがふふん と鼻をならすと、青ざめていたナオキくんも笑い返す。

「ナツキちゃん！俺を騙そうってのかい？ひっかからないよ」

「あなたも相変わらずねえ…昔からうたぐり深いトコあったもんねえ…無理もないか」

「…？まさか…本物…？ いや…」

ナオキくんは少しずつ動揺し始めていた。

「あたしはナツキの身体を借りて出て来てるの！とにかく！もう馬鹿な事やめなさい！

あんたがいくら催眠が出来るからってあたしが来た以上みんなの目を覚ましてやるわ！」

「何を言ってる？幽霊なんてこの世に存在しないんだ！全部この俺

「が作り出したんだ！」

ナオキくんは首を横に振って目の前にいるわたしを…いや、奈津子を信じようとしなない。

「とにかく自首して！死んだみんなにも謝って！あたしと…お腹の赤ちゃんにも謝って！」

「誰が謝るもんかつ！いいか！お前は俺の実験に参加出来ただけでも有り難いと思えっ！そうやって死んだ事を誇りに思うべきだっ！」

「……………！」

「だいたい君が俺に声なんて掛けなければ良かったんだろ？君の運命は君が決めたんだっ！」

若い男の子が欲しかったんだろ？だから俺に声を掛けた…くくく…」

「そうよ。あたしは若い子が好きだった。あの日あなたを最初に見た時…あなたはすごく寂しそうな顔をしてた…」

ナオキくんはわたしを見て有り得ないって顔をした。

「…俺が？」

「あなたは…自分の前世が殺人鬼だって事に悩んだ。ううん、気付かないフリをした。」

「何を言ってる？俺は自分の力で人を操れる喜びを知って最高に幸せだった！」

「それは本当のあなたじゃない！本当のあなたはそういう自分に戸惑っていたはずよ。」

だから…あたしが声を掛けた時あなたはあたしにすぎたのよ！心の何処かであたしに助けを求めていたのよ！」

「違う…！俺は君が最高の獲物になると思ってたんだ！」

「それは後の話よ。確かにナオキの力は凄いわ…。あたしの意志とは別に体が動いたもの。」

確かに『催眠』は存在する…。

でもその力に覚醒する事によって本来の『ナオキ』はいなくなってしまうた。その時のあなたは前世が殺人鬼だったあなたが心を支配してしまったのよ…！」

「……………」

「そしてあなたはあたしを殺す計画を立てた。」

…あたし気付いていたよ…ナオキはいつかあたしを殺すんじゃないかって…」

「じゃあ…お前…」

「でもね！あたしはナオキの手で死にたかった！このナツキの手じゃなくて！あなたの手で！」

わたしの体を借りて現れた奈津子はわたしの体で涙を流す。

「はっ…！お前馬鹿じゃないの。なんで殺されるのわかってて逃げなかったんだ？」

「別にそれでもいいって思ってた。あなたが望むのなら…。でも、あたしの『死』によってもあなたは何も気付かない！そしてあなたはナツキやあかりと会った。」

「……ああ…」

「そっくりよねー！あたしとあかりちゃん…だから、すぐに付き合っただんしょ？」

物事をはっきり言う所とか思い込みが激しい所とか。

あたしあなたの子を妊娠したと知ってとても喜んだ。

でも、あなたはまだ高校生だし、お父さんも有名人で世間体とか気にするだろうし、そして何よりもあなたはあたしを殺そうとしてた。だから自殺しようと考えて遺書も書いた。わたしの手で赤ちゃんを殺そうと…。けど出来なかった。この子に罪はない。」

わたしは優しくお腹をなでた。

「…罪？…だが、その子が出来た事でお前の『死』へのカウントダウンが始まったんだぞ？」

「…そうね。それがあなたのやり方だったものね。あなたは寂しい人なのね。」

「…は？」

「…お母さん、あなたを生んですぐに亡くなったそうね。お父さんはあんな人だから家にはあまりいなかったみたいだし。愛情に飢えて今のあなたは『形成』された。よくあるパターン。」

「何が言いたい？俺は前世によって―」

「寂しくて…苦しくて…でも誰にも言えなくて…結局、心は前世の心へと逃げて行った。」

「……………」

「…あかりはね、あなたの『心』に気付いてた。だからあなたから逃げなかった。あなたが助けを求めている気がしたから。それはあたしも一緒。」

メインにしたナツキちゃんはあなたのお陰で地獄絵図のような人生に変わったわ。

あなたはそれを楽しんでいた。でもその反面あなたは昔の自分を思い出したはずよ。

寂しく苦しんでるナツキちゃんと自分を重ねて…」

「ははっ！馬鹿馬鹿しい！」

「だからあなたはすぐに殺さなかった！あかりやナツキをね！少しでも楽しい日々が続けばいいと願って！でも、あたしを殺した罪悪感があなたを暴走させる。もう後がない…引き返せない…と。」

わたしは強く言い放つとナオキくんはゆっくりとわたしを見て

「もし…君が本物の奈津子の幽霊なら、何故早く俺を止めなかった。俺に取り憑いてでも何とか出来たら…？」

「あたしは自分で気付いて欲しかった！でも我慢できずに…こうして現れたの！」

「……………うつ」

「……？ナオキ？」

ナオキくんはいきなり姿勢を崩し、その場で泣き崩れた。

「……なんで……なんで早く現れてくれなかったんだ……！こんな事になる前に……！」

「ナオキ……！」

わたしはゆっくりとナオキくんに近づいた。

ズブツ。

「……う。」

「馬鹿だな。俺がそんな事で泣くと思ってんのー？ドラマじゃないんだからさ」

「ううううう……っ」

わたしのお腹にはさっき割ったガラス瓶のかけらが刺されていた。

「………はっう」

「奈津子の幽霊なんて存在しない。君はわざと奈津子を取り憑いたフリしてる。嘘なのはとつくにバレてる。」

「……う。」

ナオキくんの言うように、わたしは奈津子さんに取り憑かれていなかった。

自分に暗示を掛け、奈津子を必死に演じてたのだ…。

「なぜ…わかったの？」

お腹から血がどんどん溢れて来ている…。

「俺は君にひとつだけ嘘をついた。奈津子は最初、俺に声を掛けたのではなく俺がナンパしたんだ…。だが、ヒヤリとしたよ。本当に奈津子を取り憑いたみたいだった…」

ニヤリとわらったナオキくんはわたしにキスをする。

「これで終わりだ。ジ・エンドだよ。」

「はぁーっ…はぁーっ…はぁーっ…」

ズブズブ…

「うううううっ」

ナオキくんは更にわたしに刺さっているかけらを奥に突き刺す。

「くくく…こんなに出血しちゃって…もう時間の問題だな。」

「はうううっ…」

「動くなっ！」

突然、背後から声がする。わたしとナオキくんは声のする方を見た。

「なんだ…またあんたか…」

そこには銃を構えた刑事さんが立っていた。

「動くなっ！動いたら撃つぞ！」

刑事さんは震える体で銃を固定していた。それを見たナオキくんは眉をひそませながら笑う

「大丈夫ー？あんたも血流してるよ。無理しない方がいいんじゃない？それとさー…俺あんたにとくに暗示掛けてんだよね。」

そして思いつ切りナオキくんの腹にガラスを刺したのだ。

ズブリッ

「うつ…！」

「あんたなんか…：やられてたまるかあ…：！」

そして、もう一度刺す。

ズブリッ

「うわあああっ」

ガラスを持っているわたしの手も切れ、たくさんの血が溢れ出していく。

そしてナオキくんのお腹からもたくさんの血が溢れて来た。

「うわあああっ！」

ポタッポタッポタッポタッポタッ

「はあっ…：はあっ…：はあっ…：」

「でめゝえゝ…：よくも…：よくも…：」

ドサッ

倒れ込むナオキくん。

「はあっ…はあっ…わたしだけ…死んでたまるか！あんたも…一緒によ…」

「うううう…ううつ…くそっ…」

刺された体を引きずりながらナオキくんは歩き出す。わたしは彼の足を掴み動けないようにする。

「逃がさない！一緒に死ぬのよナオキくん！」

「離せっ！！離さないかつ！！俺はこんなところで死ぬ訳には行かないんだっ！ごほっ！ごほっ！」

わたしは必死に彼にしがみついていた。

『カシヤッ』

「！」

「これで大丈夫だ…ナツキさん！」

刑事さんがナオキくんの手錠をかけた。

「ちくしょう！離せ！これを外せっ！ごほっ！ごほっ！」

「はあっ…はあっ…良かった…はあっ…はあっ…」

わたしは安心したせいか、その場に倒れ込んだ。刑事さんは慌ててわたしの元へ駆け寄った。

「大丈夫ですか？今、救急車を呼びますから！」

「はあ…はあ…はあ…はあ…」

「ひっ！」

刑事さんの声が聞こえる。わたしは出血がひどい為、意識がもうろうとし始めていた。

「…え？」

刑事さんの方を見ると刑事さんの後ろにナオキくんが手錠をかけた手で銃を持って立っていた。

「銃を手元から離すところなんだよ…はあ…はあ…お前達を殺して…俺は助かるんだ……。くくく…」

わたしと刑事さんはどうする事も出来ずただその銃を見つめていた…。

「…ナ…オ…キ…」

突然、ナオキくんの背後から声が聞こえて来た。

「…！」

「なんだ？今…俺の名前を呼んだか？」

わたしと刑事さんはゆっくりと首を横に振った。

「何恐い顔してんだ？そんなに銃がこわいのか？」

ナオキくんは口から血を流しながら小さく笑う。

「ナオキ」

「え？」

はわたしと刑事さんの声じゃないと気づきハツとする。
その瞬間、彼の背後から白い手が現れた。

⌈
.....
⌋!

その手は彼の首を掴んだ。

ガシッ！

「? ! ~ : :」

彼はびっくりして振り返ろうとしたが腕の力が強すぎて身動きがとれないみたいだ。

「誰だ……」

くちくちくち...

「う」

首を締めている指が次第に彼の首にめり込んでいく。

グギギギギギ

たし達はただ茫然としていた。

「ぐぞおゝ！」

銃を後ろに向け発砲する。

パァーン！

メキメキメキ…

「あゝあゝあゝ！」

ブシュウウウ

彼の首から大量の血が吹き出した。

「きゃああー！」

叫ぶわたし。

ブシュウウウ

「ううううあうあう」

彼は口をパクパクさせ、体を痙攣させていた。そして彼の持っていた銃が地面に落ちる。

ガチャン！

刑事さんはそれをすかさず拾うとすぐに彼に向けた。

「ああああっ！」

ドサッ

彼は地面に叩きつけられるように倒れた。

「…ううう…うう」

ナオキくんは体をピクピクさせ、うめき声をあげていた。

「…はあ…はあ…」

わたしと刑事さんはナオキくんから彼女へと視線を移した。

そう…そこには奈津子さんが立っていた。

048 『血』（後書き）

次回、いよいよ最終回！

エピソード

奈津子はただ涙を流していた。

そしてナオキくんの身体を引っ張り出した。

ズリッ…ズルルッズズズズズズ…

「…う…う…ああ」

ナオキくんは引っ張られながらわたしを見た。目からは涙を流し、わたしに助けを求めているように手を差し延べた。

ズズズ…ズズズ…

「……！」

だが、わたしは動く事も出来ず、ただ引っ張られて行く彼をみつめているだけだった。

そしてどこかへ消えて行く…。

「………。」

「………。」

わたしと刑事さんは何も言わずボツとしていた。

これは夢なのか？

現実なのか？

それとも暗示なのか？

遠くから救急車とパトカーのサイレンが聞こえて来た。

数日後 -

わたしは怪我をしていた為、市内の病院に入院していた。

コン コン

ガチャッ

「あ・刑事さん…」

ドアの向こうからニコリと笑った刑事さんが顔を出した。

「よっ！だいぶ顔色良くなったねえー。」

「おかげさまで…あと安静にしとけば大丈夫だって！」

ピースサインをするわたし。

「俺も本当は動いちゃいけないんだけどな。ジツとしてられないたちで。 ははは…」

あの後、事件はワイドショーなどに取り上げられ、わたしも刑事さ

んもマスコミの餌になった。

この事件が『催眠術』によるものだと言言しても、肝心のナオキくん本人が見つからない為、事件としては話題になったが、はっきりした証拠がない為、結局は迷宮入りになった。

「とにかく…良かったよ…君も何とか無事に生き延びて…」

「刑事さんと考えた作戦が効いたんですよ。」

「作戦って…君に奈津子が乗り移ったフリをした事かい？」

「ええ！結局はナオキくんが一枚上手ですぐにバレましたけど、時間稼ぎになったし…」

「2人で もし、奈津子が生きていたらこんな性格だろうなー？って分析した甲斐があったねー！」

「ええ！奈津子さんはあかりに似ています。表向きは明るいですけど根は暗いというか…心はいつもマイナス指向なところが…」

「しかしあれは…最後にやって来たのは…本物かい？」

「……………わかりません。でもわたし達が助かったって事は…助けてくれたとしか考えられません。」

「ああそうだな。しかし…いるものなんだな…幽霊って。」

「わたしもずっといないと思ってました。でも、暗示のせいで幽霊がいると信じ込み、暗示とわかると結局はいないんだ。でも最後には…」

「本物が出たってか？はははは…」

「びっくりですよ」

刑事さんは少しの間のと口を開いた。

「ひとつだけ気になるんだが…」

「なんですか…？」

「君や友達の前に現れてきた『奈津子』を見た者は君以外みんな死んでしまったよね？」

「ええ、ナオキなりの演出みたいですが…」

「では、本物を見た我々は…？」

「…え？」

「本物がいるとすると我々や亡くなった人達に現れたものの全てが偽者だと言い切れるだろうか…？」

「それって…本物を見た人も死んだかもしれないって事ですか？」

「…ああ。ただナオキは奈津子を見える様にしたけど、それによって作られた不安や恐怖が彼らを死へ導いただけで、直接死因を作ったワケではないだろ？もしかすると直接の死因は本物では？」

真面目な顔で刑事さんはわたしを見つめた。わたしはすぐに笑いな

がら、

「それは考えにくいですよ。現にわたしと刑事さんは本物に助けられたワケですし…」

「…そうか…そうだな。じゃあ、アレは見間違いか…」

「…え？」

「おっと。時間だ。一応、仕事復帰しててね。じゃあ行くね…」

「あ・あの!」

「ん？」

「もし…もしですよ？最後のあれも暗示だとしたら…？」

「え!？」

「ナオキくんは確かに奈津子さんに殺され、どこかに連れ去られました。だから彼の遺体はまだ発見されてません。」

「…ああ。」

「もし、それが『計画』だとしたら？最後の最後に奈津子さんが現れた。でもそれも嘘で…逃げる為の暗示だとしたら…？」

「まだ彼は生きてると?」

「かもしれない。」

「いや、多分あれは現実で…奈津子さんはナオキくんを救ってあげたんだと俺は思ってるよ。」

そういつて刑事さんはニコツと笑った。

そしてわたしもつられて笑う。

「そうですよね！心配しすぎですよね！あはは…」

「キリがないよ！じゃあ、行くね！」

「がんばって下さい」

「おう！」

ボタン。

「……………」

わたしは窓を見る。

気がつけば桜は散り、もう夏は目の前だった。

「もう…夏か。なんだかあつという間に冬は過ぎちゃってたんだなあ」

わたしは大きく深呼吸した。

シュツ！

「…え！？」

今一瞬、黒い影が見えた。

「……………」

ガタガタガタガタ

わたしの身体は一気に震えだした。

「う・嘘よ……」

わたしは窓からゆっくりと下を見える。

「ひっ……………」

そこには刑事さんが倒れていた。
屋上から飛び降りたのだ。

「きゃあああああ！」

わたしは窓から離れ、頭を押さえた。

なっ…なぜ？

「いやあああああ！」

なぜ？

なぜって？

「うううう！」

わたしの目から一気に涙が溢れた。

答えは一つしかない。

あれも『暗示』だったのだ…！

彼はまだ生きている！

わたしは体中の力が抜け座り込む。

そして横を見ると…奈津子が立っていた。

病室の角からこっちを見つめている。

「……………」

相変わらず顔は見えない。

「……………」

「……くく……あは……」

「あははははははは……」

わたしは笑った。

涙が次々と溢れ、それでも笑った。

そして、わたしは奈津子に向かって言った。

「アンタの思い通りになんかならないわ……！」

そして、わたしは勢いよく窓から身を投げた。

落ちる瞬間、思った事があった。

今そこにいた彼女は…

ナオキくんによる幻覚だろうか？

それとも…刑事さんの言うように本物の幽霊の奈津子さんだろうか？

確認せずに窓から飛び込んだわたしは少し後悔した。

少しだけ…ね？

倒れている刑事さんの姿があったという間に大きくなった瞬間、暗闇に包まれた。

ドサッ

……………。

〈END〉

《summer visit》

エピローグ（後書き）

ふいふ。無事に終わりました。一応、続編あるんですが、次の機会にしたいと思います。二ヶ月間読んで下さった方、評価や感想下さった方、色々勉強になりましたし、刺激にもなりました。ありがとうございます。また次の機会にお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6913a/>

Summer visit

2010年10月9日18時56分発行